

ロシア極東からみた東北アジア新石器時代前・中期土器群

張 恩恵

要旨

本論では、極東東部（松花江河口域・スレドネアムールスカヤ低地帯北東部・エボロン湖周辺・アムール河口域／牡丹江流域・沿ハンカ地区・沿海地方中部・沿海地方南東部）・極東西部（ゼヤ・ブレヤ平原・松嫩平原）におけるアムール編目文土器群と隆起線文土器群の型式変化を小地域単位で明らかにし、 ^{14}C 年代値の整理を行った。これにより、新石器時代前・中期における地域間の並行関係を整理した上で、極東東西の接触・交流の実態を考察した。

ロシア極東における新石器時代前・中期土器の変遷は、第Ⅰ段階（アムール編目文Ⅰ段階・隆起線文Ⅰ段階：ca. 8500～7000 BP）・第Ⅱ段階（アムール編目文Ⅱ段階・隆起線文Ⅱ段階：ca. 7000～6500 BP）・第Ⅲ段階（アムール編目文Ⅲ段階・隆起線文Ⅲ段階：ca. 6500～5800 BP）に分けて理解することができた。アムール編目文系と隆起線文系の境界については、ゼヤ・ブレヤ平原とスレドネアムールスカヤ低地帯の中間地帯となる松花江河口域と、松嫩平原と沿海地方を結ぶ牡丹江流域に求められる。東西土器文化圏を超えた接触・移動現象は、第Ⅱ段階以来に顕著化した。第Ⅱ段階の松花江河口域と牡丹江流域に隆起線文系とアムール編目文系の折衷土器型式が現れ、第Ⅲ段階になるとアムール編目文系が遠隔地（ゼヤ・ブレヤ平原：セルゲイエフカ・ノボクロフカ、韓半島中東部：文岩里）に進出したといえる。

1. はじめに

ロシア極東における新石器時代の考古学的文化の配置は、東部と西部とに二分することができる。

極東東部のアムール下流域では、精度の高い新石器時代文化編年が構築されている。現状では、土器出現期：オシボフカ文化（ca. 13000～9600 BP）¹⁾、前期：ヤミフタ文化（ca. 9600～8000 BP）→コンドン文化（古段階）（ca. 8000～6500 BP）、中期：コンドン文化（新段階）（ca. 6500～5400 BP）→マルイシェボ文化（ca. 5400～4800 BP）、後期：ボズネセノフカ文化（ca. 4800～3400 BP）という編年案が提示されている（國木田2021）。

また、同じく極東東部の沿海地方では、土器出現期：ウスチノフカー3遺跡、前期：不明、中期：ルドナヤ文化・プロトボイスマンコンプレックス・ボイスマン文化（ca. 7700～5000 BP）、後期：ザイサノフカ文化（ca. 5000～3200 BP）という順で理解されている（Багаршев 2009；Морева 2005）。土器群の特徴は、中期と後期との境で大きく変わり、前・中期には、アムール下流域～沿海地方ではアムール編目文土器群（コンドン／マルイシェボ／ルドナヤ文化）がひろがり、沿海地方南西部では刺突・連続押引・型押文土器群（ボイスマン文化）が展開する。後期になると、アムール下流域ではジグザグ櫛歯文土器群、および渦

巻・人面状の沈線文土器群（ボズネセノフカ文化）、そして沿海地方ではジグザグ沈線文土器群（ザイサノフカ文化）がひろがる。

一方、極東西部のゼヤ・ブレヤ平原（アムール中流域）と松嫩平原（嫩江流域）では、土器出現期以来、隆起線文を特徴とする土器・文化動態があることが知られている。隆起線文土器文化は、古段階のノボトロフカ文化（ca. 9700～6500 BP）と新段階のオシノボエオゼロ文化（ca. 4200～3300 BP）とに大きく二分される（大貫2011；Derevianko et al. 2017, 2020；Деревянко, Забияко ред. 2008；Коваленко 2017；Нестеров и др. 2005 など）。極東西部では、資料の制約もあり文化編年が精密化されていないが、大枠で、極東西部の隆起線文土器文化の古段階が極東東部の新石器時代前・中期、同新段階が極東東部の新石器時代後期に並行する。

ロシア極東新石器時代における東西土器文化群の関係性については、極東東西の中間に位置する三江平原一帯や牡丹江流域の様相が不明確であったため、東西二つの文化動態が二極化され対比されてきた。例えば、極東東部のアムール編目文土器群のなかに、隆起線文がしばしば共存する現象について、西部からの影響によると大まかに説明されるにとどまっていた（伊藤2004；Багаршев 2009；金恩瑩2010）。また、極東西部ゼヤ・ブレヤ平原のグロマトゥハ²⁾Ⅱ遺跡・セ

ルゲイエフカ遺跡（Окладников, Деревянко 1977）などでのアムール編目文土器の出土に関しては、東部からの拡散現象の延長線上に位置づけられるにとどまっていた（Морева 2005）。

近年、松花江河口域のビジャンー4遺跡（ロシア・ユダヤ自治州）や漁豊南城址遺跡（中国・黒龍江省）で、アムール編目文系統と隆起線文系統の折衷土器の存在が確認された（福田ほか2021；楊永才2016）。牡丹江流域（振興遺跡：黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系2001）における極東東部のルドナヤ文化やボイスマン文化の土器と隆起線文土器との共伴例にも注目する必要がある。これらの新真実から、極東東西の中間地帯に双方と強く関係する文化動態が展開した可能性があったと予察される。

本論では、ロシア極東における諸事例の検討を行い、東北アジアにおける新石器時代前・中期の土器文化群の変遷や相互関係を考察するための一側面を明らかにしたい。

2. 松花江河口域ビジャンー4遺跡出土の新資料

2-1. 土器の分類

ビジャンー4遺跡は、ロシア連邦ユダヤ自治州西部のレーニンスキー地区に所在する。2017・2018年度に、ハバロフスク地方郷土誌博物館のガブリルチュク（Габрильчук, М. А.）が当遺跡における試掘調査を行った。堅穴住居を含む大型遺構の明瞭な遺構プランは確認されていない。遺物包含層からは、新石器時代前・中期に位置づけられるアムール編目文・隆起線文土器群と細石刃・石刃石器群がまとめて出土した（福田ほか2021）。

出土土器は、焼成が良好であり、黄橙、黄褐、黒灰黄、黒褐など、多様な色調をもつ。胎土には砂粒・小礫がまじり、多孔質のものもある。文様により、1類：アムール編目文系と、2類：隆起線文系とに二大別することができる。出土資料の大半が破片であり、不確実ではあるが、1・2類の出土量に大差はない。

1類

当類には、スタンプ・櫛歯・ヘラ状工具の押捺・刺突による型押文・櫛歯文・刺突文が含まれる。文様構成・配置により、1A類（単一文様要素の列状展開）と、1B類（複数文様要素の組み合わせ・区画施文）とに細分される。極東東部に展開したアムール編目文土器群に対比することができる。

1A類（図2-1～7）

器形は平底である。底部から口縁部にむかって開き、口縁部でやや内湾するか、底部から口縁部にむかって直線的に立ち上がるものが多い。口縁部で強く

外反するものもある（同図4）。口唇部は面取りされ平坦化・内傾するか、丸みを帯びる。文様要素は、菱形・円形・逆台形型押文（同図1・2・4・5）と、刺突文（同図3・6・7）である。単一文様要素が列状に展開して文様帯を構成する。施文は口縁部付近に限られる。口唇部に刻目文を施す場合が多く、外縁に沿って1列の刻目文（同図1・6）を施すか、内外縁に沿って交互する2列の刻目文（同図3・4・7）を施す。

1B類（図2-8～11）

口縁部はやや肥厚する。肥厚部の下に横ナデツケによる凹帯が形成される（同図8・10・11）。口唇部は強く面取りされ内傾する。文様要素は、菱形型押文（角が丸みを帯びた菱形スタンプ押捺・内部に細かい条線文）・刺突文・櫛歯文・沈線文である。文様配置としては、列状刺突文により上下を区画し、その内部に鋸歯状沈線文を施すもの（同図8）と、口縁最上部に1列の櫛歯文を並べ、空白部を置いてから菱形型押文を施すもの（同図10）が特徴的である。施文は口縁部付近に限られる。口唇部の外縁に沿って1列の刻目文を施す例がある（同図8）。

2類（図2-12～17）

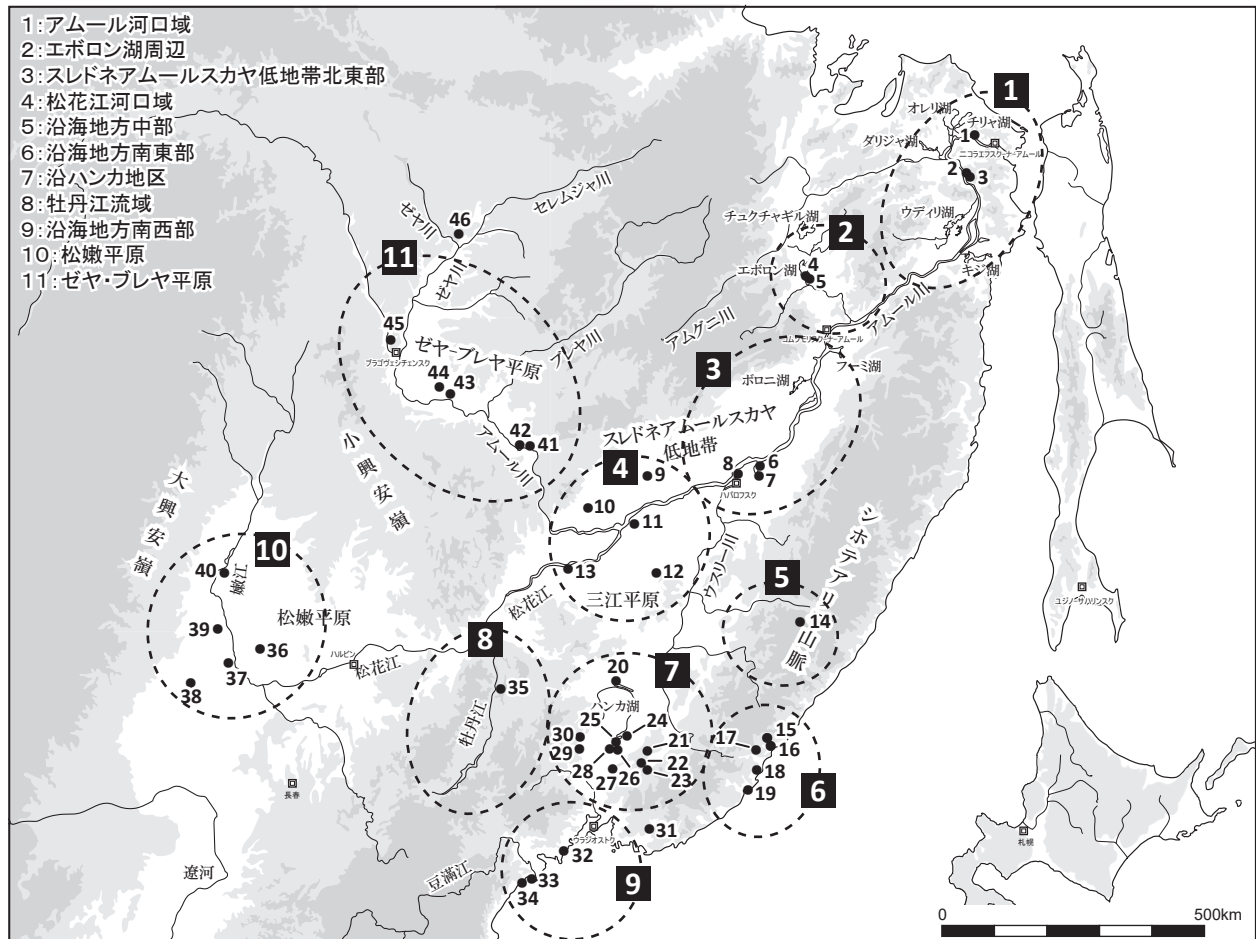
当類は、粘土紐の貼り付けによる隆起線文を特徴とする。極東西部に展開した隆起線文土器群と対比することができる。

直立口縁部がほとんどだが、内湾・肥厚口縁部もある。1B類と同様に、口縁上部に横ナデツケによる凹帯が形成される（同図12・14・16・17）。口唇部は、やや丸みを帯びるか、斜めに面取りされ内傾する。文様は隆起線文を基本とし、粘土紐を貼り付けたものの（同図12・13・15）と、短い隆起線と短沈線の組み合わせを横方向に連続させたもの（同図14・16・17）がある。文様構成としては、水平隆起線文のみを施す単純なもの（同図13・14）もあるが、水平隆起線文により上下を区画し、その内部に菱形状・鋸歯状モチーフの隆起線文を配置するもの（同図12・15～17）と、口縁最上部に1列の櫛歯文を施し、空白部を置いてから隆起線による文様帯を配置するもの（同図12・17）もある。施文範囲は胴上部まで及ぶ。口唇部の外縁に沿って1列の刻目文を施す（同図13～17）。

2-2. 周辺地域との比較

2-2-1. アムール編目文系：1A・1B類

これまで、アムール編目文土器に関しては、①文様構成・配置：単一の文様要素の水平列状展開→複数文様要素の多段・分帯施文、②施文範囲：口縁部付近→胴下部、③菱形型押文の内部装飾：なし→あり（細



1. ギルマン (Гырман) ; 2. スサニノ (Сусанино) —4; 3. マラヤガバニ (Малая Гавань) ;
4. コンドンボチタ (Кондон Почта) ; 5. ハルピチヤン (Харпичан) —4; 6. ペトロパヴロフカ (Петропавловка) —5集落 ;
7. クニャゼボルコンスコエ (Князе Волконское) —1 ; 8. アムールサナトリ (Амурский Санаторий) ;
9. ナイフェリド (Найфельд) 村集落 ; 10. ビジヤン (Биджан) —4; 11. 街津口 ; 12. 漁豊南城址 ;
13. 万里霍通 ; 14. オルリヌイクリューチ (Орлиный Ключ) ; 15. チョルトブイバロタ (Чёртовы Ворота) ;
16. ルドナヤプリスタニ (Рудная Пристань) ; 17. ウスチノフカ (Устиновка) —8 ; 18. ベトカ (Ветка) —2 ;
19. マリヤクリイボロフ (Моряк Рыолов) ; 20. 新開流 ; 21. ЛЗПЗ ; 22. シェクリヤエボ (Шекляево) —7 ;
23. ノボトロイツコエ (Новотроицкое) —2 ; 24. シニイガイ (Синий Гай) —4 ; 25. ルザノパソプカ
(Лузанова Сопка) —2・5 ; 26. チェルニゴフカ (Черниговка) —1 ; 27. オシノフカ (Осиновка) ;
28. ペトロビチイ (Петровичи)、シロティンカ (Сиротинка) ; 29. セルゲイエフカ (Сергеевка) —1 ;
30. ドボリヤンカ (Дворянка) —1 ; 31. ペレバル (Перевал) ; 32. ボイスマン (Бойсман) —2 ; 33. 西浦項 ;
34. 羅津 ; 35. 振興 ; 36. 小拉哈 ; 37. 后套木嘎 ; 38. 双塔 ; 39. 黄家圈子 ; 40. オロスコ、五福C1・4号墓 ;
41. サギボボ (Сагибово) ; 42. ノボポクロフカ (Новопокровка) ; 43. ノボペトロフカ (Новопетровка) —I ~ IV ;
44. オシノボエオゼロ (Осиновое Озеро) ; 45. セルゲイエフカ (Сергеевка) ; 46. グロマトウハ (Громатуха)

図1 対象遺跡分布および対象地域区分

条線やX字文など)、という変化があるとされてきた (伊藤2004, 2006 ; 内田2011, 2021 ; 大貫1998, 2010 ; Батаршев 2009 ; Шевкомуд 2003 ; 金恩瑩2010)。

1A類は、口縁付近で型押文 (菱形・円形・逆台形)、刺突文が水平列状に展開し、単一文様の配置・口縁部限定施文・内部装飾のない菱形型押文が特徴となる。これらは、アムール編目文土器の古手の様相を示している。類例は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部のクニャゼボルコンスコエ1遺跡にある。本遺跡では、図2-1・2・4・5にみられるような円形や菱形の型押文からなる土器が確認されている

(図3-1~5)。円形型押文を口縁最上部から施すパターンもあり (図3-1・2)、これは1A類 (図2-2・5)に対比することができる。

1B類は、文様帯の多段化が進行しておらず、施文範囲が口縁部に限られている点が、1A類と共通する。しかし、上下を区画した内部に鋸歯文を配置する点や、菱形型押文の押捺痕に条線が残る点は、1A類と異なる。つまり、1B類は1A類と同様に、アムール編目文土器の古い特徴と、区画施文や内部装飾のある菱形型押文という新しい特徴をあわせもつといえる。その類例は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東

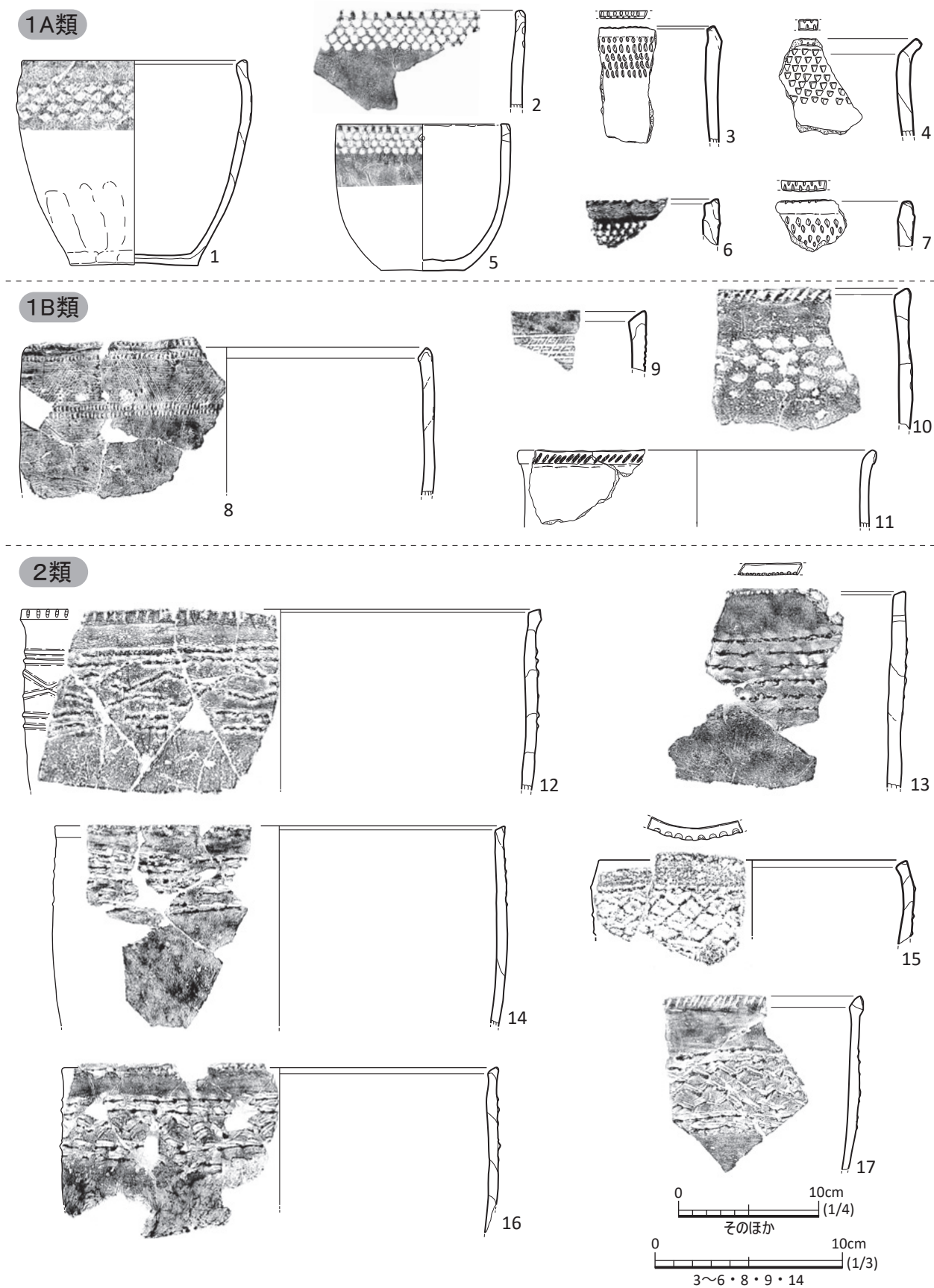
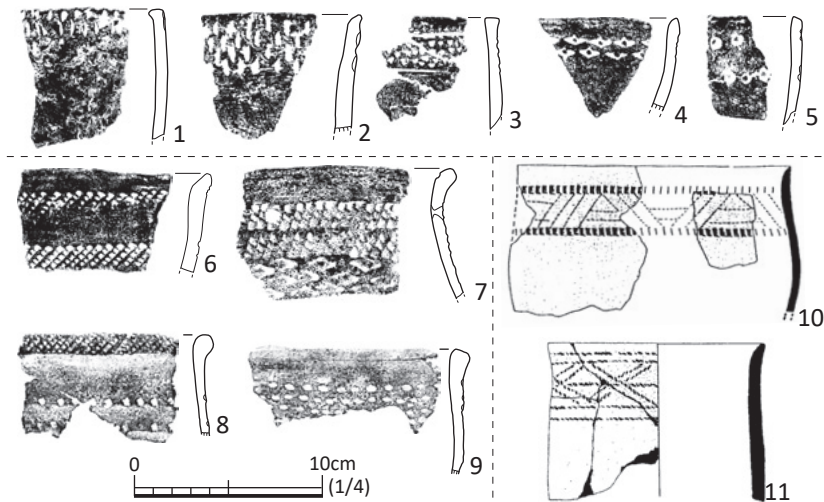


図2 ビジャンー4遺跡出土土器



1～7:クニヤゼボルコンスコエー1; 8～9:ハルピチャンー4; 10:ルドナヤ・プリスタニ;
11:シェクリャエボー7

図3 周辺地域の類例

部・エボロン湖周辺と沿ハンカ地区・沿海地方南東部の両地域の遺跡群にある。肥厚口縁部と口縁上部の凹帯をもち、口縁最上部に1列の櫛歯文が施され、空白部を置いて文様帯が配置される土器(図2-10・11)は、クニヤゼボルコンスコエー1遺跡やハルピチャンー4遺跡にある(図3-6～9)。図2-8も肥厚口縁部を有することから、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部以北の一群に関係づけられる。

一方、文様の構成・配置・モチーフは、沿海地方のシェクリャエボー7遺跡やルドナヤプリスタニ(9号住居)遺跡の土器群と対比することができる。図2-8とルドナヤプリスタニ(9号住居)の図3-10は、施文技法は異なるが、刺突文・連続押引文で区画部を形成し、その内部に沈線文・貝殻押捺文を施すという点で共通する。また、内部充填文様が鋸歯状モチーフとなり、横線の上に斜線を重ねる点も共通する。つまり、図2-8には、アムール流域方面と沿海地方方面との双方の特徴が認められるのである。

2-2-2. 隆起線文系：2類

極東西部の隆起線文土器は、主として¹⁴C年代値の分布にもとづき、新古に二分されると考えられる。そのうち古段階の土器は、松嫩平原の後套木嘎遺跡(吉林大学辺疆考古研究中心・吉林省文物考古研究所2016)やオロスC遺跡(大貫1987)にある。後套木嘎2期の隆起線文は、粘土紐の両縁を指で強く押さえつけ、隆起線の断面が三角形になる。水平文単独施文が基本となるが、口縁部に水平文、そしてその下部に幾何学文(曲線文)が配置されたものもある。施文範囲は胴上部までひろがる。オロスC遺跡の土器は、文様や口縁部の製作法に違いはあるが、後套木嘎2期と

ほぼ同じである。土器付着物の¹⁴C年代は、後套木嘎2期がca. 7100～6700 BP、オロスC遺跡がca. 6600～6500 BPである(大貫ほか2011; Kunikita et al. 2017a; 吉林大学辺疆考古研究中心・吉林省文物考古研究所2016)。

ビジャンー4遺跡の2類は、粘土紐を貼り付けた隆起線文を特徴とし、土器付着物の¹⁴C年代は6700±25 BP、6640±25 BPである(福田ほか2021)。これは、極東西部の隆起線文土器古段階に対比することができる。隆起線文系の2類と、型押文・櫛歯文・沈線文(アムール編目文系)の1B類は型式的な共通性が

高い。図2-10(1B類)は、肥厚口縁をもち、肥厚部の下部に横ナデツケによる凹帯が形成される。また、口縁最上部には1列の櫛歯文、胴部には4列の菱形型押文が配置される。一方、図2-17(2類)には、1B類と同様に肥厚口縁部と凹帯が認められ、口縁最上部には1列の櫛歯文、また胴部にはアムール編目文系の菱形型押文の文様パターンを模したような、隆起線を組み合わせた菱形文が施される。そのため、ビジャンー4遺跡では、アムール編目文系(1類)と隆起線文系(2類)とで、口縁部形態・文様構成・文様モチーフが共通するといえる。また、1B類(図2-8)の特徴となる区画施文は、2類(図2-12・15・16・17)にも共通する。つまり2類では、アムール編目文系の器形(凹帯をもつ肥厚口縁部)・文様構成(口縁最上部の1列櫛歯文配置と区画施文)・文様モチーフ(菱形文)に隆起線文系の施文技法(粘土紐の貼付)が用いられている。本遺跡が位置する松花江河口域において、アムール編目文系と隆起線文系の融合が生じた可能性が高い。

2-3. 年代的位置づけ

2-3-1. ¹⁴C年代の検討

ビジャンー4遺跡では、土器付着物の¹⁴C年代値が得られている(福田ほか2021)。先述した出土土器の分類案に従って年代を整理すると、以下のようになる。

1A類: 7895±25 BP(図2-6) 7860±25 BP
(同図2)

1B類: 6845±25 BP(同図10)

2類: 6700±25 BP(同図15) 6640±25 BP
(同図14)

1 A 類は ca. 7900 BP となる。極東東部で類例が出土したクニャゼボルコンスコエー 1 遺跡 II c 層に伴う炭化物の年代は ca. 7655～7585 BP (n=2) であり(福田ほか編 2011; Шевкомуд, Горшков 2007)、やや新しいが 1 A 類に近い。次に、1 B 類は ca. 6800 BP となる。極東東部では、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部以北のクニャゼボルコンスコエー 1 遺跡 II b 層とハルピチャンー 4 遺跡で、出土炭化物の年代は ca. 6860～6440 BP (n=8) (福田ほか編 2011; 福田・夏木編 2022; Шевкомуд, Горшков 2007) である。また沿海地方では、シェクリャエボー 7 遺跡の出土炭化物の年代が ca. 6455 BP (n=1) であり(Клюев и др. 2003)、1 B 類とほぼ並行する。最後に、2 類の年代は ca. 6700～6600 BP である。これは前述したように、極東西部の隆起線文土器古段階(后套木嘎 2 期、オロス C 遺跡: ca. 7100～6500 BP) にほぼ並行する。

2-3-2. ビジャンー 4 遺跡出土土器の編年の位置

ビジャンー 4 遺跡の土器群は 2 段階に分かれる。

古段階 (ca. 7900 BP) は、円形型押文と刺突文を特徴とする 1 A 類である。その存在は、極東東部のアムール編目文の古い段階に、松花江河口域とスレドネアムールスカヤ低地帯北東部(コンドン文化)との間に型式学的関連性があったことを示す。

一方、新段階 (ca. 6800～6600 BP) は、アムール編目文系の菱形型押文と区画施文が特徴となる 1 B 類と、隆起線文系の 2 類である。1 B 類 (ca. 6800 BP) と 2 類 (ca. 6700～6600 BP) の年代幅は重ならないが、ハルピチャンー 4 遺跡では時期差を示す出土状況は確認されていない(福田ほか 2021)。そのため、型式学的共通性の強さから、1 B 類と 2 類を同じ段階に含めておく。本段階は、極東東部のアムール編目文土器のやや新しい段階に対比される。古段階と同じく、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部(コンドン文化)との関係性が認められる。一方で類例は、沿海地方のルドナヤ文化にも求められる、列状刺突文で上下を区画し、その内部に鋸歯状沈線文を充填した要素もある。そのため、1 B 類は極東東部の多方面に関係づけられるといえる。また 2 類は、アムール編目文系の土器製作技術に隆起線文系の施文技法が組み合わさったものであり、極東東部と極東西部の折衷土器でもある。一時的に極西部の影響が及んだとみられる。

新石器時代前・中期のスレドネアムールスカヤ低地帯一帯に、アムール編目文系のコンドン式土器群が広く分布した可能性が高い。そして、ビジャンー 4 新段階になり、沿海地方やゼヤ・ブレヤ平原、松嫩平原との接触・交流が活発化したといえる。

3. 極東東部におけるアムール編目文土器の変遷

3-1. 問題の所在

新石器時代前・中期の極東東部には、アムール編目文土器を特徴とするコンドン文化とルドナヤ文化が展開した。両者は、連動しながら変遷したと理解されている(伊藤 2005, 2006; 内田 2011, 2021; 大貫 1998, 2010; Батаршев 2009; Шевкомуд 2003; 金恩瑩 2010)。

アムール下流域におけるコンドン式土器については、シェフコムード(Шевкомуд И. Я.) が 2 段階の変遷があることを明らかにしている(Шевкомуд 2003)。氏は、コンドン文化の標式遺跡となるコンドンボチタ遺跡の土器に注目の型式学的分析から、コンドン式土器群を二分した。そして、新石器時代初期・前期のオシボフカ文化やマリインスコエ文化の土器に類似する一群から、新石器時代中期後半のマリシエボ文化の土器に近い一群に変化するとし、各々古段階と新段階とした。古段階には、口縁部付近に櫛歯文のみを施す土器と、櫛歯文と型押文の組み合わせ(区画施文)からなる土器が含まれる。新段階には、菱形型押文が密集したアムール編目文と、弾帯溝文・魚鱗文・隆起線文をもつ土器が含まれる。

シェフコムード編年の妥当性は、日露共同調査で得られた出土状況と ^{14}C 年代によって再確認された。クニャゼボルコンスコエー 1 遺跡では、古段階の堅穴住居とそれに伴う土器組成(単一の文様要素の水平列状展開・口縁部限定施文・区画施文)が確認された。また、マラヤガバニ遺跡の最下層(II d 層)では、遺構 3 基が検出され、その内部と周辺から新段階の土器組成(櫛歯文・型押文・弾帯溝文・魚鱗文)が出土した。年代測定の結果、古段階は ca. 7600～6500 BP、同新段階は ca. 6200 BP となった(福田ほか編 2011; 福田・夏木編 2022)。これにより、古段階から新段階へという変化の大局が明らかとされたといえる。

沿海地方では、コンドン文化の並行期にルドナヤ文化が設定されている。土器型式の変化については、表 1 に示したように、三つの段階に分けられるということが共通認識となっている(伊藤 2005; 内田 2021; 大貫 1998; Батаршев 2009; Попов и др. 2005; 金恩瑩 2010)。各段階の土器型式内容と年代(Kunikita et al. 2007, 2017b; Kuzmin et al. 2002; Морева и др. 2008) から、古段階 (ca. 7500～7000 BP): ルドナヤ式(単一の文様要素のみを施す土器)→中段階 (ca. 7000～6000 BP): セルゲイエフカ式(複数文様要素を組み合わせた土器・文様バリエーションの多様化・隆起線文土器供出・頸部をもつ鉢形土器)→新段階 (ca. 6100～5700 BP): ベトカ式(文様帯の多段化・

表1 ルドナヤ文化の段階区分案

段階	大貫 (1998)	Багатуршев (2009)	Попов и др. (2005)	伊藤 (2005)	金恩瑩 (2010)	内田 (2021)
古	ルドナヤプリスタ ニ下層 (1号住居)	ルドナヤ式		ルドナヤ文化古段階 a・b期	ルドナヤ式スタンプ 押捺文土器段階	ルドナヤ式
中	ルドナヤプリスタ ニ下層 (9号住居)	セルゲイエフカ式		ルドナヤ文化新段階 a期	チョルトバイ・バロ タ式段階	セルゲイエフカ式
新	新開流遺跡上層		ベトカ式	ルドナヤ文化新段階 b期	マリヤク・リイボル フ式スタンプ押捺文 土器段階	ベトカ式

分帯化)、と整理される。

内田 (2021) は、極東東部のアムール編目文土器の変遷を広域的に整理した。氏は、シェフコムードの「コンドン古段階」をⅠ・Ⅱ期に分け、「コンドン新段階」をⅢ期とし、沿海地方との並行関係を考慮した上で、3期区分案を提示した。Ⅰ期は、櫛歯文と菱形型押文が主体となり、口縁部付近に単一の文様要素が列状に展開する。Ⅱ期は、施文範囲が胴上部までひろがり (アムール下流域で著しい、沿海地方はⅠ期と同様)、区画施文が流行する。Ⅲ期は、分帯化・多段化がより進み、施文範囲が胴下部まで拡張する。沿海地方では逆三角形のモチーフ、アムール下流域では魚鱗文が主たる文様となる。既往研究に照らすと、内田のⅠ期は「コンドン古段階」の一部とルドナヤ式、Ⅱ期は「コンドン古段階」の一部とセルゲイエフカ式、Ⅲ期は「コンドン新段階」とベトカ式に相当する。

現在の遺跡調査成果に従うと、アムール編目文土器は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部・エボロン湖周辺・アムール河口域・松花江河口域と、沿海地方中部・沿ハンカ地区・沿海地方南東部・牡丹江流域という広い地域に分布する (図1)。小地域性が現れた可能性は十分あるが、資料不足のため確実なことはいえない。

一方、沿海地方では、ベトカ文化、新開流文化、振興文化という文化が設定されている (Морева и др. 2008; Попов и др. 2005; 黒龍江省文物考古工作隊 1979; 黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系 2001)。これらは別々の文化として扱われることも多いが、ルドナヤ文化内の地域類型であるという指摘もある (伊藤 2005, 2006; 大貫 1998; 金恩瑩 2010)。

これに加え、極東東部でアムール編目文土器と共伴する隆起線文土器の型式特徴や年代的位置、そしてそれらの系統関係について、明らかになっていない。

以上の先行研究を踏まえつつ、次ではアムール編目文土器の型式変化について再検討を行う。

3-2. コンドン式土器

3-2-1. 関連遺跡

コンドン式土器は、小興安嶺以東のアムール流域に分布する。当該地域における地形区分 (Махинов 2006)、陸域の野生食糧資源の分布、そして遺跡分布状況を合わせた地域区分 (福田 2014, 2015) に従うと、その分布域は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部 (北緯約 50 度以南: 出土遺跡はウスリー川との合流点周辺に集中)、ゴリン川上流のエボロン湖周辺 (コムソモルスクナアムール市付近)、そしてアムール河口域 (北緯約 55 度以北) に分けられる。また、ゼヤ・ブレヤ平原とアムール下流域の境界地帯となる、松花江河口域 (スレドネアムールスカヤ低地帯南西部とウスリー川河口部を含む地域) にも、関連資料がある (図1)。

3-2-2. 分類

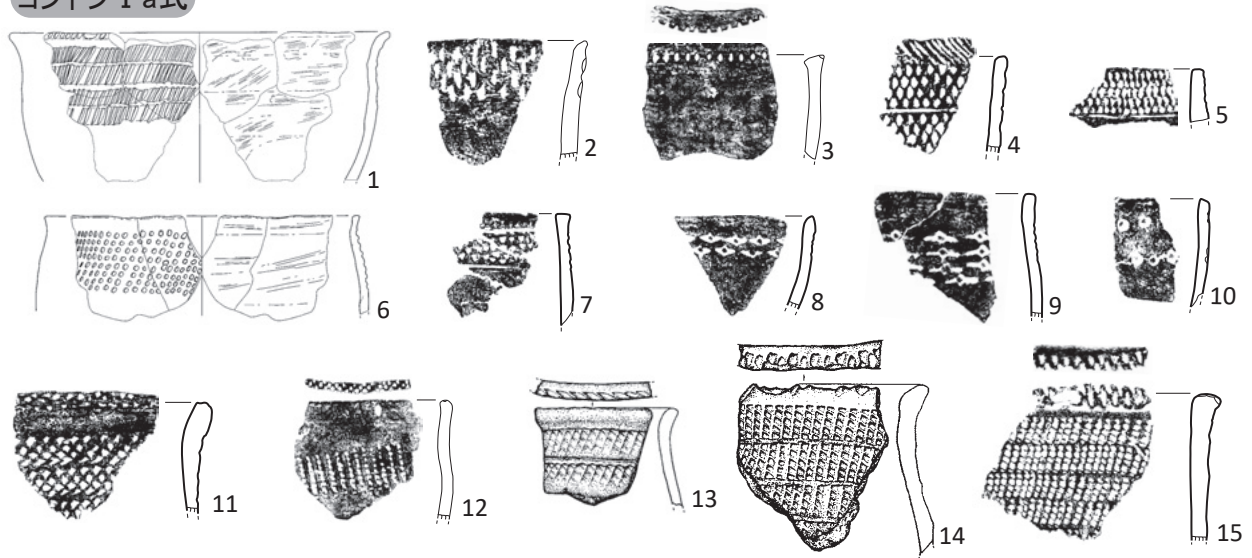
アムール編目文土器の時空的な変化を明らかにするため、以下の5項目に着目した分類を行う。

- ①文様構成: 単一の文様要素によるものか、複数文様要素を組み合わせたものか
- ②文様配置: 区画施文・多段施・分帯施文のいずれか
- ③特定文様要素: 魚鱗文・弾帯溝文・隆起線文・帯状短沈線文・曲線状沈線文・小鳥形文・鋸歯状モチーフの有無
- ④型押文の内部装飾: 点状文・細条線文・X字文のいずれか
- ⑤器形: 鉢形土器における頸部の有無

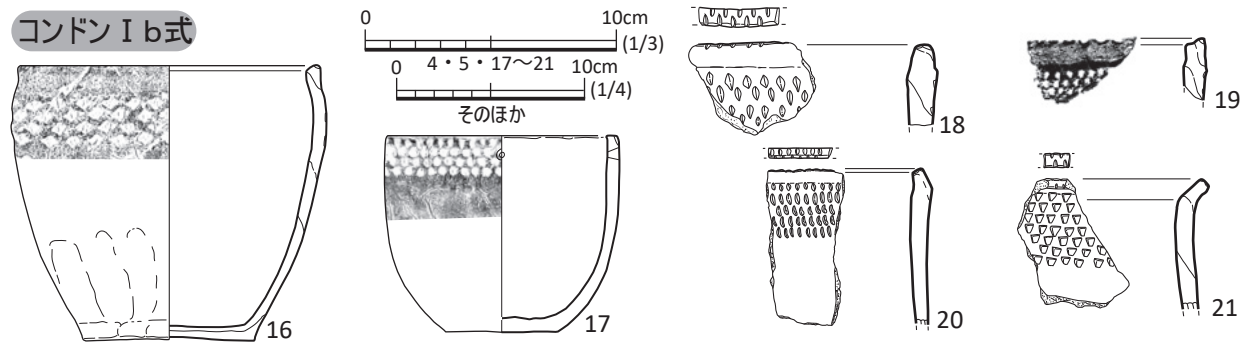
(1) コンドンⅠ式 (図4)

型押文・櫛目文・櫛歯文・刺突文の単一の文様要素が口縁部付近に列状展開する。器形は底部から口縁部にむかって開き、口縁部でやや内湾 (同図16) または外反する (同図1) ものと、底部から口縁部にむかって直線的に立ち上がるもの (同図17) がある。櫛歯文及び櫛目文の有無により、Ⅰa式とⅠb式に細分する。**コンドンⅠa式** (図4-1~15) クニヤゼボルコンスコエー1遺跡のⅡc層出土一群を指標とする。文様構成は単一文様要素からなり、型押文・櫛目文・櫛歯文を列状施文する。施文範囲は口縁付近に限られ

コンドンⅠa式



コンドンⅠb式



1～12：クニヤゼボルコンスコエー1；13・15：ペトロパブロフカ5集落；14：アムールサナトリ；16～21：ビジャンー4

図4 コンドン式土器（1）

る。型押文は、楕円形・菱形・円形のスタンプを押捺したものである。菱形型押文の内部には点状文が加わり（同図8・9）、円形型押文の内部はドーム状に凹む（同図10）。楕円形型押文のなかには、口縁部直下からのスタンプ押捺が口縁端部にまで及ぶものもある（同図2・3・5）。また、楕円形型押文の下端部または中央部に、沈線による区画を施す例もある（同図4・5・7）。これは沿海地方で見られる特徴でもあり（伊藤 2005；内田 2021）、両地域で広く採用されたと考えられる。楕目文（同図1）と楕歯文（同図6・11～15）は、列状（複列）文様配置、口縁部限定施文に類似性が認められる。

類例はスレドネアムールスカヤ低地帯北東部の遺跡群で出土しており、ペトロパブロフカ5集落遺跡（福田ほか2017；福田・夏木編2022；Габрильчук и др. 2018；Медведев, Филатова 2014a）、アムールサナトリ（Амурский Санаторий）遺跡（Медведев, Филатова 2014b）などがある。

コンドンⅠb式（図4-16～21） ビジャンー4遺跡の1A類が相当する。菱形・円形・逆台形型押文・刺突

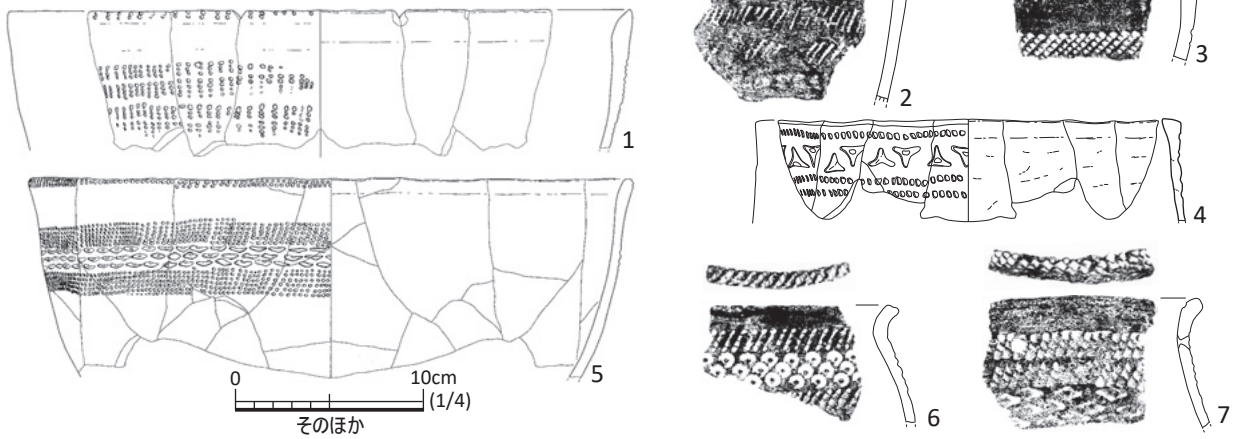
文が口縁部付近に列状展開する。円形型押文（同図17）は、押捺痕が口縁端部まで及び、コンドンⅠa式の楕円形型押文（同図2・3・5）と対比することができる。現状において、本型式は松花江河口域に分布する。

（2）コンドンⅡ式（図5）

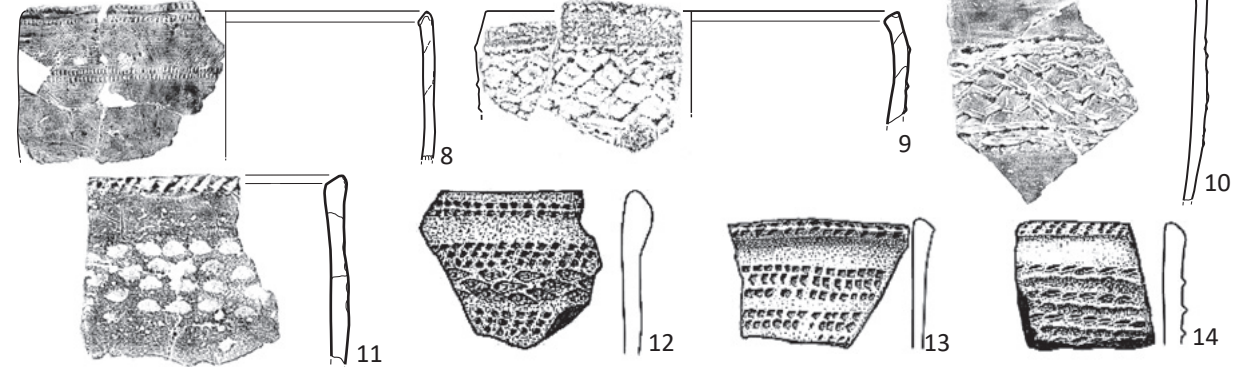
複数文様要素を組み合わせた文様構成となる。文様要素は、（列状・線状）楕歯文・（菱形・円形・三角形）型押文・（帯状短・曲線状）沈線文・隆起線文・（列状）刺突文などであり、コンドンⅠ式より種類が多い。文様配置が複雑化し、列状楕歯文を口縁最上部に1列配置して、その下に空白部を置いて複列楕歯文・楕歯文と型押文を組み合わせるもの（口縁最上部の1列楕歯文施文：同図1～3・5・11・19）と、列状・線状楕歯文で上下を区画し、その内部に菱形・円形・三角形の型押文を充填するもの（区画施文：同図4～8・12・17・23）とがある。菱形・三角形型押文の内部には、コンドンⅠ式と同じく点状文（同図4～7・12・23・24）がみられる。

隆起線文の存在が目立つ。粘土紐を貼り付けたもの（同図9）と、短い隆起線と短沈線の組み合わせを

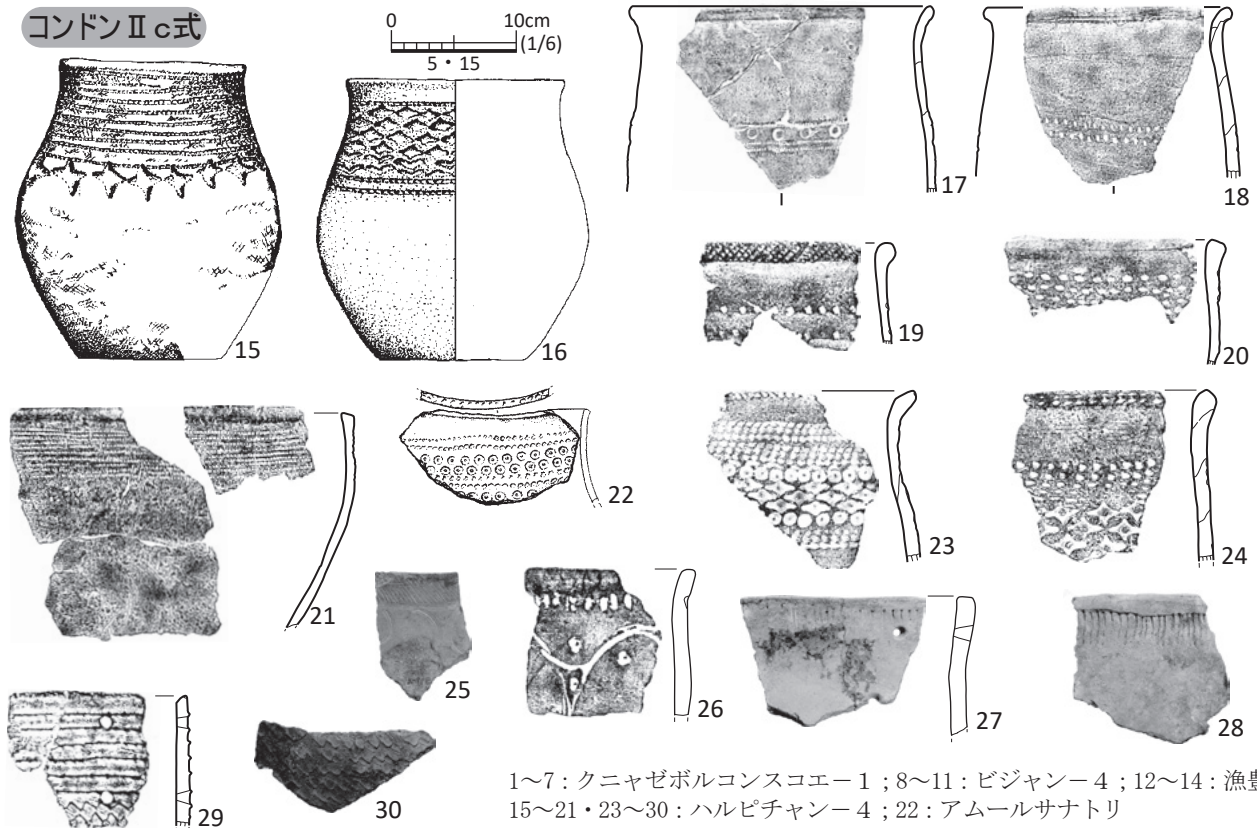
コンドンⅡa式



コンドンⅡb式



コンドンⅡc式



1～7：クニヤゼボルコンスコエー1；8～11：ビジャンー4；12～14：漁豊南城址
15～21・23～30：ハルピチャーン4；22：アムールサナトリ

図5 コンドン式土器（2）

横方向に連続させたもの（同図10・14・29）がある。文様配置（区画施文・口縁最上部の1列櫛歯文施文）と文様モチーフ（菱形モチーフ）は、型押文や櫛歯文が施される土器群と共通する。

器形は、胴上部から口縁部にむかって直線的に開き外傾するもの（同図1・5）と、胴上部から口縁部にむかって直立するもの（同図4・8・21）がある。ほかに、丸みを帯びた胴部から、緩やかに内湾して頸部を形成し、口縁上部が強く外反し、胴中部に最大径がくる一群もある（同図6・7・15～18）。頸部をもつ鉢形土器は、沿海地方のセルゲイエフカ式の特徴でもある（Батаршев 2009）。

隆起線文・列状刺突文・帯状短沈線文・曲線状沈線文の存在から、コンドンⅡ式を以下のⅡa・Ⅱb・Ⅱc式に細分する。

コンドンⅡa式（図5-1～7） クニャゼボルコンスコエー1遺跡のⅡb層出土資料を指標とする。Ⅱa式は隆起線文を含まない。列状櫛歯文による区画施文と口縁最上部の1列櫛歯文施文が多く（同図1～3・5～7）、線状櫛歯文（同図4）は少ない。

類例は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部のペトロパブロフカ-5集落・アムールサナトリ遺跡、エボロン湖周辺のコンドンポチタ・ハルピチャン-4遺跡、そしてアムール河口域のマラヤガバニ遺跡にある。

コンドンⅡb式（図5-8～14） ビジャン-4遺跡の1B類・2類が相当する。型押文・櫛歯文・隆起線文をもつ一群である。前述したように、型押文や櫛歯文の構成・配置・モチーフには、沿海地方との関係性が反映されている。刺突文で区画部を形成し、その内部に鋸歯状モチーフを充填した土器（同図8）は沿海地方にもあり、極東東部に広く分布した要素と考えられる。隆起線文には、菱形型押文を隆起線で表現した菱形モチーフ（同図9・10）がある。また、列状櫛歯文を口縁最上部に1列配置して、空白部を置いてから隆起線文を施すもの（同図10・14）、隆起線文で上下を区画し、その内部に菱形隆起線文を充填するもの（同図9・10）もある。隆起線文と型押文・櫛歯文は、ほぼ共通した文様配置・モチーフを構成するのに用いられている。

黒龍江省の漁豊南城址遺跡でもコンドンⅡb式土器がまとめて出土している（同図12～14）。松花江河口域を含む三江平原北部一帯に関連遺跡が分布するようである。

コンドンⅡc式（図5-15～30） ハルピチャン-4遺跡の一群である。櫛歯文・型押文・隆起線文・刺突文・沈線文がある。線状櫛歯文が多用され、数条の線状櫛歯文を施すか（同図15・21）、線状櫛歯文で

上下を区画し、その内部に菱形・円形型押文を充填する（同図16・17）。線状櫛歯文と型押文を上下繰り返し多段配置したものもある（同図22）。コンドンⅡa式に共通する列状櫛歯文をもつ土器（同図23・24）もあるが、少量である。隆起線文は、短い隆起線と短沈線の組み合わせを横位に連続させ、口縁部に水平文、胴部に波状文を配置する（同図29・30）。その施文技法はコンドンⅡb式に共通する。一方、波状隆起線文は、沿海地方のセルゲイエフカ式（Батаршев 2009）に対比することができる。つまり、コンドンⅡc式の隆起線文は、アムール流域と沿海地方の双方の土器群と関係する。

列状刺突文（同図18・19・20）・帯状短沈線文（同図27・28）・曲線状沈線文（同図25・26）の存在が目立つ。これらと型押文・櫛歯文とでは、器形や文様配置は共通するが、沈線施文や曲線状モチーフが異なる。ハルピチャン-4遺跡では、型押文・櫛歯文土器と刺突文・沈線文土器がまとめて出土しており、土器付着物の年代値も揃っている。内田ほか（2022）は、刺突文・沈線文土器をコンドン式のバリエーションの一つとしている。系統関係は不明であるが、同型式内にあると判断しておく。

Ⅱc式土器はエボロン湖周辺のハルピチャン-4遺跡のみで確認されている。分布域は限られるのかもしれない。

（3）コンドンⅢ式（図6）

アムール河口域のマラヤガバニ遺跡の最下文化層（Ⅱd層）から出土した一群を指標とする。

弾帯溝文や魚鱗文の存在から、コンドンⅠ・Ⅱ式とは区別される。弾帯溝文は、2～数条の水平沈線文を施し、その内部またはその上に重ねて、斜行櫛歯文・斜行沈線文・刻目文を施す。主に口縁部に帯状展開する。胴部は無文なるか（同図3・6）、魚鱗文や菱形型押文を配置する（同図5・9～11・13・17～19・22）。魚鱗文は、半竹管状工具の押捺を密に繰り返し、アムール編目文と同様の文様効果を果たす（同図4・5・8・9・11・12・17）。ほかに隆起線文があり、コンドンⅡ式の水平文・菱形文・波状文に、垂直文が加わる。口縁部に弾帯溝文と水平隆起線、胴上部に菱形隆起線文、そして胴下部に垂直隆起線文を施すもの（同図1）や、複条の波状・水平隆起線を口縁部から胴上部まで緻密に施し、胴下部に垂直隆起線を配置するもの（同図2）がある。

口縁部-胴上部-胴下部に、それぞれ別の文様帯を形成するものが多い（同図1・5・9～13）。文様帯は、口縁部～胴下部にひろがる例（同図1・2・4・5・12）のほかに、口縁部に限られる例（同図3・

コンドンⅢ式

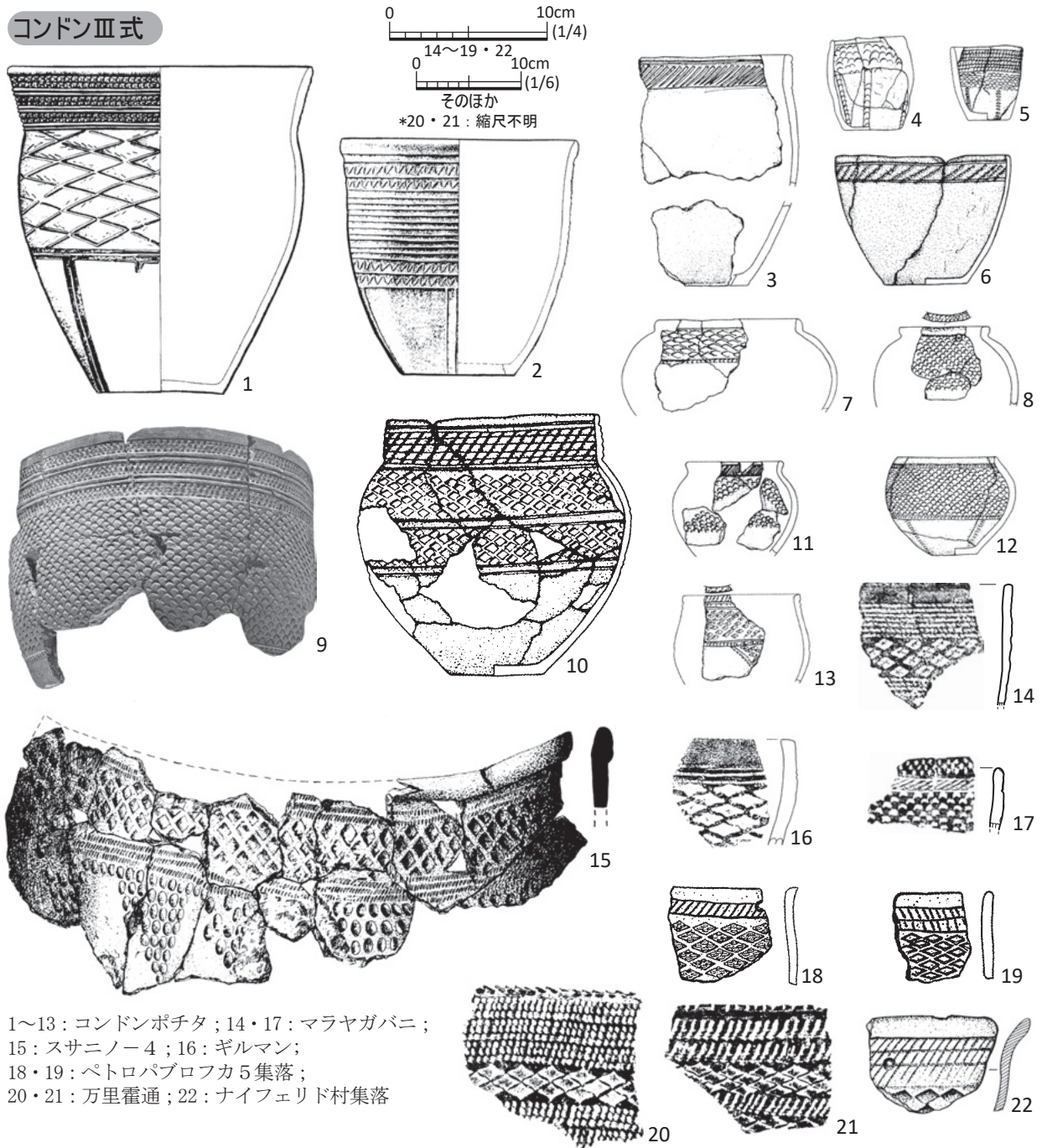


図6 コンドン式土器 (3)

6) もあり、多様である。コンドンⅡ式のように、口縁最上部に1列の櫛歯文を並べ、空白部を置いてから菱形型押文を施すものはない。区画文として列状櫛歯文ではなく、線状櫛歯文・水平沈線文を用いる点(同図10・14・15)は、Ⅱ式と異なる。

胴部文様帯の下段部に鋸歯状モチーフが展開する例(同図13・15)がある。これは、沿海地方のベトカ式特徴である(内田2021; Морева и др. 2008)。菱形型押文の内部装飾としてX字文が用いられており、Ⅱ式より装飾性が高い。

器形が多様化する。底部から直線的に立ち上がり、口縁部で直立するか(同図3)、やや外傾する(同図2)。底部から胴部にむかって開き、口縁上部でくびれて外傾するものもある(同図1)。Ⅱ式に特徴的な頸部をもつ鉢形土器もあるが、頸部と胴部の境界が明確であり、最大径が頸部付近に上がる点は異なる(同図7・8・10・11)。

類例は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部のペトロパブロフカ5集落遺跡、エボロン湖周辺のコンドンポチタ遺跡、そしてアムール河口域のスサニノー

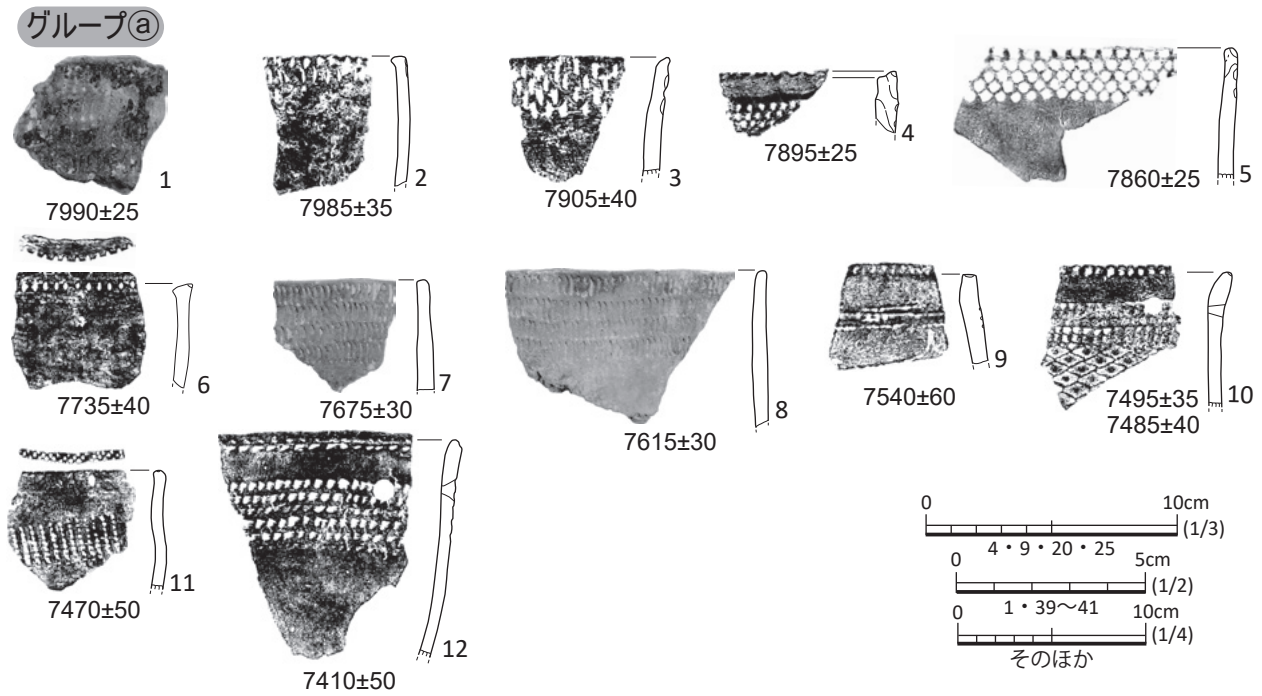


図7 コンドン式土器付着物の¹⁴C年代(1)(単位:BP)

4 (Конопацкий 1990)・ギルマン(加藤 1998)遺跡などにある。

ほかに、松花江下流域の万里霍通遺跡(郝思德 1984)に、文様帯の多段化が目立つ土器がある(同図 20・21)。また、ビラ川流域下流域のナイフェリド村集落遺跡(Деревянко и др. 1999)には、口縁部に弾帯溝文、胴部に菱形型押文をもつ土器(同図 22)がある。破片が小さく型式内容を読み取りにくい、弾帯溝文の存在からコンドンⅢ式に含まれる。これらは採集品であるが、松花江河口域におけるⅢ式の分布を示す重要な資料である。

3-2-3. ¹⁴C年代の検討

(1) 土器付着物の¹⁴C年代(図7～9/表5)

クニヤゼボルコンスコエー1・ペトロパブロフカール5集落・ハルピチャン-4・マラヤガバニ・ビジャン-4遺跡で出土したコンドン式土器のうち、型式内容が判別可能な口縁部片・胴部片41点の付着炭化物の¹⁴C年代が43点報告されている(Fukuda et al. 2022)(表5)。それらの分布傾向は、以下の四つのグループ(①・②・③・④)に分かれる。

グループ①(図7-1～12) コンドンⅠa式(同図1～3・6～9・11・12)とⅠb式(同図4・5)が含まれる。櫛目文・型押文・櫛歯文からなる単一の文様要素が口縁部付近に列状に展開する。このうち櫛目文は本グループのみにあり、存続期間が短い可能性がある。

同図10は、マラヤガバニ遺跡Ⅱd層でグループ④

の土器群と一緒に出土している。櫛歯文と型押文の組み合わせは、グループ②の土器群(同図14・15)と共通する。出土状況や型式学的特徴から、得られた年代よりは新しく扱う必要がある。本グループの年代はca. 7990～7410 BPである。

グループ②(図8-13～24) コンドンⅡa式(同図13～16・18・19)とⅡc式(同図17・21～24)が含まれる。口縁最上部の1列櫛歯文施文と、櫛歯文と型押文の組み合わせによる区画施文が認められる。グループ①に比べ、文様帯の区画化が進んでいる。ほかに、帯状短沈線文と曲線状沈線文がある。型押文・櫛歯文は、施文技法・文様配置・モチーフは異なるが、年代はほぼ並行する。同類は、グループ③にもあるため(同図25・29)、存続期間に時間幅があったと考えられる。本グループの年代はca. 7390～7125 BPである。

グループ③(図8-25～35) コンドンⅡb式(同図31・34・35)とⅡc式(同図25～30・32・33)が含まれる。線状櫛歯文や隆起線文が特徴的である。線状櫛歯文には、口縁部に数条施すもの(同図27)と、線状櫛歯文で上下を区画し、その内部に三角形型押文(同図30)・斜行櫛歯文(同図32)を充填するものがある。多条化した線状櫛歯文は、グループ④(同図37)の特徴でもある。一方、グループ①とグループ②に主体的な列状櫛歯文は、口縁最上部文様帯に限定的に用いられ(同図31)、1点だけ確認されている。列状櫛歯文から線状櫛歯文に変化すると指摘されており(内田2021)、グループ②とグループ③との間にその

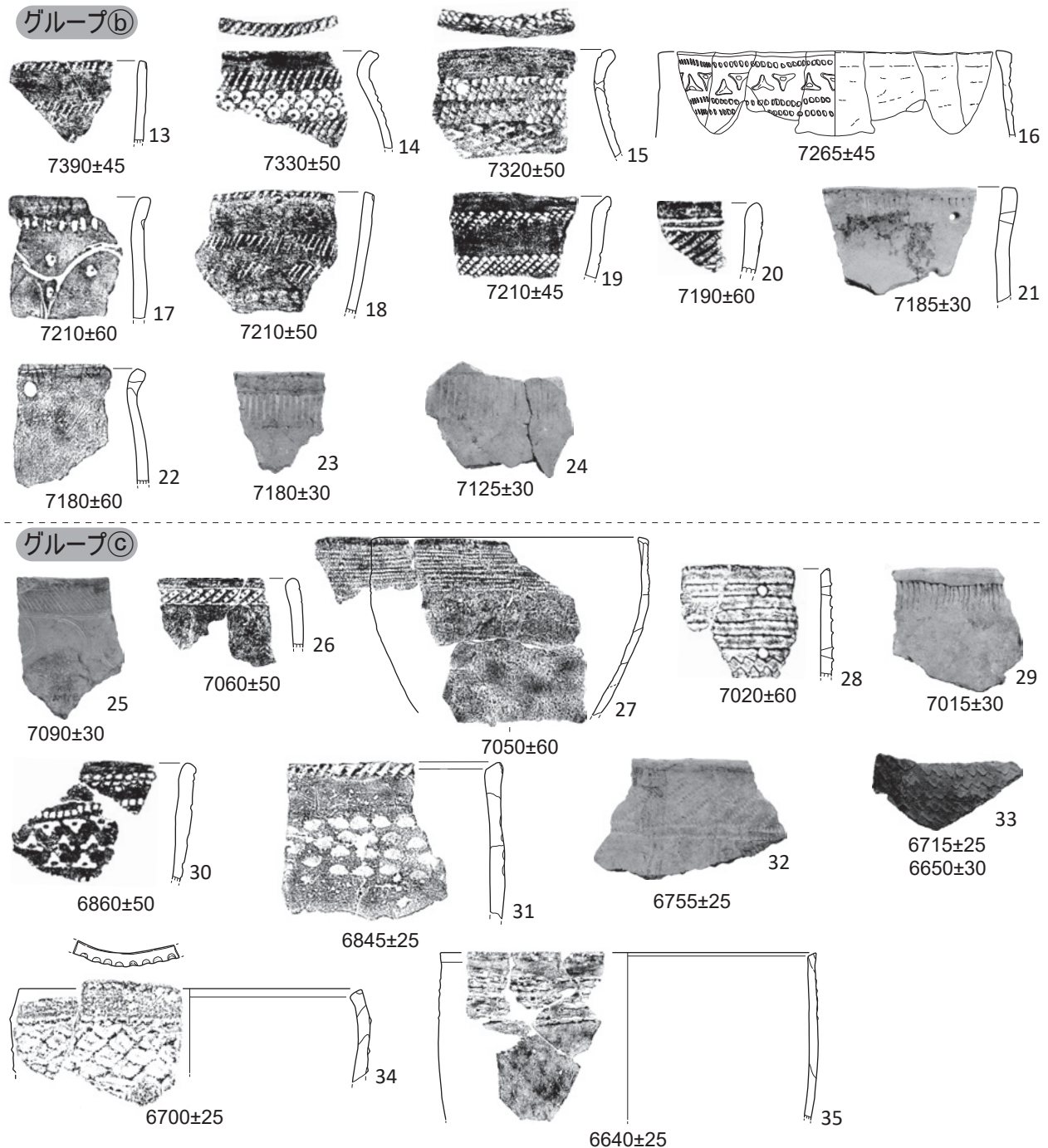


図8 コンドン式土器付着物の¹⁴C年代(2)(単位:BP)

転換点を求められる可能性がある。本グループの年代はca. 7090～6640 BPである。

グループd (図9 - 36～41) 弾帯溝文(同図36・40・41)・魚鱗文(同図38・39)・線状櫛歯文と菱形型押文の組み合わせ(同図37)をもつコンドンⅢ式のみが含まれる。弾帯溝文と魚鱗文は、コンドン文化の最新段階の指標とされ(内田2021; Шевкомуд 2003)、土器付着物の年代は、そのことを裏付ける。ただし弾帯溝文自体は、グループbとグループcにも

ある(図8 - 20・26)。年代がca. 6600～6290 BPに集中することから、弾帯溝文はグループdの時期に主体的に用いられたと考えられるが、その前から存在していた可能性も排除することはできない。

以上の結果から、グループa(コンドンⅠa・Ⅰb式)→グループb(コンドンⅡa・Ⅱc式)→グループc(コンドンⅡb・Ⅱc式)→グループd(コンドンⅢ式)という順を導き出すことができる。

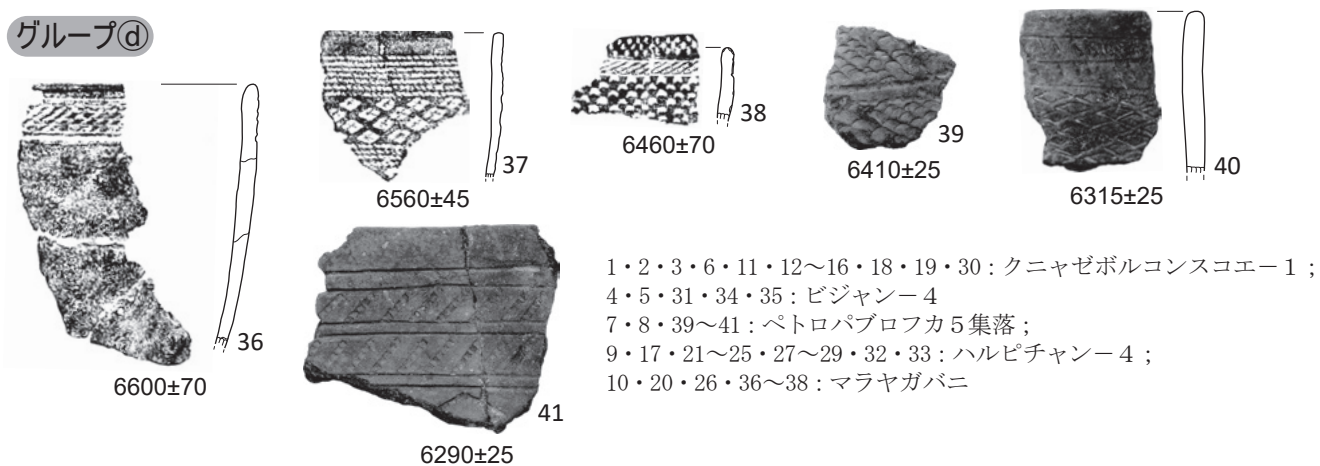


図9 コンドン式土器付着物の¹⁴C年代(3)(単位:BP)

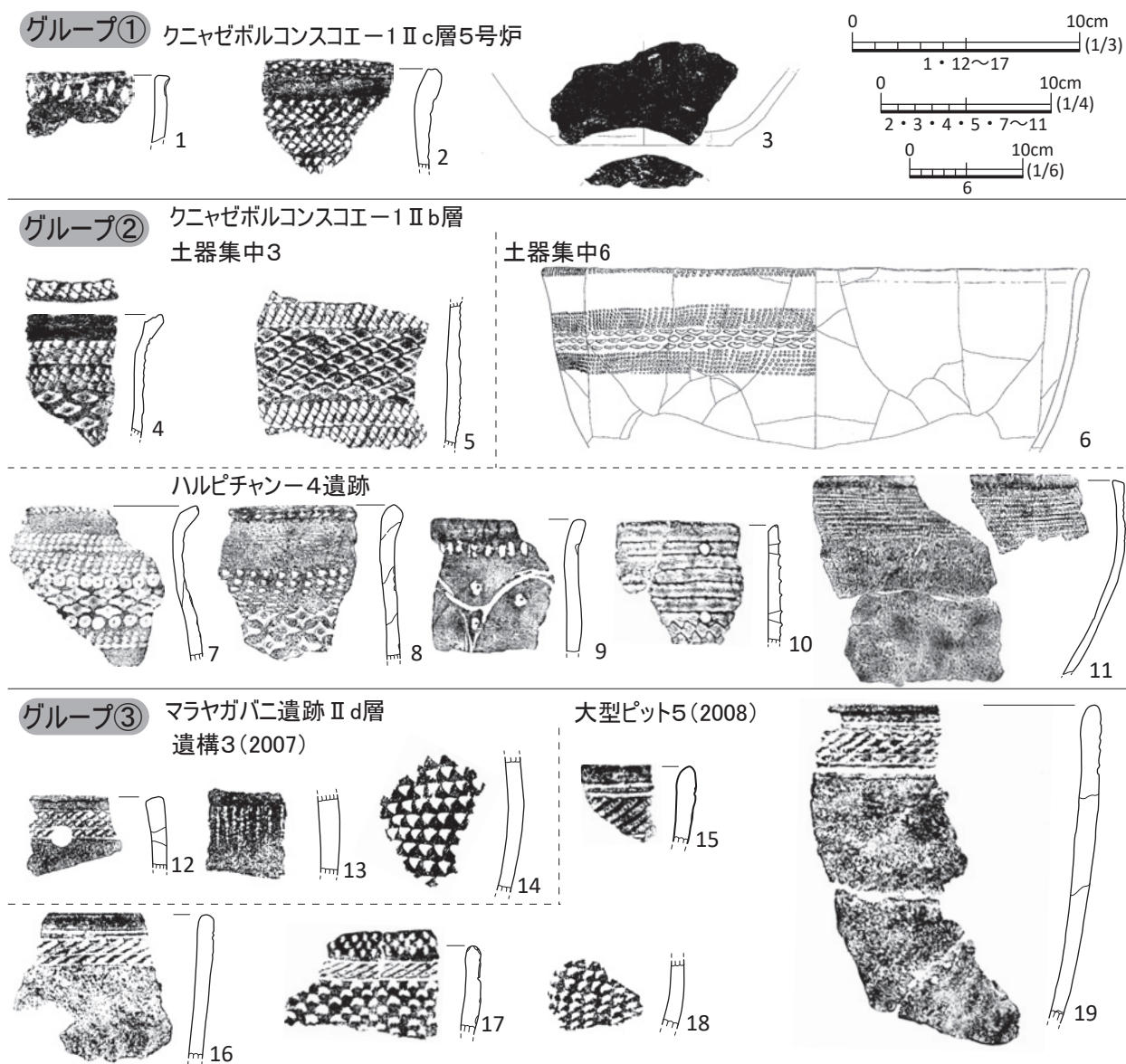


図10 遺構・包含層出土コンドン式土器と炭化物の¹⁴C年代グループ

(2) 遺構・包含層出土炭化物の¹⁴C年代 (図10)

クニャゼボルコンスコエー1・ハルピチャンー4・マラヤガバニ遺跡で出土したコンドン式土器に伴う出土炭化物の¹⁴C年代値計14点が報告されている(表5)。それらの分布傾向は、以下の三つのグループ(①・②・③)に分かれる。

グループ①(図10-1~3) クニャゼボルコンスコエー1遺跡II c層の出土資料が相当する。II c層(遺物包含最下層)から1号住居が検出された。住居の床面中央付近に4・5・6号炉(切り合い関係:5号→4・6号)がともなう。5号炉から、楕円形型押文をもつ口縁部片(同図1)と、列状櫛歯文をもつ口縁部片(同図2)、そして平底の底部片(同図3)が出土した。単一の文様要素が口縁部付近に施される。コンドンI式に相当する。4・5号炉内で採取された炭化物の年代はca. 7655~7585 BPである(福田ほか編2011; Шевкомуд, Горшков 2007)。

グループ②(図10-4~11) クニャゼボルコンスコエー1遺跡II b層と、ハルピチャンー4遺跡の出土資料である。

クニャゼボルコンスコエー1遺跡(2006年調査区第1発掘区)のII b層とII c層との境界面で、土器集中3・6が検出された。土器集中3には、口縁部片1点と胴部片1点が含まれる(同図4・5)。ともに列状櫛歯文で文様帯の上下を区画し、その内部に菱形型押文を施す。土器集中6には、鉢形土器1個体が含まれる(同図6)。口縁部直下に1列の櫛歯文を施し、空白を置いてから、胴部に櫛歯文と菱形型押文の組み合わせ(区画施文)を配置する。伴う出土炭化物の年代は、ca. 6760~6845 BPである。さらに、2006年調査区第1発掘区のII b層と層位的に一致すると報告された2009年調査区第3発掘区II b層では、ca. 6780~6545 BPという年代が得られている(福田ほか編2011)。一方、ハルピチャンー4遺跡の2015年テストピット出土土器群には、列状・線状櫛歯文と型押文の組み合わせ、線状櫛歯文、刺突文、沈線文、隆起線文がすべて認められる(同図7~11)。伴う出土炭化物の年代はca. 6860~6440 BPである(福田・夏木編2022)。

クニャゼボルコンスコエー1遺跡II b層からはコンドンII a式、ハルピチャンー4遺跡からはコンドンII c式が出土している。両者に伴う炭化物の年代幅はほぼ重なるが、後者のほうがやや新しい。

グループ③(図10-12~19) マラヤガバニ遺跡II d層の遺構3(2007年第1調査区第1区画)、大型ピット5(2008年第1調査区第2区画)の出土資料である。遺構3には弾帯溝文と魚鱗文をもつ土器が伴い(同図12~14)、大型ピット5からも同類がまとまって出

土した(同図15~19)。これらはコンドンIII式に相当し、伴う出土炭化物の年代はca. 6185~6210 BPである(福田・夏木編2022)。

3-2-4. コンドン式土器の展開

コンドン式土器は、1段階(I a・I b式:グループ①・②)、2段階(コンドンII a・II b・II c式:グループ③・④・⑤)、3段階(コンドンIII式:グループ⑥・⑦)と変遷する。これらはそれぞれ、内田(2021:97頁)のコンドンI期・II期・III期におおよそ対応する。

出土炭化物のグループ②の¹⁴C年代に関しては、土器附着物のグループ③とグループ④の差にもとづき、細分することができる。つまり、2段階は前半と後半とに区分することができる。前半(グループ③)はクニャゼボルコンスコエー1遺跡II b層(コンドンII a式)とハルピチャンー4遺跡(コンドンII c式の一部)の資料であり、列状櫛歯文と型押文の組み合わせ・弾帯短沈線文・曲線状沈線文が特徴となる。後半(グループ④)はビジャンー4遺跡(コンドンII b式)とハルピチャンー4遺跡(コンドンII c式の一部)の資料である。線状櫛歯文が主体となるが、前半の特徴である弾帯短沈線文・曲線状沈線文も残っている。

隆起線文の存在にも注目したい。隆起線文は弾帯溝文や魚鱗文とともに最新段階に位置付けられてきた(内田2021; Шевкомуд 2003)。しかし隆起線文は、グループ④とグループ⑤に含まれるので、弾帯溝文や魚鱗文が含まれるグループ⑥・グループ⑦より先行し、2段階後半の土器組成に含まれると考えられる。

コンドン式土器の地域性に関しては、以下の通りである。

1段階は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部(コンドンI a式)で櫛歯文が多く採用され、松花江河口域(コンドンI b式)ではその存在は不明確である。

2段階前半は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部(コンドンII a式)で、列状櫛歯文・型押文の区画施文・口縁最上部の1列櫛歯文施文が普及する。エボロン湖周辺(コンドンII c式の一部)では、列状櫛歯文と型押文に刺突文や沈線文が伴う。松花江河口域では、1段階と2段階後半に、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部やエボロン湖周辺に関係する土器が分布することから、本段階にも小興安嶺以東のアムール流域に対比可能な一群が存在したと予察する。

2段階後半は、エボロン湖周辺(コンドンII c式の一部)に、線状櫛歯文・型押文・波状隆起線文・刺突文・沈線文をもつ土器がある。刺突文と沈線文は、2段階の前半~後半の本地域に限られている。松花江河

口域（コンドンⅡb式）にも、エボロン湖周辺と同様に、櫛歯文・型押文と隆起線文がある。波状隆起線文はないが、両地域の隆起線文は施文技法（貼り付け、短い隆起線と短沈線の組み合わせ）は共通する。スレドネアムールスカヤ低地帯北東部では、隆起線文が発見されていないが、本段階のエボロン湖周辺に対比可能な土器（線状櫛歯文：図8-30）がある。櫛歯文・型押文と隆起線文からなる土器組成は松花江河口域とエボロン湖周辺にあり、アムール川を通じてそれらの中間となる本地域でも、隆起線文は今後みつける可能性はある。

3段階は、コンドンⅢ式が小興安嶺以東のアムール流域の南北にひろがる。スレドネアムールスカヤ低地帯北東部のペトロパブロフカー5遺跡（図6-18・19）とアムール河口域のマヤガバニ遺跡（図6-14・17）との間で比較すると、両者とも弾帯溝文や菱形型押文をもち、顕著な地域差は認められない。また、松花江河口域のナイフェリド村集落遺跡にも、口縁部に弾帯溝文、胴部に菱形型押文をもつ土器がある（図6-22）。限られた資料数のなかでの推測になるが、アムール流域に弾帯溝文と菱形型押文の組み合わせを特徴とする同類の土器群がひろがった可能性がある。

3-3. ルドナヤ式土器

3-3-1. 関連遺跡

ルドナヤ式土器は、沿ハンカ地区とロシア沿海地方南東部を中心に分布する。また、ウスリー川支流（沿海地方中部）と中国領牡丹江流域にも類例がある（図1）。

3-3-2. 分類

アムール編目土器の分類指標とした五つの項目に着目し、ルドナヤ式土器をⅠ式～Ⅲ式に分ける。

（1）ルドナヤⅠ式（図11）

ルザノバソプカー2遺跡とルドナヤプリスタニ遺跡下層の出土資料である。

文様は単一の文様要素からなり、型押文や刺突文の列状施文が主となる。稀に、鋸歯状モチーフもある（同図5-14）。施文範囲は口縁付近に限られる。型押文は、円形・楕円形・菱形のスタンプを押捺したものである。ルザノバソプカー2遺跡における形態分析（Батаршев 2009: 65）によれば、主に略円形スタンプが用いられている（楕円形・円形：43.5%、菱形：36.4%）。ほかに、型押文の下端部に沈線による横区画（沈線による縦区画（同図1）も1点あり）を施すこともある（同図1-5～8・20・24）。口唇部には、縄側面押捺文（同図1）・菱形型押文（同図3）・沈線文（同図5）・刻目文（同図4-6・7など）を施

す。器形は、底部から口縁部にむかって直線的に開き、口縁部で直立するものと（同図2-24）、膨らみを帯びた胴部と直立する口縁部をもつもの（同図15-20）がある。

類例は、沿ハンカ地区のオシノフカ（伊藤・加藤編2004）・ペトロビチイ（Батаршев 2009）・チェルニゴフカー1（Батаршев 2009）遺跡、そして沿海地方南東部のウスチノフカ（Устиновка）-8（第6層）遺跡（伊藤・加藤編2005）などにある。

（2）ルドナヤⅡ式（図12）

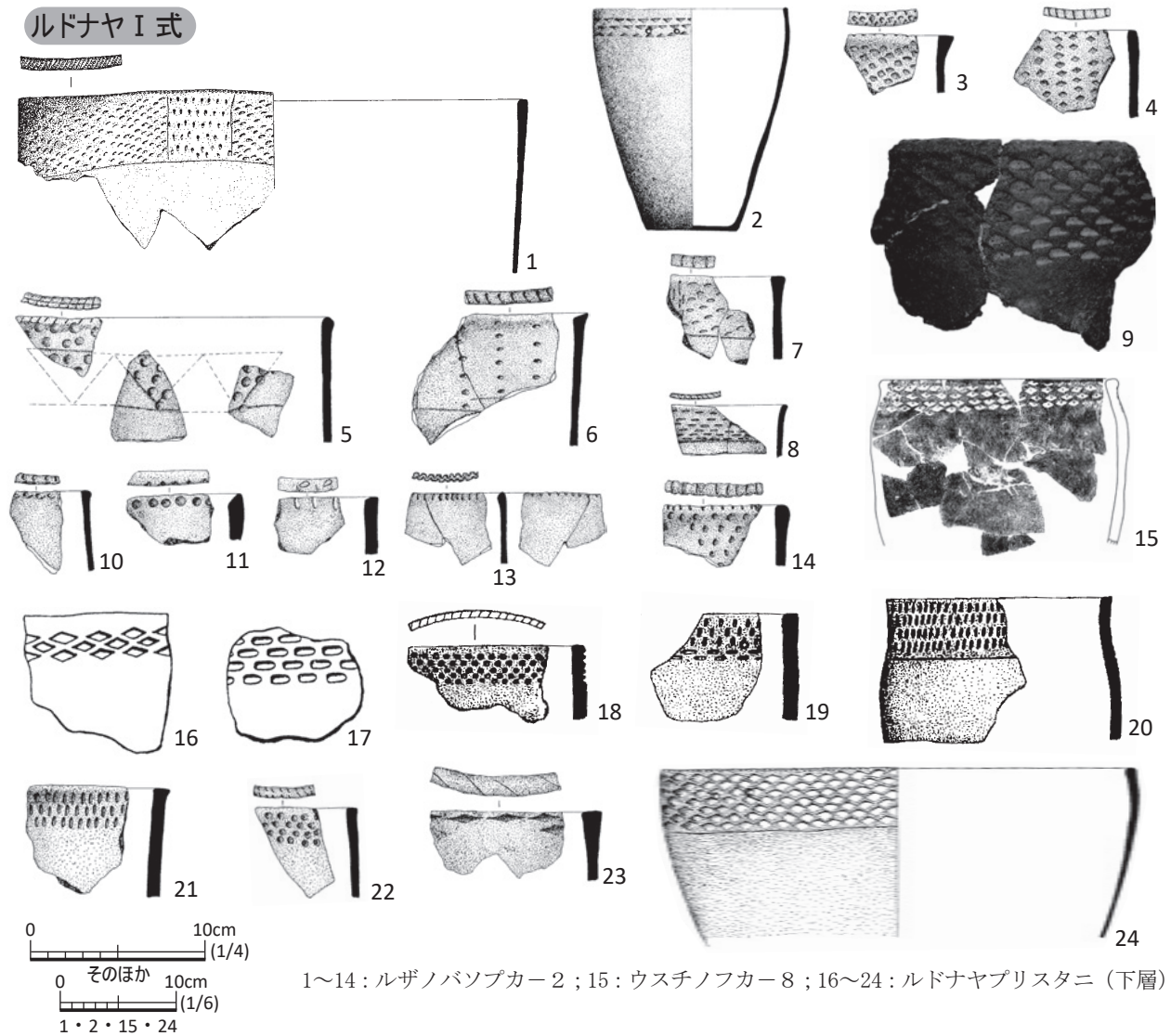
複数文様要素を組み合わせた文様構成である。文様要素は、（列状・線状）櫛歯文・（菱形・対向三角形・小鳥形・括弧形・長方形）型押文・隆起線文・縄側面押捺文・貝殻側面押捺文・連続押引文などである。コンドンⅡ式と同じく、種類が豊富である。また、文様帯の区画・多段化が認められる。列状・線状櫛歯文・連続押引文・縄側面押捺文で上下を区画し、その内部に菱形・対向三角形・小鳥形・括弧形の型押文を充填するか（区画施文）（同図1-2・6・7・11など）、線状櫛歯文・連続押引文・小鳥形型押文・括弧形型押文を帯状に施し、4～5段配置する（多段施文：同図4-12・14～16・18・27・35）。鋸歯状モチーフも少量ある（同図19・22・26）。ほかに、隆起線文がある（同図13・20・23・24・30～34・39～41）。数条の波状隆起線文を施すもの（同図23）と、水平隆起線で区画部を形成し、その内部に波状隆起線を配置するもの（同図13・20・30・33）がある。器形と文様配置（区画施文）は、型押文・櫛歯文と共通する。

器形は、Ⅰ式と同様に膨らんだ胴部と直立口縁部をもつもの（同図23・26）と、丸みを帯びた胴部から、緩やかに内湾し頸部を形成するものがある。頸部をもつ一群は、口縁上部で強く外反する広口（同図1-4・11・18・19・27・28）と、頸部と胴部との境界ははっきりとした狭口（同図13・17・20・21）とに分かれる。前者は、コンドンⅡ式（図5-15～18）にも存在し、極東東部で広く採用された特徴であろう。

ルドナヤⅡ式は、列状櫛歯文の採用の違いにより、Ⅱa式とⅡb式とに細分することができる。

ルドナヤⅡa式（図12-1～24） セルゲイエフカー1・シェクリャエボー7遺跡の資料を基準とする。列状櫛歯文を用いた区画施文（列状櫛歯文区画、菱形・対向三角形型押文充填）が含まれる（同図1-2・6・7・11・17・21）。これはコンドンⅡ式（図5-5～7・12・23・24）と共通する。

バタルシェフ（Батаршев С. В.）の分析によると、Ⅱa式土器にはシャモットが混和されている（Батаршев 2009: 107）。シャモット混和技術に関して



1～14：ルザノバソプカー 2；15：ウスチノフカー 8；16～24：ルドナヤプリスタニ（下層）

図11 ルドナヤ式土器（1）

は、小興安嶺以東のアムール流域の新石器文化にその起源を求める説がある（Мыльникова 1999）。この説を肯定的に捉えれば、沿ハンカ地区とアムール流域との間に製作技術上の関係性が求められることになる。

類例は、ドボリャンカー 1（Клюев, Гарковик 2008）・チェルニゴフカー 1・シロティンカ・ペトロビチイ・オシノフカ・シニイガイ 4（Батаршев 2009）・ノボトロイツコエ 2（Клюев, Гарковик 2008）・ЛЗП-3（Клюев, Пантюхина 2006）遺跡などにある。沿ハンカ地区に遺跡の分布が集中している。**ルドナヤⅡb式**（図12-25～41） チョルトブイバロタ（洞窟開口部、洞窟内部の住居）・ルドナヤプリスタニ（9号住居）遺跡でまとまっている。

文様要素・文様配置（区画施文・多段施文）・波状隆起線文の有無・器形については、Ⅱa式と大差がない。ただしⅡb式には、列状櫛歯文をもつ土器が稀にある（同図29）。列状櫛歯文ではなく縄側面押捺文

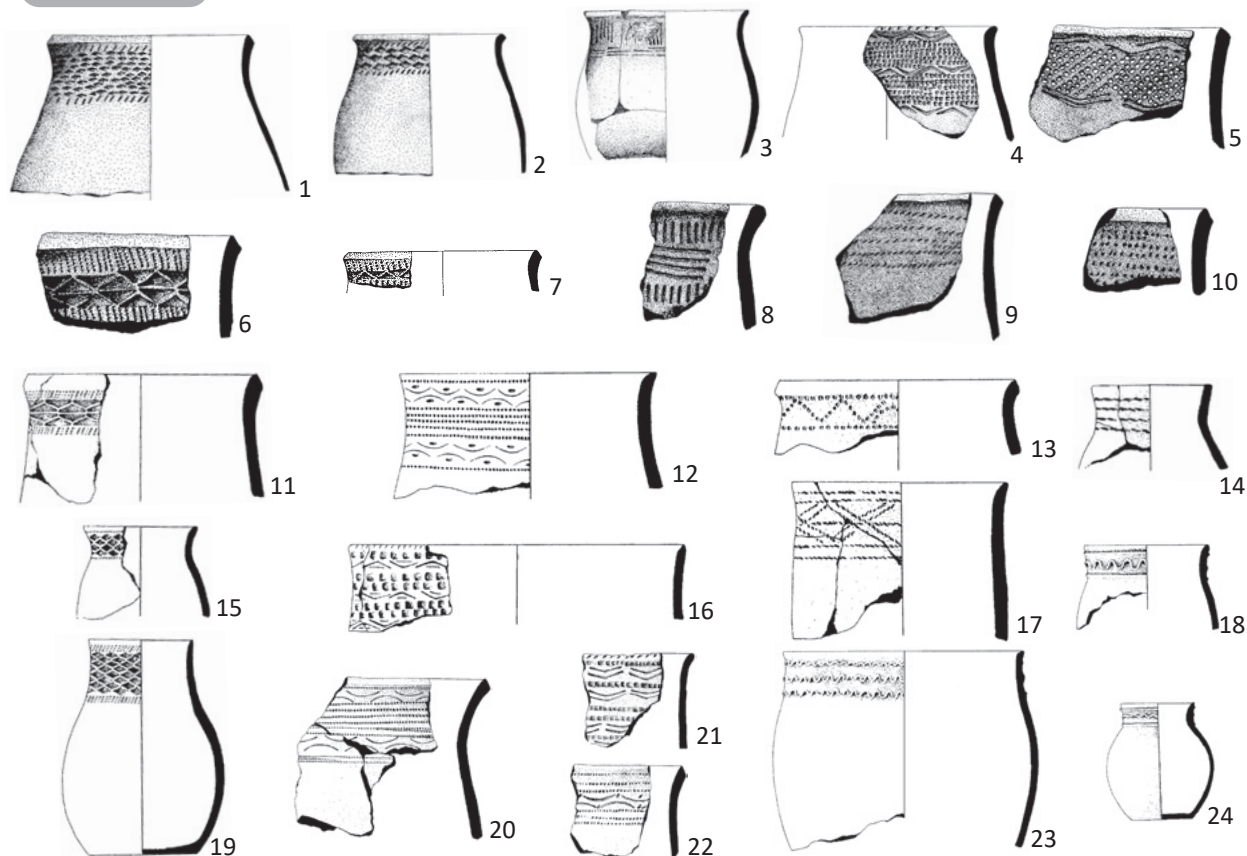
や連続押引文による文様帯区画が特徴となる（同図25・26・36・38）。またⅡb式の土器にシャモット混和は認められないとされる（Батаршев 2009: 107）。

類例はウスチノフカー 8 遺跡で採集されている。現状で、その分布は沿海地方南東部に限られている。

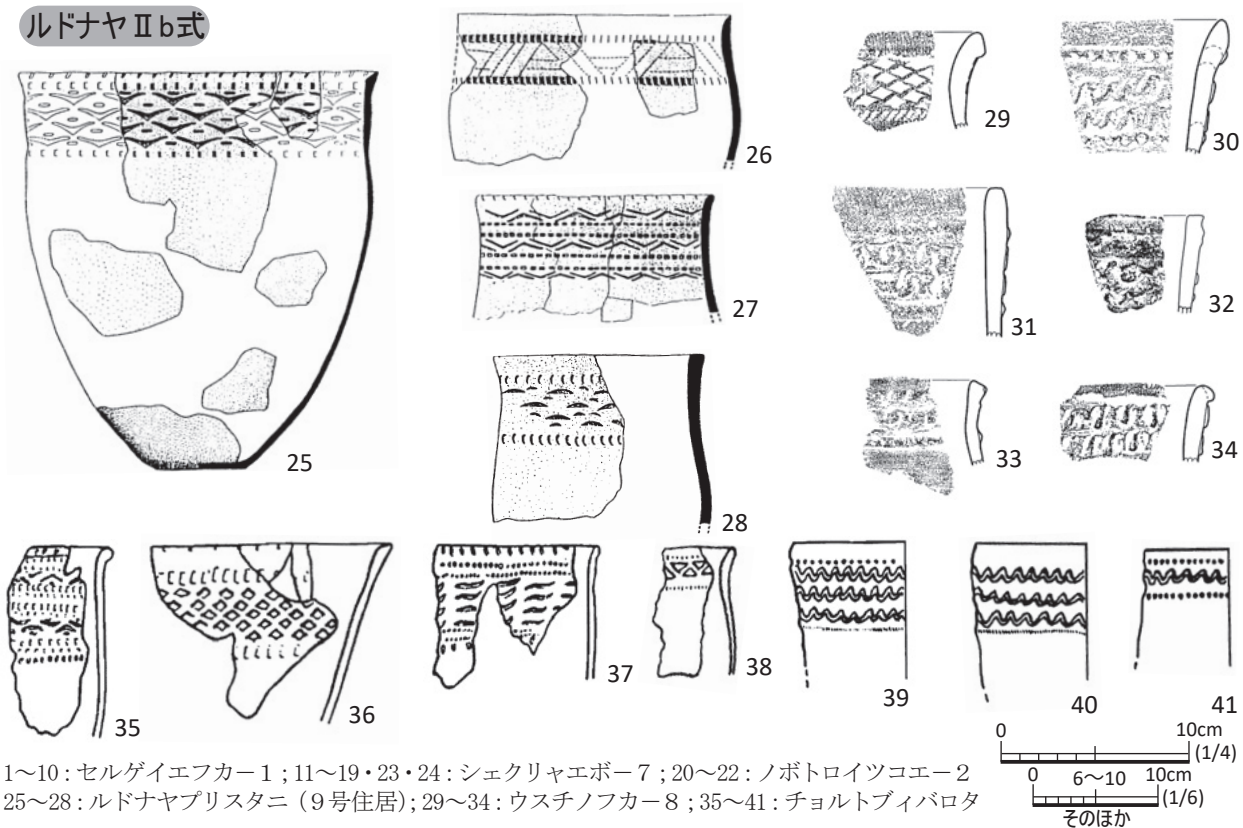
（3）ルドナヤⅢ式（図13）

文様要素として、（列状・線状）櫛歯文・（菱形・三角形・楕円形）型押文・縄側面押捺文・弾帯溝文・魚鱗文・沈線文がある。Ⅱ式の小鳥形・括弧形・長方形の型押文・隆起線文・貝殻側面押捺文・連続押引文はない。Ⅱ式の多段施文がより進み、口縁部～胴下部まで及ぶ。また、口縁部と胴部とでそれぞれ別に文様帯が形成される分帯施文（同図6・15・16・23・26・28）が特徴となる。Ⅰ式やⅡ式とは異なり、鋸歯状モチーフが多い。そこでは、主に胴部文様帯の最下部に配置され、線状櫛歯文・縄側面押捺文を用い1～2条の鋸歯状文様を施すか（同図1・25・27・28）、鋸歯

ルドナヤⅡa式



ルドナヤⅡb式



1～10: セルゲイエフカー1; 11～19・23・24: シェクリャエボー7; 20～22: ノボトロイツコエー2
25～28: ルドナヤプリスタニ (9号住居); 29～34: ウスチノフカー8; 35～41: チョルトビバロタ

図12 ルドナヤ式土器 (2)

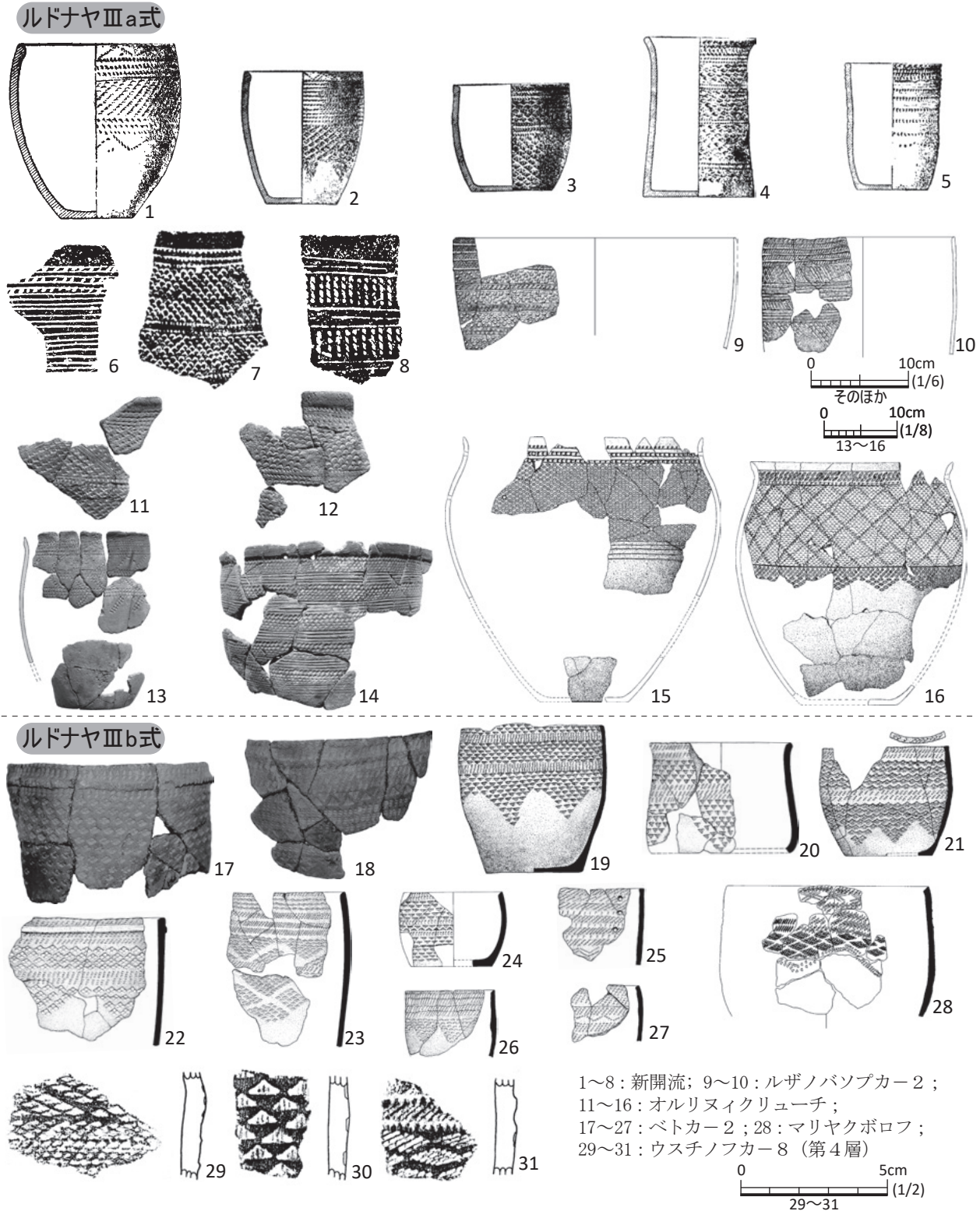


図13 ルドナヤ式土器（3）

状の区画内に菱形・三角形・楕円形の型押文を充填する（同図2・16・17～22・26）。菱形・三角形型押文の内部に、X字文と細条線文が残る（同図2～4・11・15～24・30）。コンドンⅢ式と同じく過飾化傾向にある。

器形は、丸みを帯びた鉢形（同図1・2・13・15・

16）と、直線的な樽形（同図3～5・19～21・24・28）がある。Ⅱ式の特徴である頸部の発達は認められない。

ルドナヤⅢ式は、文様要素と器形の違いにより、Ⅲa式とⅢb式とに細分することができる。

ルドナヤⅢa式（図13-1～16） 沿ハンカ地区の新

開流（上層：2層）・ルザノバソプカー2（Морева 2005）・シェクリャエボー7遺跡と、沿海地方中部のオルリヌィクリューチ遺跡の資料が相当する。

線状櫛歯文・縄側面押捺文・菱形型押文・弾帯溝文・魚鱗文・沈線文を組み合わせた、多段・分帯施文が特徴となる。多段施文は、数条の線状櫛歯文・縄側面押捺文・水平沈線文で区画し、その内部に（斜行・垂直）櫛歯文・縄側面押捺文・菱形型押文・魚鱗文を充填する。5～10段の文様帯が口縁部から胴下部にかけて展開する（同図1・3・4・7～10・12～14）。分帯施文は、口縁部に弾帯溝文、胴部に菱形型押文・水平沈線文を配置する（同図6・15・16）。

丸みを帯びた鉢形土器（同図1・2・13・15・16）と、直線的な胴部と直立・外反口縁部をもつ樽形土器（同図3～5・9・10）がある。前者には、丸みを帯びた胴部と内湾・外反口縁部をもつもの（同図1・2・13）と、丸みを帯びて膨らんだ胴部と、くびれて外側に曲がる口縁部をもつもの（同図15・16）がある。

線状櫛歯文や水平沈線文による区画施文・魚鱗文・弾帯溝文は、コンドンⅢ式の主要な要素であり、沿ハンカ地区～沿海地方中部～アムール流域に同類の文様要素がひろがった可能性がある。現状において、関連資料は遠隔地の数遺跡に点在している。中間の様相は不明だが、同図1と13、同図7と12、同図8と14のように、文様要素・配置・モチーフには共通点が多いため、まとめてⅢa式としておく。ただし、器形には遺跡間の違いがあり、将来的に区別すべきかもしれない。**ルドナヤⅢb式**（図13～17～31） ベトカー2遺跡の堅穴住居出土資料が相当する。

列状櫛歯文と（菱形・三角形・楕円形）型押文の組み合わせにより、多段・分帯施文する。Ⅲa式と異なり、線状櫛歯文・弾帯溝文・魚鱗文・沈線文はない。多段施文は多くの場合、列状櫛歯文で区画し、その内部を帯状に展開する菱形・三角形の型押文で充填する（同図18～22・24）。胴部文様帯最下部には鋸歯状モチーフの型押文を加える（同図17～22）。帯状に展開する列状櫛歯文と、鋸歯状に展開する列状櫛歯文を多段配置した例もある（同図25・27）。分帯施文では、口縁部に複列の櫛歯文を並べ、胴部に網状モチーフ（型押文・櫛歯文を菱形や三角形の構図内に集合）や鋸歯状モチーフの型押文を配置する（同図23・26・28・31）。

器形は、底部から直線的に立ち上がり、口縁部で直立・やや外反する樽形が主体を占める。

類例は、沿海地方南東部のウスチノフカー8・マリヤクリイボロフ遺跡（Батаршев 2009；Морева 2005）にある。

3-3-3. ¹⁴C年代の検討（表5）

ルドナヤプリスタニ（下層）・ルザノバソプカー2・ウスチノフカー8・ノボトロイツコエー2・チョルトブイバロタ・セルゲイエフカー1・シェクリャエボー7・ベトカー2遺跡で、¹⁴C年代値が24点（炭化物：10点、土器付着物：14点）報告されている（表5）。それらにもとづくと各型式の年代は以下になる。

ルドナヤⅠ式

ルドナヤプリスタニ（下層）遺跡の2号住居で、楕円形・菱形型押文をもつ口縁・胴部片（図11～16・17）が出土した。単一文様要素が口縁部付近に展開するルドナヤⅠ式である。住居床面出土炭化物の年代は、ca. 7690～7390 BPである（Дьяков 1992；Кузьмин и др. 1995）。また、土器付着物の年代として、ルザノバソプカー2遺跡のca. 7230～6980 BP（図11～9）、ウスチノフカー8遺跡のca. 7020～6770 BP（図11～15）がある。これらの数値は、海洋リザーバー効果を受けていないとされる（吉田・國木田 2005；Kunikita et al. 2007；Kunikita et al. 2017b）。以上のことから、Ⅰ式の年代はca. 7690～6770 BPとなる。

ルドナヤⅡ式

Ⅱa式 ノボトロイツコエー2遺跡の住居から、線状櫛歯文・連続押引文と小鳥形・括弧形の型押文を帯状に施した多段施文土器が出土した（図12～14～16）。伴う出土炭化物の年代はca. 6920 BPである（Клюев, Гарковик 2008）。同類（図12～11～13・17～23）が出土したシェクリャエボー7遺跡住居の床面の年代は、ca. 6455 BPである（클류예프 외 2007；Батаршев 2009）。また、Ⅱa式土器（図12～1～10）がまとまって出土したセルゲイエフカー1遺跡では、土器付着物の年代がca. 6755～6485 BPであり、海洋リザーバー効果の影響はないとされる（Kunikita et al. 2017b）。以上のことから、Ⅱa式の年代はca. 6920～6455 BPとなる。

Ⅱb式 チョルトブイバロタ遺跡では、洞窟開口部から菱形・三角形・小鳥形の型押文をもつ土器（図12～35～38）、洞窟内部の住居から波状隆起線文（図12～39～41）をもつ土器が出土した。住居床面出土炭化物の年代（ca. 6575～6380 BP；Кузьмин и др. 1995）がⅡa式の年代となる。

ルドナヤⅢ式

Ⅲa式 関連する年代値は知られていない。

Ⅲb式 ベトカー2遺跡の住居から、Ⅲb式土器がまとまって出土した。伴う出土炭化物の年代はca. 6010～5830 BPである（Морева и др. 2008）。また、同住居出土土器の付着物（図13～17・18）の年代はca. 6430～6270 BPであり、海洋リザーバー効果の影響を

考慮するとca. 6030～5870 BPになるという(Kunikita et al. 2017b)。ウスチノフカー8遺跡では、列状櫛歯文と網状型押文の組み合わせをもつ土器(図13-29)の付着物の年代はca. 6165 BPであり、海洋リザーバー効果の影響はないとされる(Kunikita et al. 2007)。以上のことから、Ⅲb式の年代はca. 6010～5830 BPとなる。

3-3-4. ルドナヤ式土器の展開

ルドナヤⅠ式については、型押文下端部の沈線区画がない古段階から沈線区画がある新段階へ変化するとされる(伊藤2005, 2006; 内田2021)。伊藤(2005: 101)は時間差と判断する根拠として、沈線区画のない土器とある土器が、同一遺跡内の異なる遺構や地点から、別々に出土する点を挙げた。ただし検証する術がほかになく、慎重にならざるを得ない。そのため、本論ではⅠ式を細分しない。また、ルドナヤⅢa式に伴う年代はないが、Ⅲa式とⅢb式は、胴部文様帯最下部の鋸歯状モチーフ・樽形の器形・多段化傾向という点で共通するため、年代的に近いと考えられる。以上のことから、ルドナヤ式は1段階(Ⅰ式)→2段階(Ⅱa・Ⅱb式)→3段階(Ⅲa・Ⅲb式)の順で変化するといえる。これは、これまで指摘されてきた3段階変遷にほぼ対応する(伊藤2005; 内田2021; 大貫1998; Батаршев 2009; Попов и др. 2005; 金恩瑩2010)。

次に、各段階における地域性を読み解いてみる。まず1段階は、沿海地方南部一帯にⅠ式がひろがる。その後2～3段階は、沿ハンカ地区にⅡa式とⅢa式、沿海地方南東部にⅡb式とⅢb式が展開する。シホテアリニ山脈を挟んで東西二つの地域性が認められる。この地域性が生じた背景に、コンドン式土器との接触・交渉の存在があったと推察される。沿ハンカ地区のⅡa式(列状櫛歯文を用いた区画施文)はコンドンⅡ式に、ルドナヤⅢa式(線状櫛歯文や水平沈線文による区画施文・魚鱗文・弾帯溝文)はコンドンⅢ式と共通する。このことは、ウスリー川を介した沿ハンカ地区とアムール流域との間に交渉関係があったことを示唆する。

それでは、ルドナヤ文化と新開流・ベトカ文化との関係をどう考えるべきか。これら三つについては、別々の文化として理解する意見(Морева и др. 2008; Попов и др. 2005; 黒龍江省文物考古工作隊1979)と、ルドナヤ文化の範疇に含める意見(伊藤2005, 2006; 大貫1998; 金恩瑩2010)とに分かれている。新開流・ベトカ文化の標式遺跡群から出土した土器の文様は、型押文・櫛歯文によるアムール編目文を基本とする。これとルドナヤ文化(ルドナヤプリスタ

ニ・セルゲイエフカー1遺跡)の土器との間では、細かい差はあるものの、文様構成・配置・特定モチーフに大差はない。また、土器の型的な変遷においても、ルドナヤ文化から新開流・ベトカ文化への連続性(単一の文様要素から複数文様要素の組み合わせへの変化、文様帯の多段化・分帯化、施文範囲の拡張)が認められる。一例として、ベトカ文化の特徴となる鋸歯状モチーフは、1～2段階(図11-5・14、図12-19・22・26)に少量存在した文様要素が3段階になって卓越したと、説明することができる。

新開流文化とベトカ文化については、ルドナヤ文化の範疇で説明するのが適切である。それらに伴う土器は各々、ルドナヤⅢa式とルドナヤⅢb式に対応する。それぞれ沿ハンカ地区と沿海地方南東部にひろがるルドナヤ文化の一地方型式として位置づけられる。

3-3-5. 牡丹江流域の振興遺跡出土資料について

松花江支流の牡丹江や、ウスリー川支流の穆稜河流域を含む牡丹江流域における新石器時代前・中期の様相は、振興遺跡1期甲類の土器群から読み取ることができる。牡丹江右岸に位置する振興遺跡では、1994～1995年に発掘調査が行われ、五つの文化期が認定された。そのなかの1期(新石器時代)は、前半期の甲類(5層: 振興文化)と後半期の乙類(H161穴: 石灰場下層文化)とに分かれる(黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系2001)。

振興遺跡1期甲類にルドナヤ・ボイスマン文化の土器と隆起線文土器が共伴することに注目されている(金恩瑩2010; 林尚澤2016)。松嫩平原と三江平原南部のほぼ中間に位置する牡丹江流域に、極東東西の両方面と関係をもつ文化動態が展開した可能性がある。

(1) 振興遺跡1期甲類土器の分類(図14)

振興遺跡1期甲類は、文様の施文技法により、以下の四つに分類することができる。

隆起線文土器(図14-1～6) キザミのある隆起線文とキザミのない隆起線文を用い、口縁部付近に波状文と水平文を施す。波状・水平隆起線文は、各々単独配置されるか(同図1・4・5)、組み合わせる(同図2・3・6)。隆起線上のキザミまたは隆起線が一周せず、部分的に付される節状施文が特徴となる(同図4・6)。

口縁部付近に展開する波状・水平隆起線文は、沿ハンカ地区・沿海地方南東部のルドナヤⅡ式(図12-13・20・23・24・30～34・39～41)に対比可能な特徴である。一方、節状施文はルドナヤⅡ式になく、振興遺跡1期甲類に限られる。

型押文・櫛歯文土器(図14-7～12) 列状・線状櫛

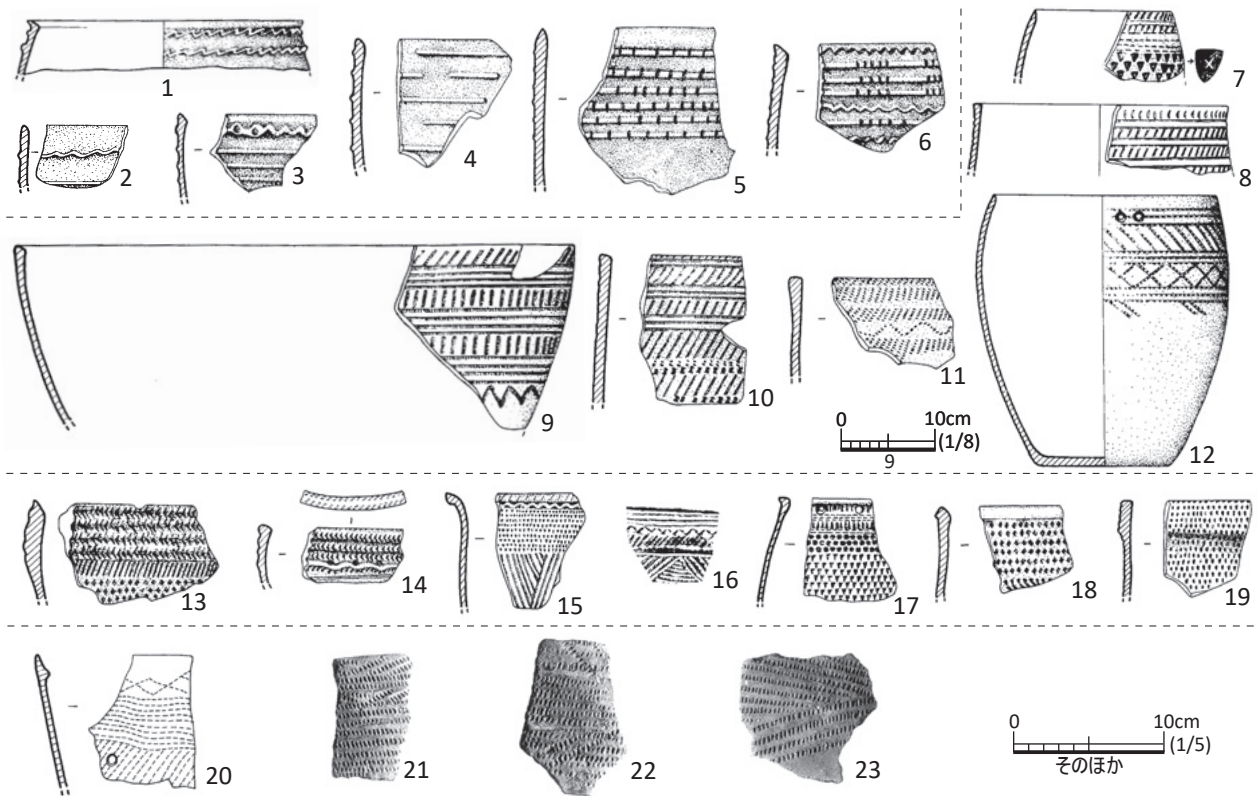


図14 振興遺跡1期甲類土器

歯文による多段・分帯施文が特徴となる。線状（2～4条）櫛歯文で区画部を形成し、その内部に斜行・垂直櫛歯文を配置するか（同図8～10・12）、帯状に展開する列状櫛歯文と鋸歯状に展開する列状櫛歯文を多段配置する（同図11）。口縁部に複列の櫛歯文、胴部に三角形型押文（内部装飾：X字形）を施す分帯施文もみられる（同図7）。胴部文様帯最下部に鋸歯状・斜行モチーフを加えたものもある（同図9・12）。丸みを帯びた胴部と内湾口縁部をもつ鉢形土器がある（同図12）。

線状櫛歯文による多段・分帯施文、文様帯最下部の鋸歯状・斜行モチーフ、そして丸みを帯びた胴部と内湾口縁部は、新開流（図13-1・8）・オルリヌイクリューチ（図13-13・14）遺跡にもある。つまり、振興遺跡1期甲類の型押文・櫛歯文土器は、沿ハンカ地区・沿海地方中部のルドナヤⅢa式に対比される。ただし、ルドナヤⅢa式の弾帯溝文や魚鱗文はない。

刺突・連続押し文土器（図14-13～19） これは、モレーバ（Морева О. Л.）編年（Морева 2005）³⁾ のボイスマン文化第1・3段階に相当する。

同図13・14は、階段状の口縁部を形成する。文様は、口縁部に連続押しによる水平文と波状の疑似隆帯（Ложный валик：上下交互のスタンプ押捺によって波状の微隆起線を作出する技法のこと）を施し、胴部には菱形型押文を配置する。モレーバ編年の第1段

階1類土器群に対比可能である。同図15～19は、口縁最上部に粘土紐を貼付し、肥厚口縁を形成する。口縁最上部に空白部を置いてから施文を開始している。口縁部に連続押しによる水平文と疑似隆帯、胴部に連続押しによる集線文を配置する（同図15・16）。また、口縁部～胴部に網状の型押文を施す場合（同図17～19）もある。これらは同上編年の第3段階の特徴である。

縄線文土器（図14-20～23） 縄線文は絡条体の側面圧痕によるものとみられる。口縁部～胴部～胴下部に各々、多条の横行・斜行集線文を施す。類例は、黒龍江省南部亞布力遺跡、沿海地方南西部のハンシ（Ханси）Ⅰ・ザレチエ（Заречье）Ⅰ遺跡などにある。沿海地方南西部と牡丹江流域では、幅広く見て新石器時代中期～後期前半段階に、縄を用いた文様施文技術が存在したとされる（福田ほか2002；古澤2018；宮本2007, 2008；Морева и др. 2002；林尙澤2016）。縄線文土器は、振興遺跡1期甲類の下限年代を示すのかもしれないが、現状では資料に制約があり、器形を含めた検討はすることができない。

（2）振興遺跡1期甲類土器の編年的位置

沿海地方における新石器時代前・中期の編年に照らすと、振興遺跡1期甲類土器は、古・中・新の3段階に区分することができる。

古段階は、波状・水平隆起線文（図14-1～6）

表2 アムール編目文土器の段階設定（コンドン文化）

段階		松花江河口域	スレドネアムールスカヤ低地帯北東部	エボロン湖周辺	アムール河口域
アムール編目文1段階 約8000~7000BP	コンドン1段階 約8000~7400BP	コンドンⅠb式 ビジャン4古段階	コンドンⅠa式 クニヤゼボルコンスコエⅠⅡc層		
アムール編目文2段階 約7000~6400BP	コンドン2段階 約7400~6400BP	前半	コンドンⅡa式 クニヤゼボルコンスコエⅠⅡb層	コンドンⅡc式 ハルピチャン4	コンドンⅡa式 マラヤガバニ
		後半	コンドンⅡb式 ビジャン4新段階		
アムール編目文3段階 約6500~5800BP	コンドン3段階 約6600~6200BP	コンドンⅢ式 万里霍通・ナイフェリド	コンドンⅢ式 ペトロパブロフカ5集落	コンドンⅢ式 コンドンボチタ	コンドンⅢ式 マラヤガバニⅡd層

表3 アムール編目文土器の段階設定（ルドナヤ文化）

段階		牡丹江流域	沿海地方中部	沿ハンカ地区	沿海地方南東部
アムール編目文1段階 約8000~7000BP	ルドナヤ1段階 約7700~6800BP			ルドナヤⅠ式	
				ルザノバソプカー2	ルドナヤプリスタニ下層
アムール編目文2段階 約7000~6400BP	ルドナヤ2段階 約7000~6400BP	振興古段階		ルドナヤⅡa式 セルゲイエフカー1、 シェクリャエボー7	ルドナヤⅡb式 チョルトブイバロタ、ルド ナヤプリスタニ(9号住居)
アムール編目文3段階 約6500~5800BP	ルドナヤ3段階 約6200~5800BP	振興中段階	ルドナヤⅢa式		ルドナヤⅢb式 ベトカー2
			オルリヌイクリューチ	新開流	

を特徴とし、ルドナヤ2段階（ca. 6920～6380 BP）並行である。（波状・水平～隆起線文・櫛歯文・型押文からなるルドナヤⅡ式の土器組成（図12）からすると、振興古段階に両者が共存しても不自然ではない。中段階には型押文・櫛歯文（図14－7～12）、刺突・連続押引文の一部（図14－13・14）である。ルドナヤ3段階（ca. 6010～5830 BP）・ボイスマン第1段階（ca. 6710～6635 BP）に並行する。新段階には刺突・連続押引文の一部（図14－15～19）が含まれ、ボイスマン第3段階（ca. 5725～5480 BP）並行である。

新石器時代前・中期の牡丹江流域にルドナヤ・ボイスマン文化の土器群が展開したことは、すでに指摘されている（古澤2018；金恩瑩2010；金材胤2012）。ほかに以上の分析から、牡丹江流域の地域色に関する新たな知見が得られる。すなわち、振興中段階の型押文・櫛歯文土器（図14－7～12）は、櫛歯文の多段施文が主流となり、型押文は非常に少なく、魚鱗文・弾帯溝文がない。この内容は、並行関係にあるルドナヤⅢ式の型押文・櫛歯文土器と異なる。前述したように、ルドナヤ文化には沿ハンカ地区と沿海地方南東部という東西二つの地域性がある。牡丹江流域には、それとは別の地域性があるようだ。

つぎに、振興古段階の隆起線文土器に注目したい。並行期の極東西部・松嫩平原には、隆起線文土器群（后套木嘎：ca. 7100～6700 BP、オロスC：ca. 6600～6500 BP）がある。また、並行期の極東東部・沿ハンカ地区及び沿海地方南東部では、型押文・櫛歯文土器

と隆起線文土器との共伴例が複数遺跡（シェクリャエボー7：ca. 6455 BP、チョルトブイバロタ：ca. 6575～6380 BP）で確認されている。牡丹江流域～沿ハンカ地区部～沿海地方南東部の隆起線文土器は、アムール編目文系の器形と文様構成に、隆起線文系の施文技法が組み合わさったものである。松嫩平原と沿海地方との中間地帯となる牡丹江流域において、アムール編目文系と隆起線文系の接触が生じた可能性が高い。

3-4. アムール編目文土器の展開と動態

以上の検討結果にもとづくと、アムール編目文土器の展開は以下の3段階に整理することができる。表2・3に、各段階と地域型式の対応関係を示す。

3-4-1. アムール編目文1段階（図15）

コンドン1段階とルドナヤ1段階が相当する。スレドネアムールスカヤ低地帯北東部・松花江河口域、そして沿ハンカ地区・沿海地方南東部に、型押文の単一文様要素をもつ土器群がひろがる。文様は口縁部付近に列状に展開する。

スレドネアムールスカヤ低地帯北東部の南側（コンドンⅠa式）に、菱形・円形型押文と列状の櫛目文・櫛歯文が存在する。櫛目文は、文様構成・配置、また土器付着物の年代（ca. 8000～7600 BP：図7－1・7・8）から本段階に限られた文様要素である可能性が高い。櫛歯文は、後続するアムール編目文土器2・3段階まで、長期間用いられる。現状において、1段

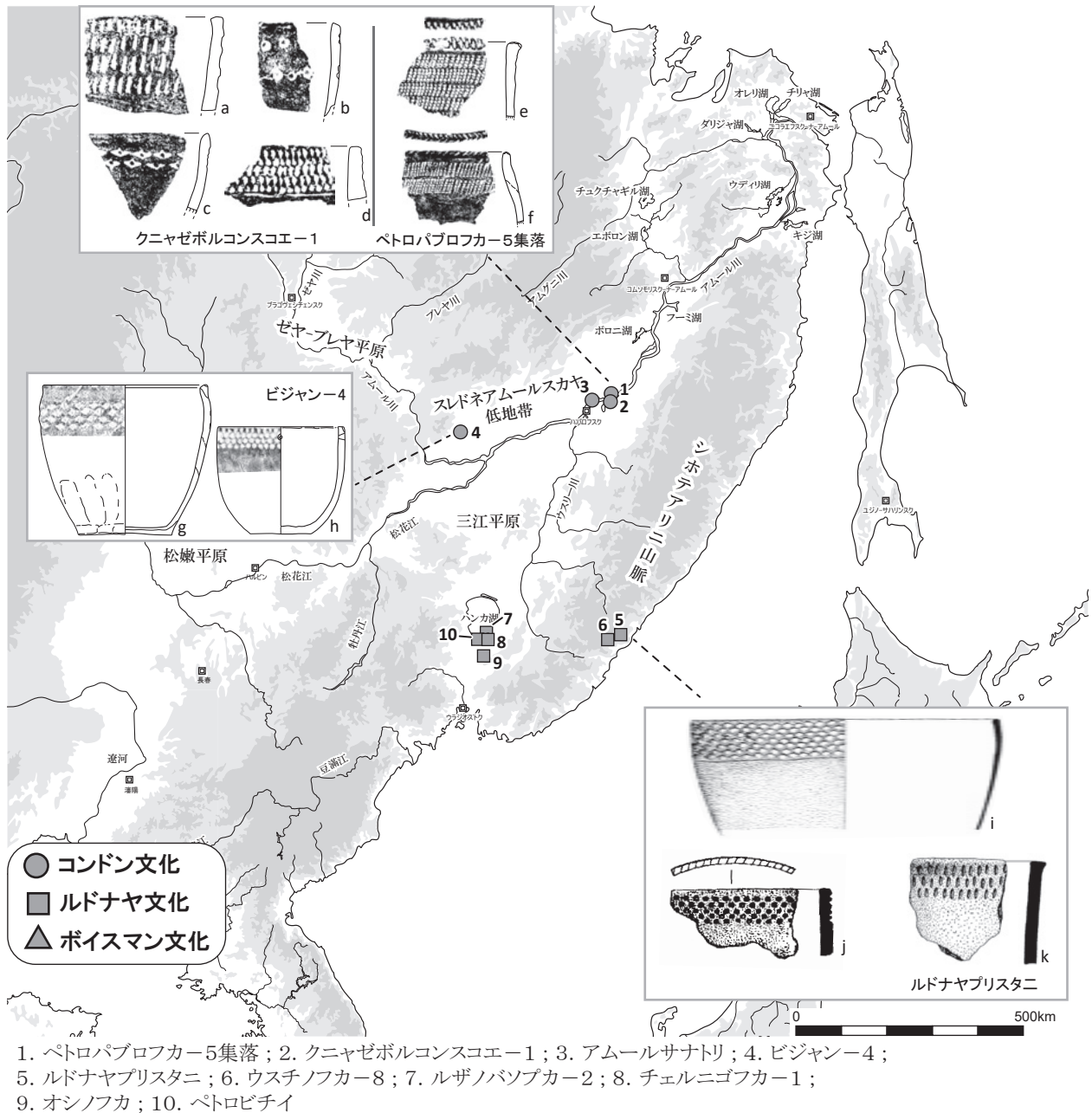


図15 アムール編目文1段階

階の櫛目文と櫛歯文（図15-a・e・f）の分布は、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部に限られる（内田2021）。また、松花江河口域（コンドンI b式）には菱形・円形型押文をもつ土器群が分布するが、これはスレドネアムールスカヤ低地帯北東部と関係するといえる。

沿ハンカ地区・沿海地方南東部（ルドナヤI式）には、円形・楕円形・菱形の型押文を列状施文した土器群がひろがる。型押文の下端部に沈線による区画をもつ一群（図15-i）も、一定量ある。同類はスレドネアムールスカヤ低地帯北東部にもあり、極東東部に広く分布した文様である可能性が高い。

3-4-2. アムール編目文2段階（図16）

コンドン2段階とルドナヤ2段階が相当する。スレドネアムールスカヤ低地帯北東部・エボロン湖周辺・アムール河口域・松花江河口域、そして沿ハンカ地区・沿海地方南東部・牡丹江流域に関連資料が分布する。1段階に比べ、分布域が拡大する。

櫛歯文・型押文・沈線文・縄側面押捺文・隆起線文など、文様要素が多様化する。本段階から、櫛歯文は、沿海地方を含めた極東東部の広い範囲に分布する。

隆起線文の存在が目立つ。施文技術はアムール編目文と大きく異なるため、別系統からの影響があったと考えられる。隆起線文は、松花江河口域～エボロン湖周辺、牡丹江流域～沿ハンカ地区・沿海地方南東部に

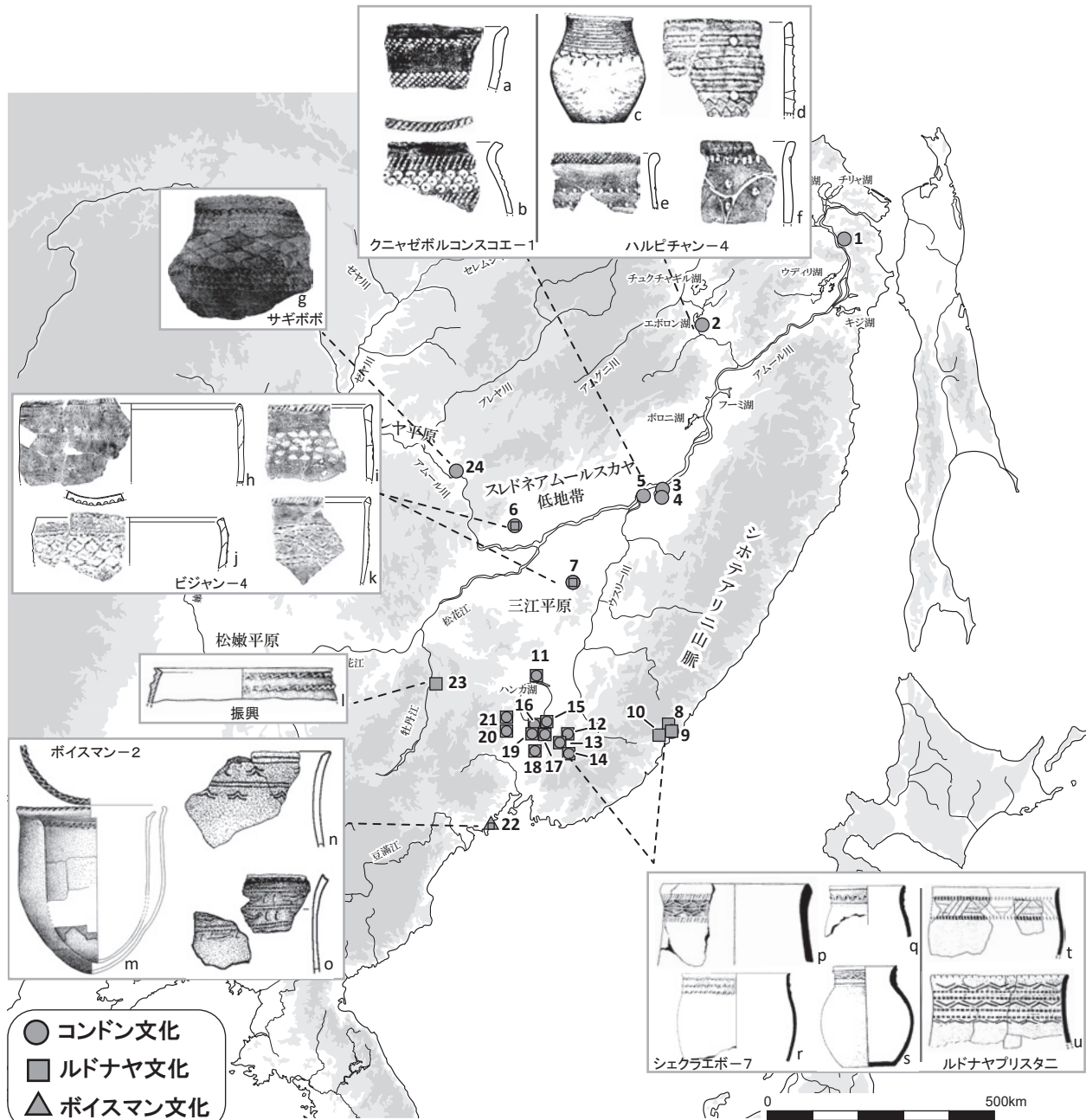


図16 アムール編目文2段階

あり、地域差がある。松花江河口域～エボロン湖周辺（図16-d・j・k）では、貼り付け・短い隆起線と短沈線の組み合わせによる施文・菱形・鋸歯状モチーフ・口縁最上部の櫛歯文施文が特徴となり、牡丹江流域～沿ハンカ地区・沿海地方南東部（図16-l・q・r・s）では、貼り付け技法からなる水平・波状文と区画施文が特徴となる。

文様配置の区画・多段化が進む。極東東部一帯に、

列状・線状櫛歯文で上下を区画し、その内部に型押文を充填した区画施文の手法がひろがる（図16-b・g・h・p・t）。なお、コンドン式は口縁最上部の1列櫛歯文施文、ルドナヤ式は多段施文という、地域差がある。また、鉢形土器は、頸部をもつ一群と、頸部をもたない一群からなり、器形分化が認められる。

2段階は、コンドン式土器がアムール河口域まで拡大する。それとともに、スレドネアムールスカヤ低地

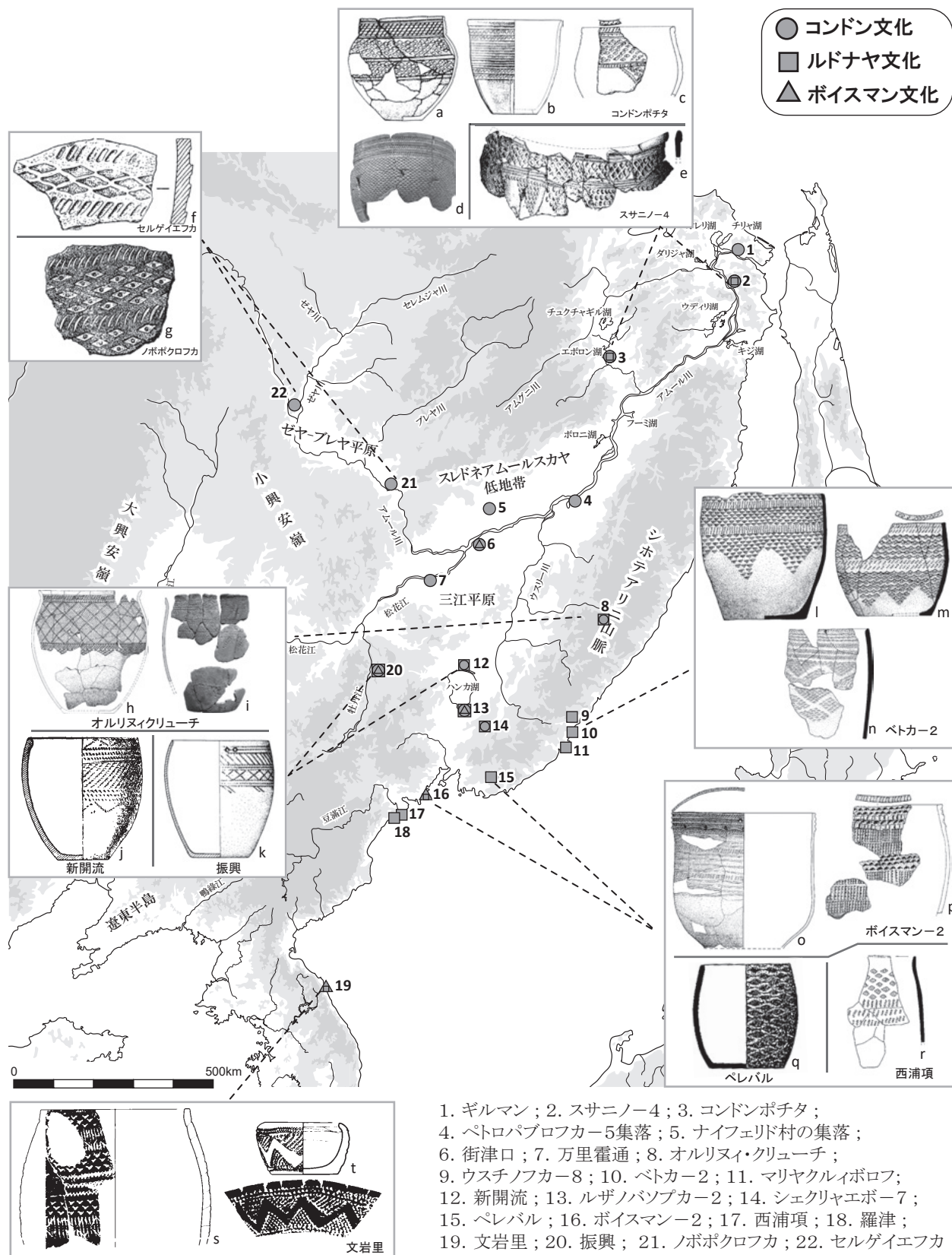


図17 アムール編目文3段階

帯北東部（コンドンⅡa式）とエボロン湖周辺（コンドンⅡc式）との間で、文様に地域差が表れる。また、松花江河口域（コンドンⅡb式）では、1段階に続き、

コンドン式土器が展開するなか、沿ハンカ地区・沿海地方南東部に関係づけられる文様配置・モチーフ（図16-h）が加わる。すなわち、分布域が拡大し、小地

域圏が形成され、南方との関係性が強まる。

アムール中流域のサギボボ遺跡（Зайцев и др. 2019）の採集土器は、列状櫛歯文で上下を区画し、その内部に菱形型押文を施しており（図16-24・g）、コンドンⅡ式に含めてよい。コンドン式土器が小興安嶺を越えて、極東西部への進出したことを示す資料である。

沿海地方では、沿ハンカ地区（西側：ルドナヤⅡa式）と沿海地方南東部（東側：ルドナヤⅡb式）という地域性が生まれ、この構図は3段階まで続く。その背景には、アムール流域方面との関係性の強化がある。松花江河口域に出土例（図16-h）があることから、2段階にウスリー川を通じた南北接触が活発化した可能性がある。

2段階の沿海地方南西部には、尖底・キャリパー形口縁部・口縁部の楕円形型押文が特徴となるプロトボイスマン式（ca. 7010 BP）も展開する。ボイスマン-2遺跡では、プロトボイスマン式土器に、少量ではあるが小鳥形型押文をもつルドナヤⅡ式土器（図16-n・o）が共伴する。このことは、沿ハンカ地区・沿海地方南東部から沿海地方南西部に一時的な影響が及んだことを示唆する（大貫2010；Морева 2005；金恩瑩2010）。

3-4-3. アムール編目文3段階（図17）

コンドン3段階とルドナヤ3段階が相当する。2段階に続き、極東東部一帯にアムール編目文土器が分布する。さらに、ゼヤ・ブレヤ平原や韓半島中東部でも関連資料が出土するようになる。

文様要素は、櫛歯文・型押文・縄側面押捺文・弾帯溝文・魚鱗文・沈線文である。文様帯の多段化・分帯化が著しく、施文範囲が胴下部まで拡張する。内田（2021：99）は、コンドン式の区画文が、氏の言うⅡ～Ⅲ期を経て、列状櫛歯文から線状櫛歯文・水平沈線文に変化すると述べた。そして、列状櫛歯文による区画がⅢ期まで継続する沿海地方との違いを説明した。確かにその傾向は認められるが、沿海地方において区画文の採用は一律に変化しない。沿海地方中部・沿ハンカ地区・牡丹江流域では、アムール流域のコンドン式と同様に線状櫛歯文・水平沈線文を用いて、外面を区画する（図17-i・j・k）。またコンドン式では、頸部をもつ鉢形土器が継続するなか、頸部と胴部の境界が明確となり、最大径が頸部付近に上がるようになる。一方、ルドナヤ式では、頸部をもつ一群がなくなり、丸みを帯びた鉢形土器や樽形土器になる。

弾帯溝文と魚鱗文が特徴となるコンドンⅢ式は、松花江河口域～スレドネアムールスカヤ低地帯北東部～

アムール河口域に広域分布する。2段階の分布域より北、ニコラエフスクナアムーレ付近にも進出する。また、胴部文様帯の下段部に鋸歯状モチーフをもつ例が増える。これは、沿海地方のルドナヤⅢ式に関係づけられ、南方から影響が及んだことを示す。

ルドナヤ式土器は、沿海地方中部・沿ハンカ地区・牡丹江流域（ルドナヤⅢa式）と、沿海地方南東部（ルドナヤⅢb式）とに二分することができる。前者の線状櫛歯文・水平沈線文による区画施文・魚鱗文・弾帯溝文は、コンドンⅢ式に関連づけられる。また、鋸歯状モチーフが多い点は、ルドナヤⅢb式と共通する。つまりルドナヤⅢa式は、コンドンⅢ式とルドナヤⅢb式の折衷型式であるといえる。一方、沿海地方南東部では、コンドン式に関係する要素は認められない。

本段階の沿海地方南西部には、ボイスマン文化第1・第2段階（ca. 6700～6000 BP）の土器群が分布する。同類は、牡丹江流域（振興）・沿ハンカ地区（ルザノバソプカ-2）・松花江河口域（街津口）にもある。また、ルドナヤⅢ式は沿海地方南西部（ボイスマン-2・ペレバル）と、韓半島東北部（羅津・西浦項）にもあり、ルドナヤ式とボイスマン式が従来の分布圏を超えることが注目されている（金恩瑩2010）。

3段階は、アムール編目文土器が遠隔地で出土するようになる。ゼヤ・ブレヤ平原のセルゲイエフカ遺跡（図17-f）・ノボボクロフカ遺跡（図17-g）（オクラドニコフ1975）には、列状櫛歯文で区画部を作り、その内部に菱形型押文を施した土器がある。コンドンⅢ式と共通した多段化現象が認められる。一方、韓半島中東部の文岩里遺跡（국립문화재연구소2004）では、三角形型押文と櫛歯文の組み合わせによる多段施文や櫛歯文の集合による鋸歯状モチーフをもった土器が出土している（図17-s・t）。これらは、ルドナヤⅢb式またはボイスマン文化第1段階の土器と関係し、沿海地方側との影響関係があったとされる（金恩瑩2010）。

以上のことから、アムール編目文2段階において遺跡分布が拡大し、土器要素が多方面（東西・南北）に拡散することがわかる。その動きが同3段階になってさらに進み、極東東部内または極東東西における地域間交渉・接触の活発化につながったといえる。

4. 極東西部における隆起線文土器の変遷

4-1. 問題の所在

隆起線文土器は、1930年代に行われた嫩江流域の昂昂周周遺跡群の調査により、その存在が最初に認知された（梁思永1932）。その後、ゼヤ・ブレヤ平原のオシノボエオゼロ・セルゲイエフカ・ノボペトロフカ

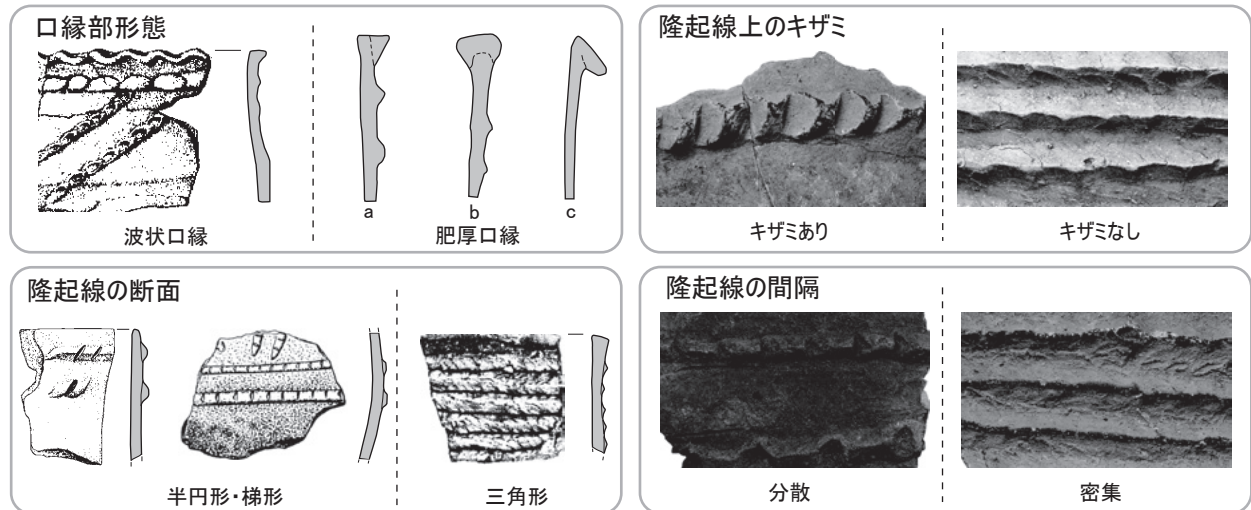


図18 隆起線文土器の属性

ーⅡ・Ⅲ遺跡でも類例が出土し、隆起線文を特徴とする土器群はゼヤ・ブレヤ平原から松嫩平原の広域に及ぶことが判明した（Деревянко 1970；ヂェレヴァンコ 1975）。

隆起線文土器の展開に関しては、1970年代にアムール中流域の新石器時代編年案が構築される過程で議論され始めた。オクラドニコフ（Окладников, А. П.）とヂェレヴァンコ（Деревянко, А. П.）は、ゼヤ・ブレヤ平原の資料にもとづき、隆起線文土器を伴うノボペトロフカ文化とオシノボエオゼロ文化を設定した。そして、前者を新石器時代の前半（約 6000～5000 年前）、後者を新石器時代の後半（約 3000 年前）に位置づけた（Окладников, Деревянко 1977）。その後、関連資料や ^{14}C 年代が蓄積され、ノボペトロフカ文化は ca. 9700～8000 BP、オシノボエオゼロ文化は ca. 4200～3300 BP に属するとされた（Derevianko et al. 2017, 2020；Коваленко 2017；Нестеров и др. 2005）。

松嫩平原の隆起線文土器編年に関しては、段天璟ほか（2013）が、双塔遺跡 1 期と黄家圪子遺跡の出土資料を指標とする古段階と、五福 C 1・4 号墓⁴⁾の出土資料を代表とする新段階とに区別している。この理解を継承した王立新（2018）は、松嫩平原の新石器時代編年を后套木嘎 1 期文化－長坨子 A 類－双塔 1 期文化－黄家圪子文化－后套木嘎 3 期文化－哈民忙哈文化－昂昂溪文化と整理して、隆起線文土器の時間的位置づけを行った。そこでは、隆起線文土器は土器出現期に後続する段階と新石器時代の最後段階に存在し、両者は年代と型式内容が大きく異なるとされた。隆起線文土器の古い段階（双塔 1 期文化、黄家圪子文化：ca. 9500～7000 BP）には、隆起線文と波状口縁（い

わゆる「花邊文」）が伴う双塔遺跡 1 期・黄家圪子遺跡・小拉哈遺跡 1 期乙組が含まれ、新しい段階（昂昂溪文化：ca. 4000 BP）には、片口付隆起線文が伴う小拉哈遺跡 1 期甲組と五福 C 1・4 号墓が含まれるとされた。

大貫（1987, 1998, 2011）は、ゼヤ・ブレヤ平原と松嫩平原における隆起線文土器の変遷や石器組成、地域間関係をあわせ見て、前期・中期・後期を設定した。前期（ca. 6500 BP）は隆起線文土器に石刃石器群が伴い、ノボペトロフカ遺跡やオロス C 遺跡が属する。後期（ca. 4200～3600 BP）は剥片石器群が伴い、オシノボエオゼロ遺跡・小拉哈遺跡 1 期乙組・五福 C 1・4 号墓出土資料が属する。中期については、両地域とも様相不明とされた。

分析資料が比較的そろっているゼヤ・ブレヤ平原では、隆起線文土器は、古段階（ノボペトロフカ文化）と新段階（オシノボエオゼロ文化）とに分かれるとされるが、各段階における土器変遷の詳細は不明である。以下では、極東東部の新石器時代前・中期に並行する年代が得られている古段階に注目し、その土器型式内容と細部編年について検討を行う。

4-2. 関連遺跡と土器分類

4-2-1. 関連遺跡

ゼヤ・ブレヤ平原と松嫩平原一帯に、隆起線文土器出土遺跡が数カ所知られている（図 1）。ゼヤ・ブレヤ平原には、ゼヤ・ブレヤ川とアムール河の合流点付近に著名なノボペトロフカ遺跡群をはじめとする関連遺跡が分布する。また松嫩平原には、嫩江とその支流に発達した砂丘地帯に隆起線文出土遺跡が点在する。ゼヤ・ブレヤ平原と松嫩平原との間には、なだらかで

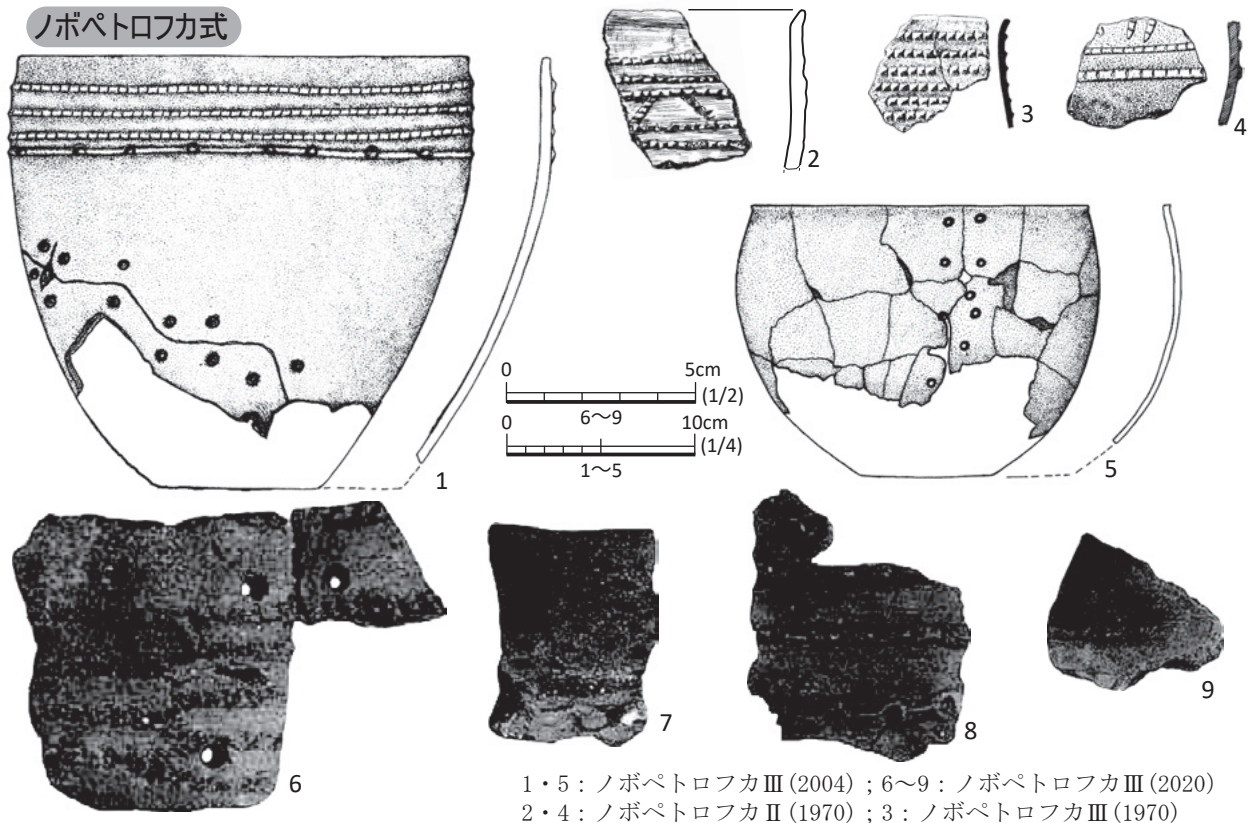


図19 ノボペトロフカ式土器

標高の低い丘陵が主となる小興安嶺が延びる。隆起線文土器の分布はこの山岳地帯をこえた両地域間の影響・接触関係を示唆する、とされる（大貫1998）。

4-2-2. 分類

隆起線文土器は、器形（口縁部形態）と施文手法（隆起線上のキザミ・隆起線の断面形態・隆起線間の幅）に注目し、細分することができる（図18）。

口縁部形態は、波状口縁と肥厚口縁がある。波状口縁は、口唇部を一定間隔で強く指オサエして、波状にする。肥厚口縁は、口縁最上部に粘土紐を貼付して、外面を肥厚させたもの（a）、平坦な口唇部に粘土紐または粘土塊をかぶせて、内外面を肥厚させたもの（b）、器壁に比べ著しく肥厚して外傾するもの（c）がある。隆起線文は、キザミのあるものとキザミのないものがある。その断面形態は、丸みを帯びた半円形をなすもの、先端が平坦になる梯形のもの、そして、粘土紐の両縁を強くオサエつけることで先端が三角形に尖るものがある。断面三角形の隆起線文の両縁に爪痕が残る例もある。また、一定間隔をおいて粘土紐を施す分散型と、接続して貼付する密集型とに分けられる。これらの属性に注目し、以下で隆起線文土器の分類を行う。

（1）ノボペトロフカ式（図19）

ノボペトロフカーⅡ遺跡とノボペトロフカーⅢ遺跡

の1号住居・2文化層の資料が相当する。

器形は、底部から開き胴上部で直立するもの（同図1）、底部から丸みを帯びながら立ち上がり、胴上部で内湾するもの（同図5）、口縁部で弱く外反するもの（同図2・3）がある。

隆起線文にはキザミがあり、キザミのない例は確認することができない。水平文（同図1・3・6・8・9）と、上下を区画した水平文の内部を斜行文で充填した組み合わせ文がある（同図2）。ほかに、鋸歯状の押捺文を施し、その下に水平隆起線文を配置した例（同図7）もある。ただし押捺文は稀な存在であり、ノボペトロフカ式で多く採用されたとは考えにくい。隆起線の断面形態は半円形と梯形であり、三角形はない。隆起線文は一定間隔を置く分散型である。

（2）双塔式（図20）

双塔遺跡下部文化層（双塔1期）の資料が相当する。黄家圈子遺跡でも類例が採集されている（吉林省文物考古研究所1988）。

口縁部で直立するもの（同図1～3・5）、胴上部から口縁部にむかって緩やかに内湾するもの（同図6）、底部から口縁部にむかって直線的に開き、外傾するもの（同図4）がある。ほかに、波状口縁をもつ一群がある（同図1・5・13・14）。平底土器であるが、底面が平坦なもの（同図5）と、凹みをもつもの

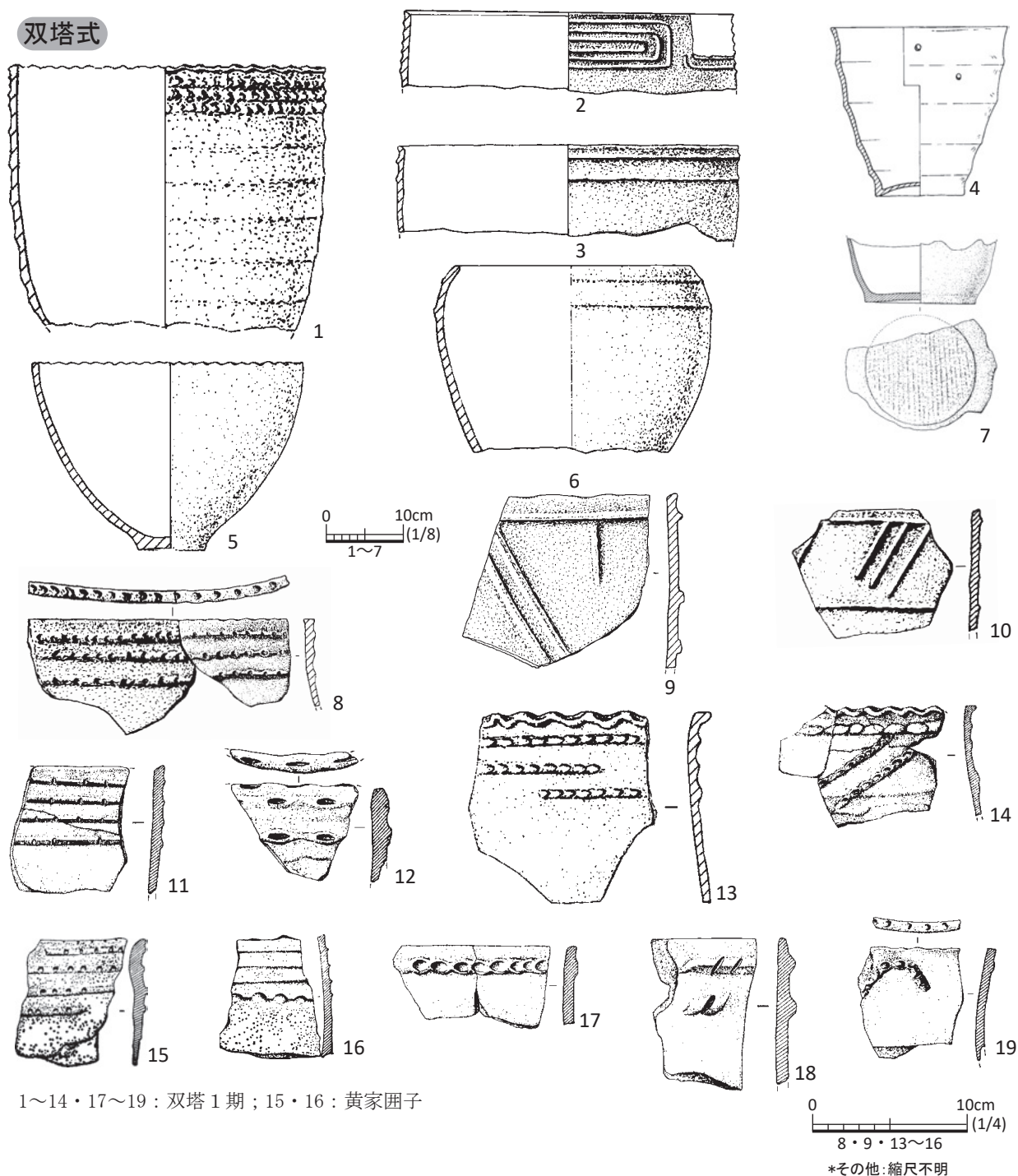


図20 双塔式土器

(同図4・7)がある。

文様は、キザミのある隆起線文とキザミのない隆起線文を2～4列並べて水平文とするものが主体をなす(同図1・3・6・8・11・12・13・15～18)。また、水平文と斜行文の組み合わせ文(同図10・14)・回字文(同図2)・縦走文(同図9)・曲線文(同図19)も少量ある。公開されている資料からは、キザミのない隆起線文よりキザミのある隆起線文の比率が高いとみられる。キザミのある隆起線文のみからなるノボベ

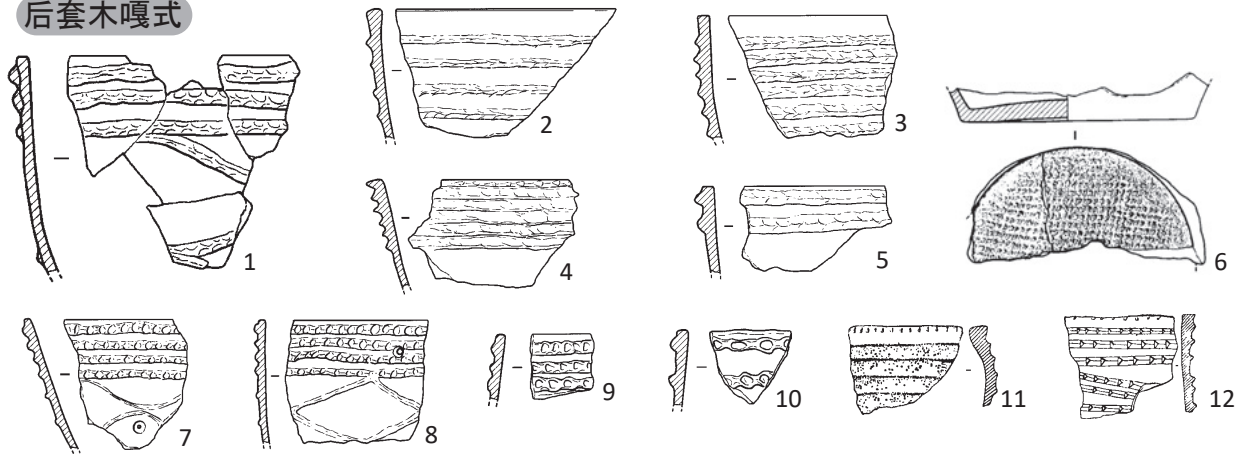
トロフカ式に対比することができる。また、隆起線の断面形態が半円形・梯形であり、分散型であるという特徴も、ノボベトロフカ式と共通する。

(3) 后套木嘎式(図21-1～12)

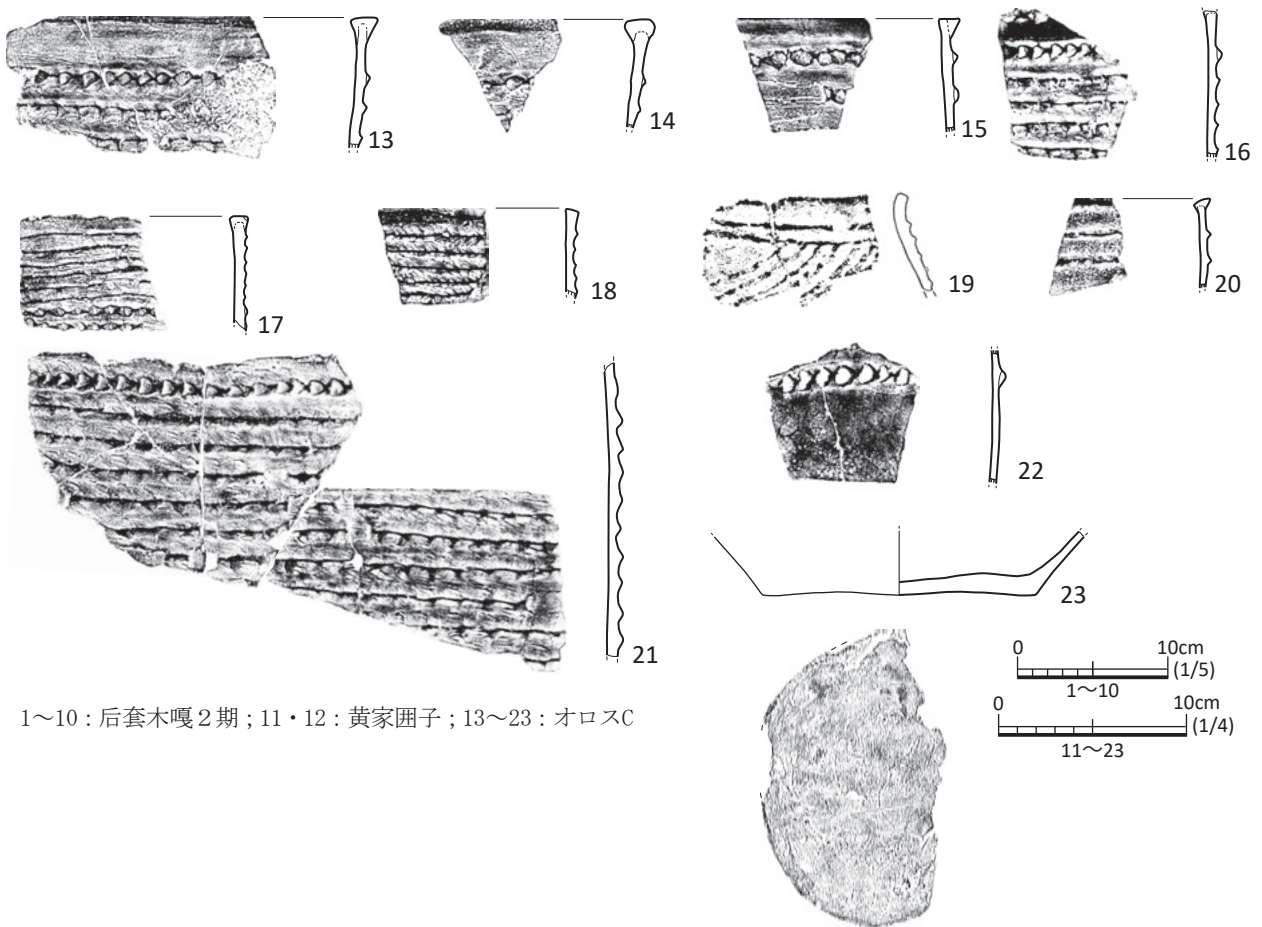
后套木嘎遺跡の土器出現期文化層(3層:后套木嘎1期)の上層(2層下部:后套木嘎2期)から出土した資料が相当する。類例は黄家圪子遺跡にもある。

器形については、完形土器と推定復元土器が報告されていないため、分かりにくい。大きな破片資料から

后套木嘎式



オロス式



1～10：后套木嘎2期；11・12：黄家圪子；13～23：オロスC

図21 后套木嘎式・オロス式土器

推察すると、口縁部で直立するものが多いようである（同図1～5・7・8）。また少量ではあるが、肥厚口縁が含まれ、口縁最上部に粘土紐を貼付して外面を肥厚させたもの（a）がある（同図4・11）。肥厚部の外縁にキザミが施される。平底の底部が凹みをもつ点は双塔式と共通する（同図6）。

文様は、水平文のみ（同図2・3・4・5・9～

11）、または、口縁部に水平文、胴部に曲線文・菱形文・斜行文を配置する（同図1・7・8・12）。キザミのない隆起線文を多く採用する点で、ノボペトロフカ式や双塔式とは異なる。隆起線の断面形態は、半円形・梯形（同図1・5・7～11）と、三角形（同図2～4・12）である。数条の隆起線文は、分散型（同図1・2・10）と密集型（同図3・4・9）がある。后套木嘎式

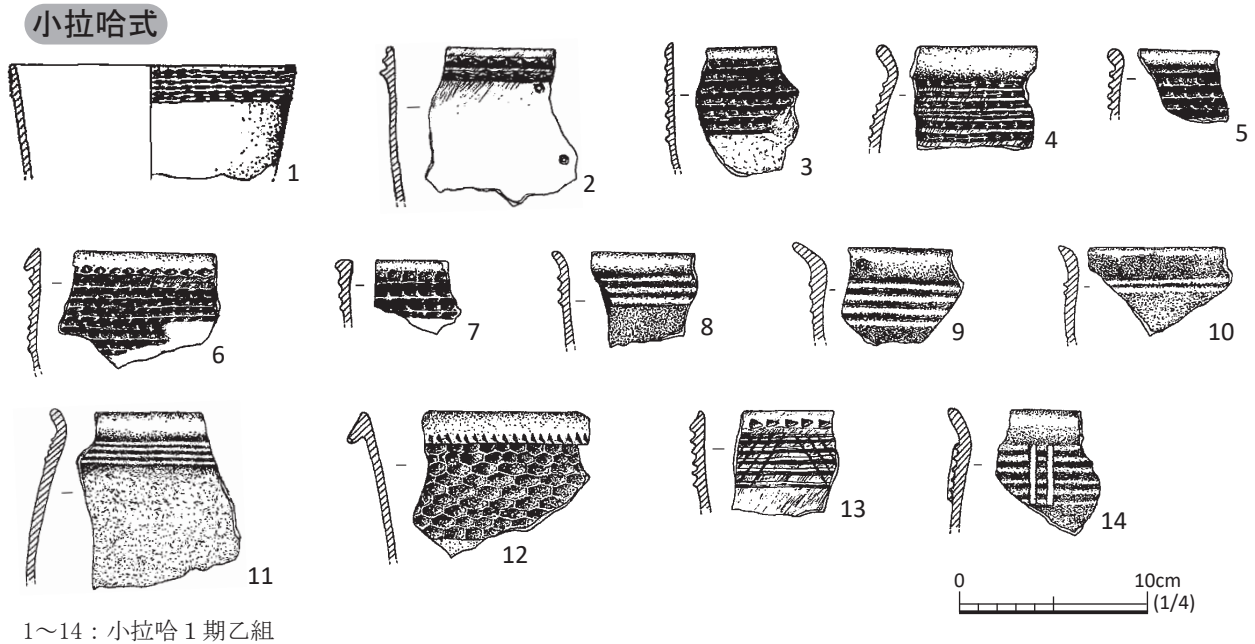


図22 小拉哈式土器

の隆起線の断面形態と間隔は、ノボペトロフカ式・双塔式とオロス式との中間的様相を表している。

(4) オロス式 (図21-13~23)

オロス (額拉蘇) C 地点遺跡の資料が相当する。

器形は、口縁部で直立するものがほとんどである。胴上部から口縁部にむかって緩やかに内傾し、口縁最上部で直立する例 (同図19) もあり、大貫 (1987: 7 頁) はこれを広口壺に近い器形と判断している。肥厚口縁が多く含まれ、口縁最上部に粘土紐を貼付するか (a) (同図15)、平坦な口唇部に粘土紐または粘土塊をかぶせる (b) (同図13・14・17・20)。ほかに、肥厚部の外縁にキザミを施した例 (同図17) が1点あり、これは后套木嘎式 (同図4・11) にもある。

隆起線文は、隆起線上にキザミのあるものとなないものがあり、水平文 (同図13~18・20・21・22) が主体となる。斜行文 (同図19) も少量ある。后套木嘎式と同様に、キザミのない隆起線文が高い比率を占める。隆起線文は、断面三角形と密集型が多い。

(5) 小拉哈式 (図22)

小拉哈遺跡 1 期乙組が相当する。

器形は、口縁部で直立するもの (同図1~3・6・7・12・13) と、口縁最上部で強く外反するもの (同図4・5・8~11・14) がある。肥厚口縁 (c: 器壁に比べ著しく肥厚して外傾するもの) が含まれ、その外縁にキザミ1列が施される (同図6・12)。同様のキザミは、后套木嘎式 (図21-4・11) やオロス式 (同図17) の肥厚口縁 (b: 内外面を肥厚させたもの) にも認められる。肥厚口縁 (c) と (b) とは、成形技法

による形態差はあるが、外縁キザミ列をもつ点において共通する。外反口縁と肥厚口縁 (c) は、小拉哈式に特有の要素である。

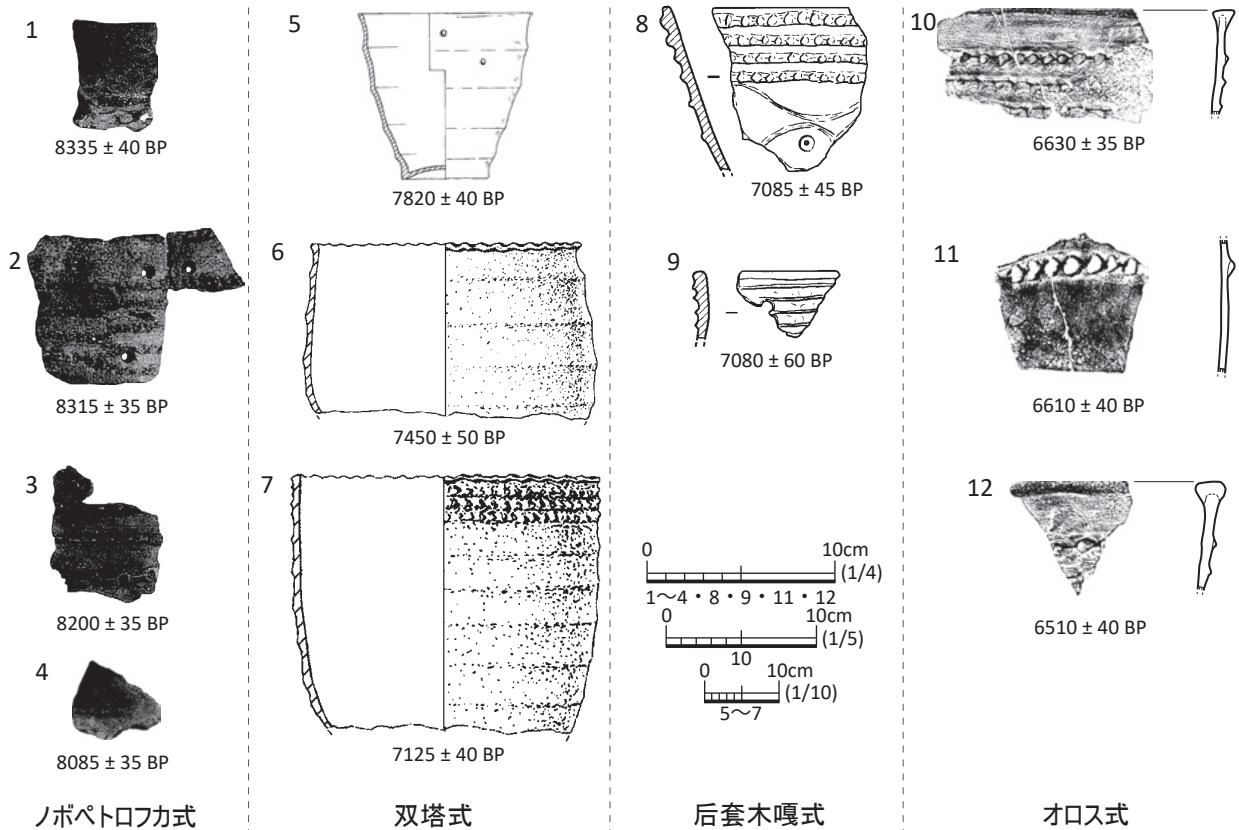
隆起線文は、隆起線上にキザミがなく、水平文がほとんどである。隆起線に沈線を重ねる例も少量ある (同図13・14)。キザミのない隆起線文が多いという点で、后套木嘎式とオロス式と共通する。断面形態は三角形と半円形である。半円形のものは、粘土紐の両縁を丁寧にナデツケており、ノボペトロフカ式や双塔式とは区別される。密集型の隆起線文である。

4-3. 隆起線文土器の展開

4-3-1. ¹⁴C年代の検討

現在、隆起線文土器が出土する遺跡群から、¹⁴C年代が計28点得られている (表5)。土器付着物 (24点) が大半を占めるが、炭化物 (2点)・人骨 (1点)・貝殻 (1点) の年代もある。土器付着物の年代と測定土器との対応関係は、図23 (判別可能な資料: 計12点) の通りである。

ノボペトロフカ式に関しては、ノボペトロフカーⅢ遺跡2文化層の ca. 8040 BP (出土炭化物) と ca. 8535~8085 BP (土器付着物: 図23-1~4) がある (Derevianko et al. 2020; Нестеров и др. 2005)。また、ノボペトロフカーⅡ遺跡には ca. 9740 BP (出土炭化物) がある (Derevianko et al. 2004)。すでに述べたように、ノボペトロフカーⅡ (図19-2・4)・同Ⅲ遺跡 (図19-1・3・5~9) の土器は、同型式に含まれる。ノボペトロフカーⅡ遺跡の年代はノボ


 図23 隆起線文土器付着物の ^{14}C 年代

ペトロフカ式の上限年代を示すのかもしれないが、類例が少なく時間的な空白も残る。そのため、ノボペトロフカ式の年代幅はca. 8500～8000 BPに前後すると考えておく。

双塔式の年代は、ca. 7820～7125 BP（土器付着物：図23-5～7）に集中する。また、ノボペトロフカ式の古い年代に近いca. 9550 BP（人骨）とca. 9400 BP（土器付着物）もある（Kunikita et al. 2017a；吉林大学边疆考古研究・吉林省文物考古研究所 2013）。ca. 9550 BPの人骨試料は、双塔式と同じ層から出土したようであるが、ほかに比べ年代数値が古すぎる。また、ca. 9400 BPの付着物が得られた土器の詳細情報が公表されておらず、実際に双塔式なのかどうかを検証することができない。そのため、古い測定値（ca. 9550～9400 BP）と双塔式との関係性を積極的に評価することは難しい。双塔式の年代幅はca. 7800～7100 BPとしておく。

后套木嘎式の年代は、ca. 7085～6755 BP（土器付着物：図23-8・9）である（Kunikita et al. 2017a）。またオロス式の年代は、ca. 6630～6510 BP（貝殻、土器付着物：図23-10～12）である（大貫1987；大貫ほか2011）。両者の年代幅は近接する。

以上のことから、ノボペトロフカ式（ca. >8500～8000 BP）→ 双塔式（ca. 7800～7100 BP）→ 后套木

嘎式（ca. 7100～6700 BP）→ オロス式（ca. 6600～6500 BP）、という順になる。型式変化の傾向は、年代順に次のように読み取ることができる。

口縁部形態：波状→肥厚（a）→ 肥厚（a・b）
 隆起線上のキザミ：有→無（キザミ消滅化）
 隆起線の断面：半円形・梯形→三角形
 隆起線の間隔：分散→密集

双塔式の波状口縁から、后套木嘎式・オロス式の肥厚口縁へという変化が読み取れる。后套木嘎式は肥厚口縁（a）のみだが、後続するオロス式は肥厚口縁（a）に（b）が加わり、その比率が高い。つぎに、隆起線文にキザミのあるものが古く、ないものが新しい。隆起線上のキザミは、ノボペトロフカ式・双塔式と后套木嘎式・オロス式との間で消滅している。隆起線文は、断面が半円形・梯形の分散型から、断面三角形の密集型へ変化する。后套木嘎式は、断面形態が半円形または梯形と三角形であり、分散型と密集型が混在する。これは、双塔式からオロス式への過渡的な様相を示す。

ところで、小拉哈遺跡1期乙組にはca. 3688 BPという年代がある（黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系1998）。この数値は隆起線文土器の古段階の年代（ca. 9700～6500 BP）と明らかに整合しない。

小拉哈遺跡2期（白金宝文化早期：3830 ± 340 BP）に関わる試料が混入したという指摘もある（王立新2018）。そのため、現状では小拉哈式に伴う信頼性の高い年代値はない。一方、型式学的に検討すると、小拉哈式は、肥厚口縁と、断面三角形でキザミがない密集型の隆起線文が目立つ。これらはオロス式と共通する。また、口縁最上部で強く外反する口縁部、沈線文、そしてオロス式の肥厚口縁（a・b）とは形状が異なる肥厚口縁（c）が、特徴的に認められる。そのため、小拉哈式とオロス式との間には型式差があるといえる。小拉哈式は、オロス式よりキザミの消滅化が進行することからも、やや新しく位置づけられる。

4-3-2. 段階区分

隆起線文土器の古段階とされてきた土器群を、器形・施文方式・年代から、以下の1～3段階に分ける。

（1）隆起線文1段階

ノボペトロフカ式と双塔式が相当する。キザミのある隆起線文を2～6列並べた水平文が主体となる。また、水平文と斜行文の組み合わせ文（図19-2、図20-10・14）も両方に認められる。隆起線文は、断面が半円形・梯形となる分散型である。前半：ノボペトロフカ式（ca. >8500～8000 BP）と、後半：双塔式（ca. 7800～7100 BP）とに分けることもできるが、双方の型式内容に大きな差はない。当段階に属する遺跡は、ゼヤ・ブレヤ平原と松嫩平原の広い範囲で知られている。

（2）隆起線文2段階

后套木嘎式とオロス式が相当し、前半と後半とに分けられる。前半（ca. 7100～6700 BP）は、后套木嘎式が相当する。1段階になかった肥厚口縁（a）が、少量ではあるが含まれる。文様は、キザミのない隆起線文を用いる傾向が強まる。前半にキザミの消滅化が進み、その流れは3段階まで続く。隆起線の断面形態は1段階の半円形・梯形が残る一方、三角形が出現する。隆起線文は、分散型と密集型がほぼ同率となる。後半（ca. 6600～6500 BP）は、オロス式が相当する。前半にみられた肥厚口縁（a）に肥厚口縁（b）が加わり、その割合も高まる。隆起線の断面形態は三角形のみとなり、両縁に爪痕が残る例（図21-18）もある。隆起線文は分散型がわずかに残り、密集型が主体となる。

（3）隆起線文3段階

小拉哈式が相当する。年代は、暫定的に <ca. 6500 BP としておく。2段階に続き、器壁より口縁最上部が厚く作られる。当段階の肥厚口縁（c）は、肥厚部外縁にキザミ1列が施される（図22-6・12）。2段階前半（図21-4・11）と同後半（図21-17）の肥厚口縁にも同様のキザミがあり、連続性が認められ

る。断面三角形でキザミがなく、密集型の隆起線文による水平文が主体となり、2段階後半の延長線上で理解することができる。ただし、著しく肥厚し外傾する肥厚口縁部（c）（図22-6・12）と口縁最上部が強く外反する口縁部（図22-4・5・9・10・11・14）、また沈線文（図22-13・14）は、新たに出現する要素である。

4-4. 隆起線文土器に関する諸問題

隆起線文土器群に関する未解決課題が多く残っている。まず、極東西部における隆起線文土器群の地域性と、動態変化に関する検討が求められる。現状において、隆起線文土器の関連遺跡は、ゼヤ・ブレヤ平原と嫩江流域中下流域とに分かれて分布している（図1）。それらの中間となる小興安嶺では、両地域をつなぐ遺跡が発見されていない。

隆起線文1段階におけるノボペトロフカ式と双塔式の相似性から、ゼヤ・ブレヤ平原と松嫩平原との間に有機的な交渉・影響関係があったと推測されるが、関連情報は限られている。極東東部におけるアムール編目文土器群の動態において、アムール編目文2段階以降、小地域色の形成や、地域間交渉・接触の活発化が認められた。並行期となる隆起線文2段階以降、極東西部でも同様な動きがあったのか否か、今後検討されるべきである。

ゼヤ・ブレヤ平原では、隆起線文1段階前半以降の遺跡の存在がよくわからず、隆起線文1段階後半～同3段階の隆起線文がいかなるものなのか、不明である。この問題に関しては、次の二つの情報に注目したい。まず、ゼヤ・ブレヤ平原に近いアムール流域かつ松花江河口域のビジャン-4遺跡では、極東東部のアムール編目文土器の枠組みに収まる土器群が展開するのだが、隆起線文2段階並行期（アムール編目文2段階：ca. 6800～6600 BP）に隆起線文系統からの影響が認められる。なおかつ、ゼヤ・ブレヤ平原の新石器時代後期には、隆起線文を特徴とする文化（オシノボエオゼロ文化：ca. 4200～3300 BP）がひろがる（Деревянко, Забияко eds. 2008）。そのため、ゼヤ・ブレヤ平原にも隆起線文1～3段階の遺跡群が存続した可能性はある。関連資料の増加を待ってから、議論を深めたい。

5. 考察とまとめ

5-1. 広域編年と土器群の配置関係

極東東部における新石器時代前・中期土器群の動態は、表4に示した第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ段階に分けた広域編年により理解することができる。

表4 新石器時代前・中期土器の広域編年案

段階区分	極東西部	極東東部	松花江河口域	スレドネアムールスカヤ低地帯北東部～アムール河口域	牡丹江流域	沿ハンカ地区・沿海地方南東部・中部	沿海地方南西部
第Ⅰ段階 約8500～7000BP 約9500～8000 cal BP	隆起線文1段階 ＞約8500～7100BP	アムール編目文1段階 約8000～7000BP	ビジャン4古段階 約7900BP	コンドン1段階 約8000～7400BP		ルドナヤ1段階 約7700～6800BP	
第Ⅱ段階 約7000～6500BP 約8000～7300 cal BP	隆起線文2段階 約7100～6500BP	アムール編目文2段階 約7000～6400BP	ビジャン4新段階 約6800～6600BP	コンドン2段階 約7400～6400BP	振興古段階	ルドナヤ2段階 約7000～6400BP	プロトボイスマン段階 約7000BP
第Ⅲ段階 約6500～5800BP 約7300～6500 cal BP	隆起線文3段階 約6500BP	アムール編目文3段階 約6500～5800BP	万里霍通・ナイフェリド	コンドン3段階 約6600～6200BP	振興中段階	ルドナヤ3段階 約6200～5800BP	ボイスマン文化第1・2段階 約6700～6000BP

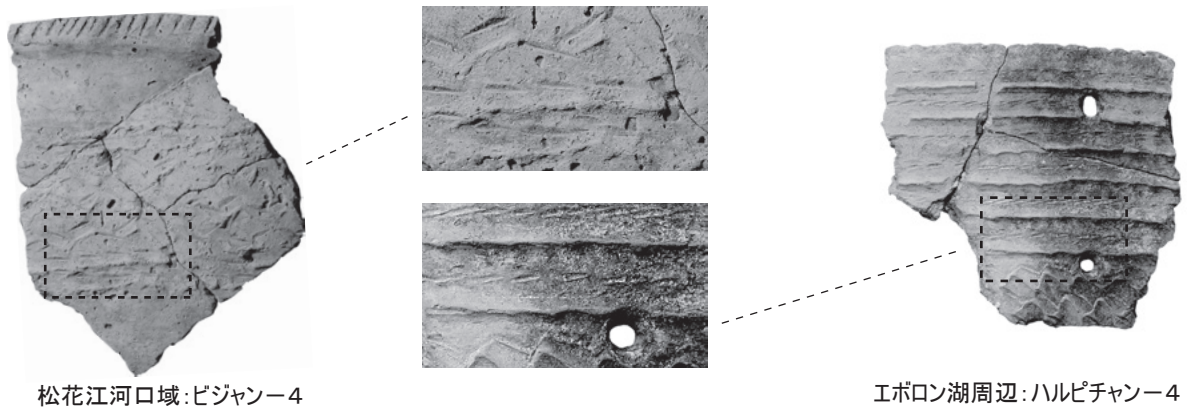
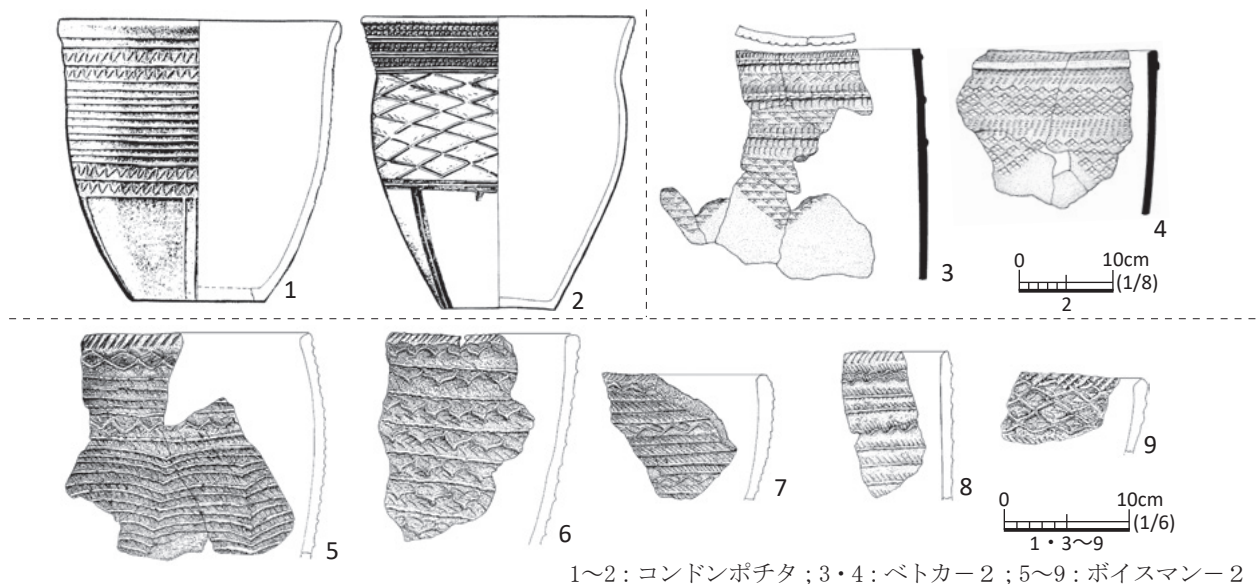


図24 短い隆起線と短沈線の組み合わせによる隆起線文の詳細



1～2：コンドンポチタ；3・4：ベトカー2；5～9：ボイスマン2

図25 新石器時代前・中期第Ⅲ段階の各種隆起線文土器

極東東部では、すべての段階にアムール編目文土器群がひろがり、アムール流域ではコンドン式、沿海地方ではルドナヤ式という地域類型となる。両地域間では、時期により接触の程度は変わるが、全時期を通じて継続的な連絡関係が保たれる。一方、極東西部では、

貼り付け技法による隆起線文土器群がひろがる。ゼヤ・ブレヤ平原と松嫩平原との中間地帯における様相は不明である。

極東東部と極東西部における二つの土器系統の境界は、松花江河口域～牡丹江流域周辺にある。この地域

はアムール編目文土器分布圏の最西部にあたり、アムール編目文土器と隆起線文系・アムール編目文系との折衷土器からなる土器組成が松花江河口域と牡丹江流域の複数遺跡にある。新石器時代前・中期の本地域で、極東東部と極東西部の系統が接触した可能性が高い。

5-2. 隆起線文土器と東西交渉関係

第Ⅰ段階 (ca. >8500 ~ 7000 BP) は、極東西部のゼヤ・ブレヤ平原と松嫩平原に隆起線文系 (隆起線文Ⅰ段階) の土器群がひろがる。並行期となる極東東部では、スレドネアムールスカヤ低地帯北東部・松花江河口域・沿ハンカ地区・沿海地方南東部に、型押文が特徴となるアムール編目文系 (アムール編目文Ⅰ段階) の土器群がひろがる。今のところ、東西分布圏を越えた土器要素の移動は認められない。

第Ⅱ段階 (ca. 7000 ~ 6500 BP) は、隆起線文が極東東部にひろがる。また、東西接触地帯で、隆起線文系とアムール編目文系の折衷土器型式が現れる。松花江河口域では、コンドンⅡ式の器形・文様構成・文様モチーフに、隆起線文の施文技法が加わる。沿海地方の隆起線文土器は、器形と文様配置がルドナヤⅡ式に共通し、施文技法のみに違いがある。すなわち、東西接触地帯における交渉は、アムール編目文系が基盤となり、隆起線文系の施文技法が受容されたと理解することができる。本段階の交渉関係は西部から東部へという一方向的なものでない。また、サギボボ遺跡におけるアムール編目文土器の存在は、東西相互作用があったことを示す。一方、極東東部では、隆起線文土器との折衷型式が新たに出現する。牡丹江流域～沿海地方南東部の隆起線文 (ルドナヤⅡ段階) は、貼り付け技法からなる波状文である。その反面、松花江河口域～エボロン湖周辺では、粘土紐を貼り付け、短い隆起線と短沈線を組み合わせた施文技法 (図24写真参照) があり、菱形・鋸歯状モチーフや口縁最上部の1列櫛歯文施文が認められる。極東東部内でこうした南北差が生じた背景に、アムール編目文土器の地域性や極東西部との交渉ルートなどが関係していた可能性はある。

第Ⅲ段階 (ca. 6500 ~ 5800 BP) は、隆起線文Ⅲ段階の資料が少なく、不明な点が多い。一方、アムール編目文土器は、ゼヤ・ブレヤ平原や韓半島中東部など、遠隔地に進出する。また、コンドン式とルドナヤ式が折衷したルドナヤⅢa式が出現するなど、極東東部内の南北接触が活発化する。隆起線文土器の動態がそれに同調するか否かは、まだわからない。

第Ⅱ段階以降、隆起線文の要素は、極東東部の各地に残存しながら変異していくようである。エボロン湖周辺 (コンドンⅢ段階) の隆起線文は、施文範囲が胴

下部まで拡張し多条化が進む (図25-1・2)。沿海地方南東部 (ルドナヤⅢ段階) では、隆起線文とアムール編目文が同一個体に共存する (図25-3・4)。前段階 (ルドナヤⅡ段階) の波状・水平隆起線文との形式的なつながりは説明しがたい。その一方、沿海地方南西部 (ボイスマン文化第Ⅰ段階) では、弓形隆起線文が出現する (図25-5~9)。これらの文様モチーフや文様配置は、ボイスマン式と共通する (Морева 2005)。ボイスマン文化の隆起線文については、現状でその出現経緯を説明することが難しい。沿ハンカ地区・沿海地方南東部との接触関係のなかで生じた可能性も含め、今後検討すべきである。

本論における検討結果によれば、極東東部に存在する隆起線文の系統を極東西部に直接求めることには無理があるといえる。極東東部における隆起線文の展開に関しては、松花江河口域～牡丹江流域で生じた東西伝統の接触、そして折衷型式の成立と拡散から説明するのが妥当であろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教官の福田正宏先生をはじめ、設楽博己先生、佐藤宏之先生ほか、東京大学考古学研究室の先生方より多大なる御指導を賜った。また、林尚澤先生に多くの御助言を頂いた。

下記の諸先生、諸氏には、本稿に関する御教示を賜ったほか、資料調査に際して様々な便宜を図っていただいた。すべての方々のお名前を挙げることは叶わないが、御指導くださった皆様に深く感謝し、御礼申し上げます。

内田和典、大貫静夫、ガブリルチュク M. A.、木山克彦、金恩瑩、國木田大、ゴルシュコフ M. V.、夏木大吾、ワシリエフスキー A. A.、マリヤービン A. V. (敬称略・五十音順)

本稿は、科学研究費補助金特別研究員奨励費「東北アジアにおける新石器文化の形成過程」 (課題番号: 20J14578)、韓国国立文化財研究所の慶州月城総合学術研究 (課題番号: NRIC-2305-B04F) による成果の一部である。

注

- 1) 本論のBPは、放射性炭素14年代値 (^{14}C BP) を意味する。
- 2) ロシア領の遺跡名について、初出箇所 (図1と本文の一部) に日本語と露語を併記しておく。
- 3) ボイスマン文化の土器編年については、現在、モレーバによる5段階区分案が広く受け入れられている (Морева 2005)。このモレーバ編年では、ボイスマン-2遺跡における層位的出土状況や土器型式特徴、そして炭化物の ^{14}C

年代値が総合的に検討されている。ここでは、ボイスマン文化に先行する段階としてプロトボイスマン段階 (ca. 7010 BP) があり、その後に、ボイスマン第1段階 (ca. 6710 ~ 6635 BP) - 第2段階 (ca. 6120 ~ 5985 BP) - 第3段階 (ca. 5725 ~ 5480 BP) - 第4段階 (ca. 5315 ~ 5125 BP) - 第5段階 (ca. 4930 ~ 4815 BP) という順になる (括弧内の¹⁴C年代はМорева 2005 : 38-39に従う)。

4) 昂昂溪周辺の遺跡は、1930年代から1970年代にわたって日本、中国、ロシアの研究者により調査され、同一地点遺跡に複数の呼称が存在する。この問題に関して大貫(1987 : 3) は、昂昂溪周辺遺跡の名称を整理した。本論では、その結果に従い、オロス(額拉蘇)C遺跡、五福C1・4号墓という名称を使う。

表5 本論で扱う¹⁴C年代

Culture	Site	Sample nr	Year	Material	Lab. nr	¹⁴ C yrs BP	Reference
Lower Amur Basin							
Kondon	Knyaze-Volkonskoe-1	Obor1-2, A'-4	2006	charcoal	TKa-14320	7655 ± 45	Шевкомуд 2008
Kondon	Knyaze-Volkonskoe-1	Obor1-3, A-4	2006	charcoal	TKa-14321	7585 ± 50	Шевкомуд 2008
Kondon	Knyaze-Volkonskoe-1	Obor1-1, C-5	2006	charcoal	TKa-14319	6845 ± 50	Шевкомуд 2008 ; 福田ほか編 2011
Kondon	Knyaze-Volkonskoe-1	09KHB1-C7	2009	charcoal	TKa-15126	6780 ± 40	福田ほか編 2011
Kondon	Knyaze-Volkonskoe-1		2006	charcoal	IAAA-61704	6760 ± 40	Шевкомуд, Горшков 2007 ; 福田ほか編 2011
Kondon	Knyaze-Volkonskoe-1	KHB1-N3	2009	charcoal	TKa-15123	6710 ± 35	福田ほか編 2011
Kondon	Knyaze-Volkonskoe-1	09KHB1-C6	2009	charcoal	TKa-15125	6545 ± 40	福田ほか編 2011
Kondon	Malaya Gavan'	08MG-S2-43	2008	charcoal	TKa-14893	6250 ± 90	福田ほか編 2011
Kondon	Malaya Gavan'	07MG-35K	2007	charcoal	TKa-14276	6245 ± 35	福田ほか編 2011
Kondon	Malaya Gavan'	08MG-S2-45	2008	charcoal	TKa-14894	6210 ± 90	福田ほか編 2011
Kondon	Malaya Gavan'	07MG-34K	2007	charcoal	TKa-14275	6185 ± 45	福田ほか編 2011
Kondon	Harpichan-4	15XAR-C6	2015	charcoal	MTC-17733	6860 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Harpichan-4	15XAR-C23	2015	charcoal	MTC-17735	6840 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Harpichan-4	15XAR-C11	2015	charcoal	MTC-17734	6440 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	09KHB-2019-1	2009	charred residues	TKA-24583	7990 ± 25	Fukuda et al. 2022
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-k	2006	charred residues	TKa-15162	7985 ± 35	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-a	2006	charred residues	TKa-15160	7905 ± 40	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-g	2006	charred residues	TKa-15161	7735 ± 40	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-h	2006	charred residues	TKa-15266	7470 ± 50	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-s2	2006	charred residues	TKa-15268	7410 ± 50	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-e	2006	charred residues	TKa-15265	7390 ± 45	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-s5	2006	charred residues	TKa-15270	7330 ± 50	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-s8	2006	charred residues	TKa-15271	7320 ± 50	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	Obor1-4	2006	charred residues	TKa-14322	7265 ± 45	Шевкомуд 2008 ; 福田ほか編 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-m	2006	charred residues	TKa-15267	7210 ± 50	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-s9	2006	charred residues	TKa-15272	7210 ± 45	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Knyaze-Volonskoe-1	06KHB1付-s10	2006	charred residues	TKa-15273	6860 ± 50	福田ほか編 2011 ; 國木田ほか 2011
Kondon	Petropavlovka-5	17PET5-F2	2016	charred residues	TKA-21083	7675 ± 30	Fukuda et al. 2022
Kondon	Petropavlovka-5	17PET5-F3	2016	charred residues	TKA-21084	7615 ± 30	Fukuda et al. 2022
Kondon	Petropavlovka-5	PET5-F36	2016	charred residues	TKA-24574	6410 ± 25	Fukuda et al. 2022
Kondon	Petropavlovka-5	PET5-F35	2016	charred residues	TKA-24573	6315 ± 25	Fukuda et al. 2022
Kondon	Petropavlovka-5	PET5-F34	2016	charred residues	TKA-24572	6290 ± 25	Fukuda et al. 2022
Kondon	Harpichan-4	15XAR-F2	2015	charred residues	MTC-17728	7540 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Harpichan-4	15XAR-F4	2015	charred residues	MTC-17730	7210 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Harpichan-4	06XAR-F6	2006	charred residues	TKA-21082	7185 ± 30	Fukuda et al. 2022
Kondon	Harpichan-4	15XAR-F3	2015	charred residues	MTC-17729	7180 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Harpichan-4	06XAR-F3	2006	charred residues	TKA-21087	7180 ± 30	Fukuda et al. 2022
Kondon	Harpichan-4	06XAR-F1	2006	charred residues	TKA-21085	7125 ± 30	Fukuda et al. 2022
Kondon	Harpichan-4	06XAR-F5	2006	charred residues	TKA-21089	7090 ± 30	Fukuda et al. 2022
Kondon	Harpichan-4	15XAR-F5	2015	charred residues	MTC-17731	7050 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Harpichan-4	15XAR-F1	2015	charred residues	MTC-17727	7020 ± 60	Габрильчук 2020b
Kondon	Harpichan-4	06XAR-F2	2006	charred residues	TKA-21086	7015 ± 30	Fukuda et al. 2022

Culture	Site	Sample nr	Year	Material	Lab. nr	¹⁴ C yrs BP	Reference
Kondon	Harpichan-4	06XAR-F4	2006	charred residues	TKA-21088	6755 ± 25	Fukuda et al. 2022
Kondon	Harpichan-4	XAR-5A	2006	charred residues	TKA-22495	6715 ± 25	Fukuda et al. 2022
Kondon	Harpichan-4	XAR-5B	2006	charred residues	TKA-22496	6650 ± 30	Fukuda et al. 2022
Kondon	Malaya Gavan'	07MG-36付K	2007	charred residues	Tka-14277	7495 ± 35	福田ほか編 2011；國木田ほか 2011
		07MG-5付K		charred residues	Tka-14505	7485 ± 40	福田ほか編 2011；國木田ほか 2011
Kondon	Malaya Gavan'	08MG-現11付K	2008	charred residues	Tka-14904	7190 ± 60	福田ほか編 2011；國木田ほか 2011
Kondon	Malaya Gavan'	07MG-4付Ms	2007	charred residues	Tka-14503	7060 ± 50	福田ほか編 2011；國木田ほか 2011
Kondon	Malaya Gavan'	08MG-現6付K	2008	charred residues	Tka-14901	6600 ± 70	福田ほか編 2011；國木田ほか 2011
Kondon	Malaya Gavan'	07MG-52付K	2007	charred residues	Tka-14507	6560 ± 45	福田ほか編 2011；國木田ほか 2011
Kondon	Malaya Gavan'	08MG-現9付K	2008	charred residues	Tka-14902	6460 ± 70	福田ほか編 2011；國木田ほか 2011
Jewish Autonomous Oblast							
Kondon	Bidzhan-4	BIJ4-6	2018	charred residues	TKA-22250	7860 ± 25	福田ほか 2021
Kondon	Bidzhan-4	BIJ4-7	2018	charred residues	TKA-22251	7895 ± 25	福田ほか 2021
Kondon	Bidzhan-4	BIJ4-1	2018	charred residues	TKA-22248	6845 ± 25	福田ほか 2021
Kondon	Bidzhan-4	BIJ4-2	2018	charred residues	TKA-22249	6700 ± 25	福田ほか 2021
Kondon	Bidzhan-4	BIJ4-4	2018	charred residues	TKA-22232	6640 ± 40	福田ほか 2021
Primorye							
Rudnaya	Pydnaya Pristan		1953, 55, 1982, 86, 1990	charcoal	GIN-5983	7690 ± 80	Дьяков 1992；Кузьмин и др. 1995
Rudnaya	Pydnaya Pristan		1953, 55, 1982, 86, 1990	charcoal	GIN-5631	7550 ± 60	Дьяков 1992；Кузьмин и др. 1995
Rudnaya	Pydnaya Pristan		1953, 55, 1982, 86, 1990	charcoal	GIN-5984	7390 ± 100	Дьяков 1992；Кузьмин и др. 1995
Rudnaya	Novotroitskoe-2		2005	charcoal	SNU07-257	6920 ± 50	Клюев, Гарковик 2008
Rudnaya	Chertovy Vorota Cave (Decil Gate)			charcoal	SOAN-1083	6575 ± 45	Кузьмин и др. 1995
Rudnaya	Chertovy Vorota Cave (Decil Gate)			charcoal	MGU-504	6380 ± 70	Кузьмин и др. 1995
Rudnaya	Sheklyaevo-7		2003-2004	charcoal	AA-60059	6455 ± 50	클류예프 외 2007；Батаршев 2009 클류예프 외 2007；Батаршев 2009
Rudnaya	Vetka-2		2005	charcoal	SOAN-6146	6010 ± 90	Морева и др. 2008
Rudnaya	Vetka-2		2005	charcoal	SOAN-6360	5860 ± 55	Морева и др. 2008
Rudnaya	Vetka-2		2005	charcoal	SOAN-6145	5830 ± 95	Морева и др. 2008
Rudnaya	Luzanova Sopka-2		2002-2003	charred residues	IAAA-32076	7320 ± 40	Попов, Батаршев 2007
Rudnaya	Luzanova Sopka-2	LZ2-3-7392	2002-2003	charred residues	MTC-16729	6980 ± 45	Kunikita et al. 2017b
Rudnaya	Ustinovka-8	488c	2004	charred residues	Tka-13431	7020 ± 90	吉田・國木田 2005；Kunikita et al. 2007
Rudnaya	Ustinovka-8	488a①	2004	charred residues	Tka-13430	6890 ± 50	吉田・國木田 2005；Kunikita et al. 2007
Rudnaya	Ustinovka-8	488a③	2004	charred residues	Tka-13432	6830 ± 50	吉田・國木田 2005；Kunikita et al. 2007
Rudnaya	Ustinovka-8	488b	2004	charred residues	Tka-13433	6770 ± 50	吉田・國木田 2005；Kunikita et al. 2007
Rudnaya	Sergeevka-1		2004	charred residues	AA-60608	6700 ± 80	Попов, Батаршев 2007
Rudnaya	Sergeevka-1	SER1-7-650	2004	charred residues	MTC-16733	6755 ± 50	Kunikita et al. 2017b
Rudnaya	Sergeevka-1	SER1-6-4034	2004	charred residues	MTC-16732	6485 ± 45	Kunikita et al. 2017b
Rudnaya	Vetka-2	VET2-3-11585	2005	charred residues	MTC-16881	6430 ± 45	Kunikita et al. 2017b
Rudnaya	Vetka-2	VET2-4-8565	2005	charred residues	MTC-16882	6330 ± 45	Kunikita et al. 2017b
Rudnaya	Vetka-2	VET2-1-11398	2005	charred residues	MTC-16879	6295 ± 45	Kunikita et al. 2017b
Rudnaya	Vetka-2	VET2-2-6288	2005	charred residues	MTC-16880	6270 ± 45	Kunikita et al. 2017b
Rudnaya	Ustinovka-8	432	2004	charred residues	Tka-13533	6165 ± 50	Kunikita et al. 2007
Western Amur Basin and Song-Nen Plain							
Novopetrovka	Novopetrovka II		1963-1964	charcoal	AA-38109	9740 ± 60	Derevianko et al. 2004
Novopetrovka	Novopetrovka III		2003-2004	charcoal	MTS-05943	8040 ± 90	Нестеров и др. 2005
Novopetrovka	Shuangta Phase I		2007	Human bone	BA-110514	9550 ± 45	吉林大学边疆考古研究・吉林省文物考古研究所 2013
Novopetrovka	Orosu-C		1933	Shell	TK-511	6510 ± 90	大貫 1987
Novopetrovka	Novopetrovka II		1963-1964	charred residues	AA-20937	9765 ± 70	Derevianko et al. 2004
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-02i	1964	charred residues	TKA-19750	8425 ± 30	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-03i	2003-2004	charred residues	TKA-19751	8155 ± 35	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-04o	2003-2004	charred residues	TKA-19752	8085 ± 35	Derevianko et al. 2020

Culture	Site	Sample nr	Year	Material	Lab. nr	¹⁴ C yrs BP	Reference
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-05o	2003-2004	charred residues	TKA-19753	8200 ± 35	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-06o	2003-2004	charred residues	TKA-19754	8155 ± 35	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-07i	2003-2004	charred residues	TKA-19755	8485 ± 35	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-08i	2003-2004	charred residues	TKA-19756	8315 ± 35	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-08o	2003-2004	charred residues	TKA-19757	8290 ± 35	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-09o	2003-2004	charred residues	TKA-19758	8335 ± 40	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Novopetrovka III	NOV-11i	2003-2004	charred residues	TKA-19760	8535 ± 35	Derevianko et al. 2020
Novopetrovka	Shuangta Phase I	SHU-3	2007	charred residues	MTC-17761	9400 ± 60	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Shuangta Phase I	SHU-4	2007	charred residues	MTC-17762	7820 ± 40	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Shuangta Phase I	SHU-1	2007	charred residues	MTC-17759	7450 ± 50	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Shuangta Phase I	SHU-2	2007	charred residues	MTC-17760	7400 ± 50	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Shuangta Phase I	SHU-6	2007	charred residues	MTC-17764	7260 ± 45	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Shuangta Phase I	SHU-5	2007	charred residues	MTC-17763	7125 ± 40	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Houtaomuga Phase II	15HOU-26	2011-2015	charred residues	MTC-17744	7085 ± 45	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Houtaomuga Phase II	15HOU-27	2011-2015	charred residues	MTC-17745	7080 ± 60	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Houtaomuga Phase II	15HOU-28	2011-2015	charred residues	MTC-17746	6930 ± 50	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Houtaomuga Phase II	HOU-12	2011-2015	charred residues	MTC-17589	6810 ± 40	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Houtaomuga Phase II	HOU-8	2011-2015	charred residues	MTC-17588	6755 ± 40	Kunikita et al. 2017a
Novopetrovka	Orosu-C		1933	charred residues	Tka-15186	6630 ± 35	大貫ほか 2011
Novopetrovka	Orosu-C		1933	charred residues	Tka-15188	6510 ± 40	大貫ほか 2011
Novopetrovka	Orosu-C		1933	charred residues	Tka-15187	6610 ± 40	大貫ほか 2011
Novopetrovka?	Xiaolaha		1992	Animal bone	ZK-2686	3688 ± 104	黒龍江省文物考古研究所ほか 1998

引用文献

- 伊藤慎二 2004 「ロシア沿海地方南西内陸部のルドナヤ文化」
伊藤慎二・加藤里美編『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅰ』國學院大學 21 世紀 COE プログラム第Ⅰグループ考古学班, 149-161
- 伊藤慎二・加藤里美編 2004 『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅰ』國學院大學 21 世紀 COE プログラム第Ⅰグループ考古学班
- 伊藤慎二 2005 「第Ⅵ章 総括」伊藤慎二・加藤里美編『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅱ』國學院大學 21 世紀 COE プログラム第Ⅰグループ考古学班, 100-114
- 伊藤慎二・加藤里美編 2005 『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅱ』國學院大學 21 世紀 COE プログラム第Ⅰグループ考古学班
- 伊藤慎二 2006 「ロシア極東の新石器文化と北海道」伊藤慎二・山添奈恵『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅲ』國學院大學 21 世紀 COE プログラム第Ⅰグループ考古学班, 59-94
- 内田和典・シェフコムード I. Ya.・今井千穂・橋詰 潤・國木田 大・ゴルシュコフ M. V.・コシツウナ S. F.・ボチカリョバ E. I.・山田昌久 2011 「アムール下流域における前期新石器時代「コンドンⅠ類型」について」『縄文時代早期を考える』公開シンポジウムⅡ予稿集, 55-70
- 内田和典 2011 「アムール下流域の新石器時代土器編年」福田正宏・シェフコムード, I. Ya.・森先一貴・熊木俊朗編『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 149-177

- 内田和典 2021 「アムール編目文土器の細別と展開」『東京大学考古学研究室紀要』34：85-106
- 内田和典・カブリルチュク M. A.・夏木大吾・福田正宏・國木田 大・大貫静夫・松崎浩之・ゴルシュコフ M. V.・マリヤービン A. V. 2022 「ハルピチャン 4 遺跡発掘調査報告（2015 年度）」福田正宏・夏木大吾編『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（Ⅲ）－総括編－』東京大学常呂実習施設研究報告 21, 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室, 11-50
- 大貫静夫 1987 「昂々溪採集の遺物について－額拉蘇 C（オロス）遺跡出土遺物を中心として－」『東京大学考古学研究室紀要』6：1-51
- 大貫静夫 1998 『東北アジアの考古学』同成社
- 大貫静夫 2010 「北東アジア新石器社会の多様性」『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会, 71-86
- 大貫静夫・國木田大・吉田邦夫 2011 「極東北部新石器時代の変遷について－額拉蘇 C 遺跡採集土器の新たな測定年代から－」『第12回北アジア調査研究報告会発表要旨』, 16-19
- オクラドニコフ A. P.（中村嘉男 訳）1975 「ゼーヤ川流域およびアムール中流域の考古学」『シベリア極東の考古学Ⅰ－極東篇－』河出書房新社, 199-212
- 吉田邦夫・國木田大 2005 「ウスチノフカ 8 遺跡における 14C 年代測定」伊藤慎二・加藤里美編『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅱ』國學院大學 21 世紀 COE プログラム第Ⅰグループ考古学班, 171-181
- 加藤博文 1998 『北東アジアにおける新石器文化の変遷と多様性の研究』平成 9 年度高梨学術奨励基金研究組成研究成果報告書, 筑波大学地域研究研究科
- 國木田 大・Shevkomud I. Ya.・吉田邦夫 2011 「アムール

- 下流域における新石器文化変遷の年代研究と食性分析」福田正宏・シェフコムード I. Ya.・内田和典・熊木俊朗編『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 201-236
- ゲレヴァンコ A. P. (中村嘉男 訳) 1975 「アムール中流域のノボペトロフカ文化 (石刃文化)」『シベリア極東の考古学 1—極東篇—』河出書房新社, 213-227
- 福田正宏・デリュエギン, ヴアレリー・シェフコムード, イーゴリ 2002 「ロシア極東地域における縄文をもつ土器について」『古代文化』54 (7): 388-399
- 福田正宏・シェフコムード I. Ya.・内田和典・熊木俊朗編 2011 『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 福田正宏 2014 「サハリン・アムール下流域」『北海道考古学』50: 137-150
- 福田正宏 2015 「東北アジアのなかの東北先史文化」『東北の古代史 1—北の原始時代—』吉川弘文館, 204-231
- 福田正宏・Gablirchuk, M.・國木田 大・田尻義了・Shipovalov, A.・Gorshkov, M.・福永将大・夏木大吾・熊木俊朗 2017 「アムール下流域における考古学的調査報告 (2016 年度)」『第18回北アジア調査研究報告会発表要旨』, 41-44
- 福田正宏・カプリルチュク M・夏木大吾・國木田 大・張恩恵・ゴルシュコフ M・森先一貴・佐藤宏之・熊木俊朗 2021 「ユダヤ自治州新石器時代ビジャン 4 遺跡出土の新資料—2017・2018 年度試掘調査出土遺物の分析結果報告—」『東京大学考古学研究室紀要』34: 107-130
- 福田正宏・夏木大吾編 2022 『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界 (Ⅲ)—総括編—』東京大学常呂実習施設研究報告 21, 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室
- 古澤義久 2018 『東北アジア先史文化の変遷と交流』六一書房
- 宮本一夫 2007 「沿海州南部における初期農耕の伝播過程」『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集, 685-700
- 宮本一夫 2008 「沿海州南部新石器時代後半期の土器編年」『東北アジアの環境変動と生業システム』(平成 15 年度～18 年度科学研究費補助金研究成果報告書「極東地域における前期完新世の環境変動と生業システムの適応に関する研究」), 熊本大学文学部, 35-60
- Derevianko A. P., Y. V. Kuzmin, G. S. Burr, A. J. T. Jull and J. C. Kim 2004 AMS ^{14}C age of the earliest pottery from the Russian Far East: 1996-2002 results. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 223-224 (2004): 735-739.
- Derevianko A. P., E. I. Derevianko, S. P. Nesterov, A. V. Tabarev, K. Uchida, D. Kunikita, K. Morisaki and H. Matsuzaki 2017 New Data on the Chronology of the Initial Neolithic Gromatukha Culture, Western Amur Region. *Archaeology, Ethnology and Anthropology of Eurasia* 45(4): 3-12.
- Derevianko A. P., S. P. Nesterov, A. V. Tabarev, S. V. Alkin, K. Uchida, D. Kunikita, K. Morisaki and H. Matsuzaki 2020 Novopetrovka III—an Early Neolithic Site in the Western Amur Basin and Its Chronology, *Archaeology Ethnology and Anthropology of Eurasia* 48(4): 57-66.
- Kunikita D., K. Yoshida, Y. Miyazaki, K. Saito, A. Endo, H. Matsuzaki, S. Ito, T. Kobayash, T. Fujimoto, A. M. Kuznetsov, A. A. Krupyank and A. M. Tabarevg 2007 Analysis of radiocarbon dates of an archaeological site in the Russian Far East: The marine reservoir effect as seen on charred remains on pottery, *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section B: Beam Interactions with Materials and Atoms*, Vol. 259, Issue 1: 467-473.
- Kunikita D., L. Wang, S. Onuki, H. Sato and H. Matsuzaki 2017a Radiocarbon dating and dietary reconstruction of the Early Neolithic Houtaomuga and Shuangta sites in the Song-Nen Plain, Northeast China, *Quaternary International* 441: 62-68.
- Kunikita D., A. Popov, B. Lazin, K. Morisaki and H. Matsuzaki 2017b Dating and stable isotope analysis of charred residues from Neolithic sites in the Primorye, Russian Far East. *Radiocarbon* 59 (2): 565-573.
- Kuzmin Y. V., M. P. Richards and M. Yoneda 2002 Palaeodietary patterning and radiocarbon dating of Neolithic populations in the Primorye Province, Russian Far East, *Ancient Biomolecules*, Vol.4(2): 53-58.
- Fukuda M., M. A. Gabrilchuk, D. Kunikita, K. Uchida, E. Jang, O. V. Yanshina, D. Natsuki, M. V. Gorshkov and I. Ya. Shevkomud 2022 Radiocarbon Dates in the Neolithic East Amur River Basin: Khabarovsk Krai to Jewish Autonomous Oblast (2021 edition). M. Fukuda and D. Natsuki (eds.), *Northern Expansion of Temperate Neolithic Culture in Northeast Asia and Adaptation Limitations Volume III: Topics in the Northeast Asia archaeology*, 122-155.
- Андреева, Ж. В. 1991 *Неолит юга Дальнего Востока: Древнее поселение в пещере Чёртовы Ворота*. Москва Наука. ИИАЭ ДВО РАН.
- Батаршев, С. В. 2009 *Руднинская археологическая культура в Приморье*. ООО «Резя».
- Деревянко, А. П. 1970 *Новопетровская культура Среднего Амура*. Новосибирск. АН СССР.
- Деревянко, А. П., Богданов, Е. С., Нестеров, С. П. 1999 *Могильник Найфельд*. Новосибирск. ИАЭТ СО РАН.
- Деревянко, А. П., Нестеров, С. П., Алкин, С. В., Петров, В. Г., Волков, П. В., Кудрич, О. С., Канг Чан Хва, Ли Хон Чжон, Ким Кэн Чжу, О Ён Сук, Ли Вон Чжун, Ян На Ре, Ли Хё Ён. 2004 *Материалы археологического изучения памятника Новопетровка- III на амуре в 2003 году*. Новосибирск, Чечжу. Российская академия наук сибирское отделение институт археологии и этнографии фонд культуры и искусства чечжу республика Корея.
- Деревянко, А. П., Забияко, А. П. (ред.) 2008 *История Амурской области с древнейших времен до начала XX века*. АмГУ и др.

- Дьяков, В. И. 1992 *Многослойное поселение рудная пристань и периодизация неолитических культур Приморья*. Владивосток. Дальнаука.
- Филатова И. В. 2008 *Орнаментальные традиции Нижнеамурского неолита*. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. ИИАЭт СО РАН.
- Габрильчук, М. А., Фукуда, М., Горшков, М. В. 2018 Исследования поселения и могильника на острове Змеином в 2016 году. *Мультидисциплинарные исследования в археологии* 2008-1: 107-113.
- Габрильчук, М. А. 2020 Многослойный памятник Харпичан-4. Комплексы неолитических культур (Нижнее Приамурье). *Записки Гродековского музея* 39: 22-37.
- Зайцев, Н. Н., Болотин, Д. П., Волков, Д. П., Забияко, А. П., Кобызов, Р. А., Коробий, Е. Б., Шеломихин, О. А., Щербинский, Е. В. 2019 *Древнее искусство Приамурья*. Благовещенск: Издание Центра по сохранению историко культурного наследия Амурской области.
- Конопацкий, А. К. 1990 Керамика эпохи неолита в памятнике Сусанино-4 (Нижний Амур). *Древняя керамика Сибири*. Новосибирск. С.9-18.
- Коваленко, С. В. 2017 История исследования осиноозерской поздненеолитической культуры западного приамурья. *Гуманитарные науки в Сибири* 24(2): 26-32.
- Клюев, Н. А., Яншина, О. В., Кононенко Н. А. 2003 Поселение Шекляево-7 Новый Неолитический Памятник в Приморье. *Россия и АТР* 4(42): 5-15.
- Клюев, Н. А., Пантюхина, И. Е. 2006 Новые памятники раннего неолита Приморья (стоянка ЛЗП-3-6). *Пятые Гродековские чтения: Материалы Межрегиональной научно-практической конференции*. Хабаровск. ХККМ. С.84-87.
- Клюев, Н. А., Гарковик, А. В. 2008 Новые данные о неолите приморья (по материалам исследований 2000-х годов). *Неолит и неолитизация бассейна Японского моря: человек и исторический ландшафт*, Владивосток. С.85-97.
- Кузнецов, А. М. 2002 Древнее поселение в пещере Чёртовы Ворота и некоторые проблемы неолита Приморья. *Российская археология*, 2002-2. Москва. РАН. С.17-29.
- Кузьмин, Я. В., Орлова Л. А., Сулержицкий Л. Д., Джалл Э. Дж. 1995 Радиоуглеродная хронология древних культур эпох камня и бронзы (Дальний Восток России). *Российская археология*, 1995-3. Москва. РАН. С.5-12.
- Малявин, А. В. 2007 *Отчёт о раскопках неолитического поселения Харпичан-4 (Солнечный район Хабаровского края) в 2006 году: отчёт о НИР*. Хабаровск. ГУК ХККМ им. Н.И. Гродекова.
- Малявин, А. В. 2008 Харпичан-4: многослойный неолитический памятник (Приамурье). *Окно в неведомый мир: сб. ст. к 100-летию со дня рожд.* Новосибирск. Изд-во ИАЭТ СО РАН. С.150-155.
- Махинов, А. Н. 2006 *Современное рельефообразование в условиях аллювиальной аккумуляции*. Владивосток. Дальнаука.
- Медведев, В. Е., Филатова, И. В. 2014a Материалы раннего неолита памятника Петропавловка-остров. Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий, Т-20. Новосибирск. ИАЭ СО РАН. С.60-64.
- Медведев, В. Е., Филатова, И. В. 2014b Поселение Амурский Санаторий: неолитические комплексы. Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий, Т. 20. Новосибирск. ИАЭ СО РАН. С.65-68.
- Медведев, В. Е. 2000 Поселение Перевал на юге Приморья История и археология Дальнего Востока. *История и археология Дальнего Востока. К 70-летию Э.В. Шавкунова*. Владивосток. Изд-во Дальневосточного университета. С. 40-48.
- Морева, О. Л., Попов, А. Н., Фукуда М. 2002 Керамика с веревочным орнаментом в неолите Приморья. *Археология и культурная антропология дальнего востока и центральной Азии*. Владивосток. ИИАЭ ДВО РАН. С.57-68.
- Морева, О. Л., Попов, А. Н. 2003 Культурная принадлежность остродонной керамики Бойсмана-2. *Проблемы археологии и палеоэкологии Северной, Восточной, и Центральной Азии*. Владивосток. ИИАЭт СО РАН. С.176-179.
- Морева, О. Л. 2005 *Керамика Бойсманской Культуры (по материалам памятника Бойсмана-2)*. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. ДГУ.
- Морева, О. Л., Батаршев, С. В., Попов, А. Н. 2008 Керамический комплекс эпохи неолита с многослойного памятника Ветка2 (Приморье). *Неолит неолитизация бассейна Японского моря: человек и исторический ландшафт*. Владивосток. С.131-160.
- Мыльникова, Л. Н. 1999 *Гончарство неолитических племён Нижнего Амура (по материалам поселения Кондон-Почта)*. Новосибирск, Изд во ИАЭ СО РАН.
- Нестеров, С. П., Алкин, С. В., Петров, В. Г., Канг Чан Хва, Орлова Л.А., Кузьмин Я.В., Имамура, М., Сакамото М. 2005 Результаты радиоуглеродного датирования эпонимных памятников громатухинской и новопетровской культур Западного Приамурья. *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий: Материалы Годовой сессии*. Том XI. Часть I. Новосибирск. ИАЭТ СО РАН. С.168-172.
- Окладников, А. П., Деревянко, А. П. 1977 *Громатухинская культура*. Новосибирск. СО РАН.
- Окладников, А. П. 1984 *Керамика древнего поселения*

- Кондон (Приамурье). Новосибирск. Наука.
- Попов, А. Н., Морева, О. Л., Батаршев, С. В., Дорофеева, Н. А. 2005 Новые материалы по неолиту Восточного Приморья (результаты исследований 2005 года). *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий*, XI. С.184-189.
- Попов, А. Н., Батаршев, С. В. 2007 Материалы руднинской культуры на памятнике Лузанова Сопка-2 в Западном Приморье. *Северная Евразия в антропогене: человек, палеотехнологии, геоэкология, этнология и антропология*, Т. 2, Иркутск: Изд-во «Оттиск». С.101-111.
- Лынша, В. Л. 1989 Сергеевка-1 новая неолитическая стоянка на юге Приморья. *Проблемы краеведения (Арсеньевские чтения)*. Уссурийск. С.41-43.
- Лынша, В. А., Тарасенко, В. Н. 2015 Проблемы археологической типологии и выделения культур в Приморье в свете новейших исследований в долине р. Иман (Красноармейский район). *Первобытная археология Дальнего Востока России и смежных территорий Восточной Азии: современное состояние и перспективы развития*. Владивосток: ИИАЭ ДВО РАН. С.33-62.
- Шевкомуд, И. Я. 2003 Кондонская неолитическая культура на Нижнем Амуре. *Проблемы археологии и палеоэкологии Северной, Восточной, и Центральной Азии*, Владивосток. ИИАЭт СО РАН. С.214-218.
- Шевкомуд, И. Я., Горшков, М. В. 2007 К вопросу о кондонской культуре в Нижнем Приамурье (исследования поселения Князе-Волконское-1 в 2006 г.). *Северная Евразия в антропогене: человек, палеотехнологии, геоэкология, этнология и антропология*, Т. 2, Иркутск: Изд-во «Оттиск». С.306-310.
- Шевкомуд, И. Я. 2008 Пластичные комплексы и культурные традиции в каменном веке Нижнего Приамурья (общий обзор). *Окно в неведомый мир: сборник статей к 100-летию со дня рождения академика Алексея Павловича Окладникова*. Новосибирск: ИАЭт СО РАН. С.174-182.
- Шевкомуд, И. Я., Кузьмин, Я. В. 2009 Хронология каменного века Нижнего Приамурья (Дальний Восток России). *Культурная хронология и другие проблемы в исследованиях древностей востока Азии*. Хабаровск: ХКМ им. Н. И. Гродекова. С.7-46.
- 金恩瑩 2010 「러시아 연해주와 주변지역 신석기시대 전기 토기의 편년과 동태」『古文化』76: 55-101
- 김용간, 서국태 1972 「서포항 원시 유적 발굴보고」, 『고고민속 논문집』4, 사회과학출판사
- 金材胤 2012 「목단강 유역의 앵가령 하층 문화에 대한 검토」『嶺南考古學』62: 5-22
- 클류에프, 안쉬나·金材胤 2007 「연해주 신석기시대의 최신자료 - 셰골라예보 7 유적 -」『考古広場』1: 389-400
- 林尚澤 2016 「西浦港 2 期 土器 再検討와 東北亞 繩線文土器」(西浦港 2 期土器再検討と東北亞繩線文土器)『湖西考古學』35: 38-63
- 국립문화재연구소 2004 『高城 文巖里 遺蹟』
- 王立新 2018 「后套木嘎新石器时代遺存及相關問題研究」『考古學報』第 2 期: 141-164
- 吉林省文物考古研究所 1988 「吉林鎮賚縣黃家圈子遺址發掘簡報」『考古學報』1988-2: 141-150
- 吉林大学边疆考古研究中心·吉林省文物考古研究所 2013 「吉林白城双塔遺址新石器时代遺存」『考古學報』2013-4: 501-538
- 吉林大学边疆考古研究中心·吉林省文物考古研究所 2016 「吉林大安市后套木嘎遺址 A Ⅲ 区發掘簡報」『考古』2016-9: 3-24
- 黑龍江省文物考古工作隊 1979 「密山縣新開流遺址」『考古學報』1979-4: 491-517
- 黑龍江省文物考古研究所·吉林大学考古學系 1997 「黑龍江省肇源縣小拉哈遺址發掘簡報」『北方文物』1997-1: 34-44
- 黑龍江省文物考古研究所·吉林大学考古學系 1998 「黑龍江肇源縣小拉哈遺址發掘報告」『考古學報』1998-1: 61-101
- 黑龍江省文物考古研究所·吉林大学考古學系 2001 「河口与振興 - 牡丹江蓮花水庫發掘報告 (一)」科学出版社
- 趙賓福 2011 「牡丹江流域新石器文化序列与編年」『華夏考古』2011-1: 58-66
- 郝思德 1984 「樺川万里霍通原始社会遺址調查」『黑龍江文物叢刊』第 1 期: 35-42
- 段天環·王立新·湯卓煒 2013 「吉林白城市双塔遺址一, 二期遺存的相關問題」『考古』2013-12: 58-70
- 梁思永 1932 「昂昂溪史前遺址」『国立中央研究院歷史言語研究所集刊』4-1. (1959 『梁思永考古论文集』: 58-90 所収)
- 楊永才 2016 「黑龍江饒河縣漁豐南城址發見的新石器时代文化遺存」『北方文物』第 2 期: 12-16

図版出典

- 図 1・17: 筆者作成
- 図 2: 1~17 (福田ほか 2021)
- 図 3: 1~7 (福田ほか編 2011)、8・9 (福田・夏木編 2022)、10 (Дьяков 1992)、11 (Клюев и др. 2003)
- 図 4: 1~12 (福田ほか編 2011)、13 (Медведев, Филатова 2014a)、14 (Медведев, Филатова 2014b)、15 (福田・夏木編 2022)、16~21 (福田ほか 2021)
- 図 5: 1~7 (福田ほか編 2011)、8~11 (福田ほか 2021)、12~14 (楊 2016)、15・16 (Малявин 2008)、17~21・23・24・26・29 (福田・夏木編 2022)、22 (Медведев, Филатова 2014b)、25・27・28・30 (Fukuda et al. 2022)
- 図 6: 1~8・10~13 (Филатова 2008)、9 (Окладников 1984)、14 (内田 2011)、15 (Конопацкий 1990)、16 (加藤 1998)、17 (福田・夏木編 2022)、18・19 (Медведев, Филатова 2014a)、20・21 (郝 1984)、22 (Деревянко и др. 1999)
- 図 7: 1・7・8・21・23・24 (Fukuda et al. 2022)、2・3・6・10・11~16・18・19 (福田ほか編 2011)、4・5 (福田ほか 2021)、9・17・20・22 (福田・夏木編 2022)
- 図 8: 25・29・32・33・39・40・41 (Fukuda et al. 2022)、26・30 (福田ほか編 2011)、27・28・36・38 (福田・夏木編 2022)、31・34・35 (福田ほか 2021)、37 (内田 2011)
- 図 9: 1~6・12~14 (福田ほか編 2011)、7~11・15~19 (福田・夏木編 2022)

- 図10：1～8・10～14（Попов, Батаршев 2007）、9（Kunikita et al. 2017）、15（伊藤・加藤編2005）、16～24（Дьяков 1992）
- 図11：1～10（Батаршев 2009）、11～19・23・24（Клюев и др. 2003）、20～22（Клюев, Гарковик 2008）、25～28（Дьяков 1992）、29～34（伊藤・加藤編2005）、35～41（Кузнецов 2002）
- 図12：1～8（黒龍江省文物考古工作隊1979）、9・10（Морева 2005）、11～16（Лынша, Тарасенко 2015）、17・18（Kunikita et al. 2017）、19～27（Морева и др. 2008）、28（Батаршев 2009）、29～31（伊藤・加藤編2005）
- 図13：1～23（黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系 2001）
- 図14：a～d（福田ほか編2011）、e・f（福田・夏木編2022）、g・h（福田ほか2021）、i～k（Дьяков 1992）
- 図15：a・b（福田ほか編2011）、c～f（福田・夏木編2022）、g（Зайцев и др. 2019）、h～k（福田ほか2021）、l（黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系2001）、m～o（Морева 2005）、p～s（Клюев и др. 2003）、t・u（Дьяков 1992）
- 図16：a～c（Филатова 2008）、d（Окладников 1984）、e（Конопацкий 1990）、f（Окладников, Деревянко 1977）、g（オクラドニコフ 1975）、h・i（Лынша, Тарасенко 2015）、j（黒龍江省文物考古工作隊1979）、k（黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系2001）、l～n（Морева и

- др. 2008）、o・p（Морева 2005）、q（Медведев 2000）、r（김용간, 서국태 1972）、s・t（国立文化財研究所2004）
- 図18：1・5（Деревянко и др. 2004）、2～4（Деревянко 1970）、6～9（Derevianko et al. 2020）
- 図19：1～9・13・14（吉林大学边疆考古研究・吉林省文物考古研究所2013）、10～12・17～19（段ほか2013）、15・16（吉林省文物考古研究所1988）
- 図20：1～10（吉林大学边疆考古研究・吉林省文物考古研究所2016）、11・12（吉林省文物考古研究所1988）、13～18・20・21・22・23（大貫1987原図を再トレース）、19（大貫1987）
- 図21：1～14（黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系 1998）
- 図22：1～4（Derevianko et al. 2020）、5～7（吉林大学边疆考古研究・吉林省文物考古研究所2013）、8・9（吉林大学边疆考古研究・吉林省文物考古研究所2016）、10～12（大貫1987原図を再実測）
- 図23：1（内田ほか2011原図を再トレース）、2～4（内田ほか2011）
- 図24：ビジャンー4・ハルピチャンー4土器写真（福田正宏氏提供）
- 図25：1・2（Филатова 2008）、3・4（Морева и др. 2008）、5～9（Морева 2005）

Early and Middle Neolithic Pottery Groups in Northeast Asia as Viewed from the Russian Far East

Eunhye JANG

This paper clarifies the typological changes of the Amur net pattern pottery group and the linear relief pattern pottery group in the eastern (Songhua River estuary area, northeastern part of the Sredneamurskaya Lowland, around Lake Evoron, Amur River estuary / Mudan River basin, along Hankar area, central part of the Primorsky region, southeastern part of the Primorsky region) and western (Zeya-Bureya Plain, Songnen Plain) parts of the Far East, and organizes the ^{14}C dating values. This allowed us to sort out the parallel relationships between regions in the Early and Middle Neolithic periods, and to consider the reality of contact and exchange between the east and west of the Far East.

The transition of Neolithic pottery in the Russian Far East can be understood in three stages: Phase I (Amur net pattern stage 1, linear relief pattern stage 1: ca. 8500-7000 ^{14}C BP), Phase II (Amur net pattern stage 2, linear relief pattern stage 2: ca. 7000-6500 ^{14}C BP), and Phase III (Amur net pattern stage 3, linear relief pattern stage 3: ca. 6500-5800 ^{14}C BP). The boundary between the Amur net pattern series and the linear relief series can be found in the Songhua River estuary area, which is a middle zone between the Zeya-Bureya Plain and the Sredneamurskaya Lowland, and in the Mudan River basin, which connects the Songnen Plain and the Primorsky region. The phenomenon of contact and movement beyond the east-west pottery cultural sphere became pronounced from Phase II. In Phase II, a hybrid pottery style of the linear relief and Amur net pattern series appeared in the Songhua River estuary area and the Mudan River basin, and by Phase III, the Amur net pattern series had expanded to distant areas (Zeya-Bureya Plain: Sergeevka, Novopokrovka sites, central and eastern part of the Korean Peninsula: Munamri site)."

러시아 극동을 통해 본 동북아시아 신석기시대 전·중기 토기군

장은혜

이 논문에서는 극동 동부(송화강하구역·스레드네 아무르스카야 저지대 북동부·에보론호 주변·아무르강 하구역 / 목단강유역·연한카지구·연해주 중부·연해주 남동부), 극동 서부(제야 브레야평원·송눈 평원)의 아무르편목문 토기군과 용기선문 토기군의 형식 변화를 소지역 단위로 밝히고, ^{14}C 년대를 검토했다. 그리고 신석기시대 전·중기의 지역간 병행관계를 정리한 후 극동 동서의 접촉·교류 실태를 고찰했다.

검토 결과, 러시아 극동 신석기시대 전·중기 토기의 변천은, 제 I 단계(아무르편목문 1단계·용기선문 1단계: ca. 8500~7000 ^{14}C BP), 제 II 단계(아무르편목문 2단계·용기선문 2단계: ca. 7000~6500 ^{14}C BP), 제 III 단계(아무르편목문 3단계·용기선문 3단계: ca. 6500~5800 ^{14}C BP)로 이해할 수 있었다. 그리고 극동 동부 아무르편목문계와 극동 서부 용기선문계의 경계는 제야·브레야 평원과 스레드네 아무르스카야 저지대의 중간 지역인 송화강하구역, 그리고 송눈평원과 연해주의 중간 지역인 목단강유역에서 찾을 수 있었다. 한편, 러시아 극동 동서 토기문화권을 넘은 접촉·이동 현상은 제 II 단계 이후 현저화하는 것을 알 수 있었다. 제 II 단계에 송화강하구역과 목단강유역에 용기선문계와 아무르편목문계의 절충토기 형식이 나타난다. 그리고 제 III 단계가 되면 아무르편목문계 토기는 원격지(제야·브레야평원: 세르게이예프카, 노보포크로프카유적, 한반도중동부: 문암리유적)까지 진출 하는 현상을 확인할 수 있다.